

しめ時に商隊を發遣するに過ぎず。清國に對するや専ら平和を旨とし條約を遵守して善後の策を施行せり。然るに清國は之に異り國富み兵強く且條約も亦自己の爲に便益なりしに因り若し熾んに殖民を黑龍江に起し以て持久の長策を實施せば後日に至るも曾に之を割讓するの不幸なきのみならず大に威權を地方に擴張する事を得しは疑を容れず初康熙帝は茲に觀る所ありセイヤ河嘴の附近に於て屯田兵を置きしも其後嗣の清帝は此良計を放棄し黑龍江の殖民に對して毫も注意せず康熙帝の設置し、屯田兵の衰滅をも顧みず現世紀に至り遂に此地を擧て露國に讓與せざるを得ざるの不幸を來せり。故に黑龍江地方の割讓は實に清廷の六十年間の怠慢に基因すと云ふも不可なし。

第六節 恰克圖條約

西紀一六九一年^{康熙三〇}トボリスク將軍は露人ユーシンに命じ當時兵を率ゐて喀爾喀の地に駐屯せる準噶爾汗^{ジュンガ}爾丹^{カハルダン}の許に使せしむ西紀一六九三年^{康熙三二}ユーシン準噶爾汗の幕庭に達す。噶爾丹曰はく貴國若し雅克薩城^{ヤクサク}を恢復するの舉あらば授

兵を出さむとユーシン應せず。此年十一月十六日露國の使節イェズランネデス陸路より北京に達し三日の後清帝に謁見して滿洲の各市に自由貿易を開き商隊を北京に遣すを請ふ。清帝露國が準噶爾汗を援けざりしを以て其要求を許さず。但し北京の貿易は三年に一次とし商隊の人員は二百名を越ゆるを許さず。其貿易は納税を免じ鄂羅斯館^{オロス}に駐留して八十日を限りて歸國するものと規定す。西紀一六九四年^{康熙三三}二月二十二日イェズランネデス清帝に謁して歸國を報じ翌年一月十三日莫斯科に達し露帝に復命す。露清兩國例規を立て、貿易せしは此年を以て初とす。又露清國疆の貿易は喀爾喀の各部に於てのみ行ひしが準噶爾汗亡後喀爾喀各部は清國に附屬し露清初めて接壤し互市條約の必要を惹き起せり。

西紀一六九七年露人アトラス、モロスコの二人哈薩克人、裕噶吉爾人を率ゐアナドイル寨を發して堪察加半島^{カムチャツカ}に出征して土人を服し堪察加河岸に上堪察加寨^{カムチャツカ}を建設し毛皮税を徵收す。其部下セリユコフ留りて之を守りしが久しく援兵來らざるを以てアナイドル寨に還らんとし固哩雅克人^{コリヤク}に殺さる。西紀一七〇〇年哈薩克人コベレフ、半島の地に至りてセリユコフの爲に復讐し其後再び上堪察加寨を起し

又ボリシエレツク寨を建設す。蓋し此兩地は堪察加半島に於て最も樞要の位置たり。西紀一七〇二年哈薩克人シノーウイ一隊を率ゐてヤクートスクを發し堪察加河岸の要地に下堪察加寨を起す。西紀一七〇七年堪察加人は哈薩克兵の收斂に苦み蜂起してボリシエレツク寨を陥る。是より先露國政府はアトラスを以て堪察加に於る哈薩克兵の長官となす。アトラス赴任して土人を攻撃し翌年之を鎮定せしが爾後其心大に驕りて衆望を失ひ西紀一七一一年部下の爲に暴殺せられしとぞ。是を堪察加半島征服の顛末と爲す。

露帝彼得は西紀一八八九年皇姉ソフィアの攝政を廢し帝位の實權を握りしより銳意内治の改善に着手し西紀一七〇三年ネヴァ河岸にペテルブルクを建設して露國の帝都となす。西紀一七〇八年西伯利を以て一州となし全國八州の一として西伯利省を同地に移し將軍を改めて知事となす。翌西紀一七〇九年彼得帝、勁敵繼典王カル、十二世をブルトワの野に破り國勢益隆々たり。此年哈薩克遠征隊エニセイスクの南方サヤン山の北麓を攻略し西は烏刺爾嶺より東は堪察加に至るまで大概露國の版圖に歸す。其後西紀一七一九年六月十日西伯利全部を分ちてトボリ

スク、エニセイスク、イルクートスクの三省となす。イルクートスクは西紀一六五一年露人イワンなるものゝ初めてアングラ河の一島に設けし冬居場に起り六一年に至りて之を其右岸に移し寨を築きて土人に備へ八六年寨を府に改む。

土爾扈特部は第二章第八節に記したる如く四衛拉特の一なり。其先元の臣翁罕に出づ數傳して和鄂爾勒克に至り準噶爾部に屬するを欲せず。西紀一六一六年天命伊犁を去り同三〇年^{天命}大衆を携へて露領に入り各地を蹂躪す。和鄂爾勒克アスタラハンに戦死し西紀一六五九年遂に露國に服屬す。四世の後阿玉奇に至り始めて自ら汗と稱しドン河とトニト河の間に游牧し露國の軍に従ひて數々功あり。噶爾丹跋扈以來久しく清國に進貢せざりしが西紀一七一二年^{康熙}復た方物を貢す。清帝内閣侍讀圖理琛等をして使節となし其國情の要領を得んと欲す。往復三年道を假るに露領の西伯利カザンスク兩省に於てし西紀一七一五年^{康熙}を以て歸國し其國の地理山川民風物産等を詳記して覆奏す。此時露國の傳教師圖理琛に隨從して始めて北京に来る。是より以後露國の傳教使は北京を去りしとなし。而して土爾扈特部は宗教上の關係を西藏に有し政治上の關係を清國に有するを以て露國

の厚遇を受くるも故國を慕ふの念常に絶えず、其後露國其宗教を基督教に改めしめんとするに及び清國を慕ふの念益熾なるに至れり。

露帝彼得は西紀一七一九年^{康熙五十八年}を以てイスマイルを正使としランゲを副使とし國書を齎して清國に至り通商條約の改正を請求せしむ翌年イスマイル等北京に達し清帝に謁し、も遂に其使命を全うする能はず、已にして彼得殂し、西紀一七二五年^{乾隆五年}皇后ガダリン位に即き西紀一七二七年^{乾隆五年}正ラグジンスキーを以て使節に任じ北京に至りて條約改正を請求し蒙古の疆界を議せんとす。清帝其例規に違ふを以て北京に於て之を議するを許さず、外蒙古の郡王策凌、内大臣四格、侍郎圖理琛等を欽派し、後貝加爾の布拉克河上に會同して商議せしむ、兩國各々勘査委員を派出して疆界を査定し八月に新約十一條を議定し其翌西紀一七二八年^{乾隆六年}正兩國政府の批准を経たり、之を布拉克條約一に恰克圖條約と稱す、其要領を擧ぐれば左の如し、逃亡人は兩國共に之を搜索して還附し恰克圖に貿易場を開設し、アルグニ河岸よりチイクタチランに至るまではチユク河を以て界とし、以西はボモシヤナイ嶺を以て界とし、烏特河地方を中立地となし、通商の規定を改め、北京に教會堂の設立を許可

する等にあり、此時より兩國文書の往復は兩國皇帝の名を以てせずして清國は理藩院露國は薩那特衙門の名を以てするに決す、此條約成るの後露國政府は北京貿易の不利なるを以て之を廢して専ら恰克圖に於て貿易を營む事となり、其清國に屬する市場を買賣城と稱す、此時より露國は茶葉の輸入増加し皮の輸出減少して輸出入の不平均を生ずるに至れり、但し此條約締結以來清露兩國の貿易並に國交は漸く其端緒を開き現世紀に至るまで更に變更せず。

第七節 中亞侵略の初期

露國の中亞侵略の成功は主として現世紀にあり、雖も其端緒は已に彼得帝の時に萌せり、故に本章の終に臨みて聊か略叙する所あらむ。

露國と中央亞細亞とは舊來通商の關係あり、エルマークが西伯利城を略取せる時布哈爾と通商を開きしは既に上に述べしが如し、然れども其地方の實情に至りては未だ詳細なる探究を経ざりしが西紀一七一三年トルクマン人ホツジャ、チフエスなるもの露廷に至りアムー、タリア河口の沙金に富むを説く、時にトボリスクの鎮

將ガガリオンも亦奏して曰く小布哈爾(東トルキタンの内ダリア河邊のエルケンに莫大なる沙金ありと。ダリアとはトルキ語にて河の義なるに之を認めてアムィダリアとなし)と云ふ以て其地理の明ならざりしを知る可し彼得帝是に於て遂に意を遠征に決し西紀一七一四年探討の兵を兩道より出す其一は陸軍中尉チエルカスキー、ベコーウヒチに任じて裏海より基華に向はしめ、一は大尉ブフコーリツに任じて西伯利より小布哈爾に向はしむ。

同年ベコーウヒチ、アスタラハンより船に搭じ裏海に出でしが流水に妨げられて兵を回へし翌年再び海に航してチユブ、カラガン岬に至りホッジャ、チフェスがウズベク人が露西亞を畏れて其河身を塞ぎしと稱するアムィダリアの舊流を探らしめ其報を得て復命す露帝大に之を嘉みしベコーウヒチを大尉に進め再發せしむ西紀一七一六年ベコーウヒチ三度アスタラハンを發してチユブ、カラガン岬に航し兵を分駐して要塞を築かしめ餘兵を以てカラスノウラツスク灣に上陸し又一堡を構ふ翌年基華露兵を邀撃せんとして大に其兵を集むるの報ありベコーウヒチ急にアスタラハンに赴き新に兵を集めてグリエフに直航し同年六月の初遂に基華に向ひ

て出陣す八日にしてエムバ河に達し七週間を経てカラカチに達す此地基華を距る四日程にあり基華兵來り襲ひ相戦ふ事二日屢と敗を取る基華王野戰の利なきを見て詐りて媾和條約を結びベコーウヒチを導きて基華に赴く都城に近づくに及び旅宿の便を圖ると稱して其兵を分たしめ其相距る稍遠きに及び一齊掩撃してベコーウヒチを始め盡く露西亞兵を殺すトルクマン人等之を聞きて争ひて裏海沿岸の新砦を圍む守將敵する能はざるを見て各其城を棄つ。

西伯利道の遠征隊長陸軍大尉ブフコーリツは西紀一七一四年十一月トボリスクに抵りて出陣の準備をなし翌年七月兵三千を率ゐてイルチシ河を溯りタラに於て別路の騎兵を合し十月一日ヤムイセフ湖邊に上陸して越年の計を爲す喀爾瑪克人、準噶爾人等大兵を以て來り攻むブフコーリツ敵する能はず西紀一七一六年四月圍を破りてイルチシ河を下りヤム河の會點に至りてトボリスクの鎮將ガガリオンに顛末を報じ其許可を得てヤムスク城を建設す西紀一七一七年ガガリオン新にヤムイセフ湖邊に一城を築きヤムスクとの中間イルチシ河岸にセレーヂンスク砦を置く翌年進みてセミバラチンスクに城き進取の事業旺盛なるに際し少將

リハリヨフ之に代る。西紀一七二〇年リハリヨフ、トボリスクを發シイルチシ河沿岸の諸砦を経てザイサン湖に出づ。時に準噶爾人力を東方に傾けて清國と争ひしにより邊界の地皆空し。因て湖水を東に渡りイルチシ河の上流に出てしに準噶爾人の抵抗に遭ひしかば進むを得ず。歸路アルタイ谷峽の要地にウスチ、カイメノゴルスク砦を建設してイルチシ河流を固め後病を得てペテルブルクに歸る。かくて有名なる彼得帝のエルケン沙金場探討の業も其結果唯イルチシ河流域の占領に止るのみにして了れり。

彼得帝の死後露國內外多事にして暫く中央亞細亞を以て意とせず。當時ウラル河以東の曠野にはキルキズ小部落游牧シイルチシ河西南の曠野にはキルキズ中部落及喀爾瑪克部落游牧シ以て露領と界す。キルキズ部落は土爾其韃靼種族に屬シ自ら哈薩克と稱す露人は之をキルキズ、カイザクとも稱す。喀爾瑪克は前節に記シ土爾其特にしてキスキズ人之をカルマクと稱するにより此稱あり。以上の諸部は常に露西亞の邊患たりしのみならず亦自ら搏噬して争亂斷絶せず。西紀一七三二年キルキズ小部落他部の窘する所となり其酋長所部を率ゐて露西亞に歸服せん事

を乞ふ續ぎてキルキズ中部落の中亦同じく歸服するものあり。露領の境界線次を逐ふて兩河岸より南進シヲムスクウラルスク、ヲレンブルグ等の屯田兵營漸く成り西紀一七八二年には露西亞のカテリナ女帝ヲレンブルグに邊境事務所を設け専ら游牧野民の管轄に従事せしむるに至る。

第五章 莫臥兒帝國の勃興並に其瓦解

(西紀一五二六—西紀一七四八)

第一節 回教徒の印度侵入

亞刺比亞の豫言者回々教祖摩哈默は西紀五七〇年を以て生まれ西紀六二三年を以て死す。摩哈默西紀六二二年故郷なるメッカ市を去てメデナ市に移る。是を回教紀元元年となす。其死後アバクル、ヨマル、アリスマン、アリ相繼ぎてメデナに君臨す。是をカリフと稱す。繼嗣の義なり。ダマスカスのカリフ統(西紀六六〇年—西紀七五〇年)バクダットのカリフ統(西紀七五〇年—西紀一二五八年)之に次て教界並に政界の全權を握る。初め摩哈默の死後亞刺比亞の回教徒は左手にコーラン(經典)を右手に刀劍を携へて亞細亞の西部を征服し遠く印度の境に及びしが已にして波斯人、土耳古人、阿富汗人等は亞刺比亞人の統治を受くるを好まず兵を擧げて獨立し唯其教を奉ずるのみ。獨立國中最も有名なるを土耳古人の建設し、哥疾寧朝と

なす。哥疾寧は今のカブルの西南なる小都會なり。回教徒印度侵入の起源は西紀六四七年頃ラスマン在位の時孟買附近に兵艦を送りし時にあり。其後西紀七一年ダマスカス朝の頃カシムなるものシンド地方に侵入せしが三年の後夭死して征服の事業茲に挫折し西紀八二八年には印度國內又一の回教徒を見ず。蓋し回教徒が印度に侵入して永久の結果を生じ、は哥疾寧朝に始まる。

パンジャブ境上に於て印度教と回教と衝突を生じ、は西紀九七七年にして同地の印度王ジャイバルと哥疾寧の梭里檀サプクチデンとの間に起れり。西紀九九七年マームド父に嗣ぎて梭里檀となり其在位の間は一方には波斯全部を平げ他の一方には印度の大部分を征服し回教徒の大帝國を建つ。マームド西紀一〇〇一年土耳古人の騎兵を率ゐてヒンジャワルに入りジャイバルを破りて之を擒にしてより印度に侵入する事十二回(或は十七回とも稱す)遂にパンジャブ地方を領有し或は寺院を掠り或は偶像を毀ち其哥疾寧に運べる人畜財寶の數計る可らず。晩年グーセラットなるソムナスの大寺院を滅却したるが如き殊に其暴を極めたり。西紀一〇三〇年マームド死す年六十三。其後百有餘年十四代を経てゴ

ル朝之に代る。

ゴル城の廢址はヘラットの東南百二十哩の地にあり阿富汗人此山城に據りて起り以て哥疾寧朝に抗し遂に西紀一一五二年を以て之を滅しカブル、パンジャブ地方を服す。哥疾寧朝最後の梭里檀バフラムの子クスル難をラホールに避けて印度に於ける最初の回教徒の王朝を建つ。ゴル朝の梭里檀ムハメッド温都斯坦の經路に意あり西紀一一八六年兵を擧てラホールを伐ちクスルの子を擒にす。次で的里の印度王を攻む。的里の印度王時にカミージの印度王と隙ありムハメッド巧に之を利用し先的里を略し(西紀一一九三年?)次でカミージを滅し回教徒の所領ベナレスに達す。其他の印度諸王侯の同地方にあるもの皆南方に走り山野林藪の間に於て新に國を建つ。今なほラジプータナと稱するもの是なり。西紀一二〇六年ムハメッド哥疾寧に還らんとして叛徒の手に仆され阿富汗人の帝國瓦解す。印度の大守クタブウッヂン自立して的里の梭里檀と稱す其身を奴隸種族に出せるを以て史家又之を呼びて奴隸朝と稱す。クタブウッヂンの在位中回教徒の侵略其功を奏し所領遠く東ブラフマポトラ河に及びパンジャブ、温都斯坦其有に歸し印度種族

亦恐るゝに足らず。

西紀一二九〇年阿富汗奴隸朝最後の梭里檀刺客の手に斃れジェラルウッヂンなるもの的里に於て梭里檀の位に即く。時に前朝の恐るゝ所たりし蒙古人種も稍其鋒を收め甥アラウッヂン南方の經路に従事しビルサの殿堂を掠り西部德千のデラグル府(今のドーラタポット)を下し遂に伯父を弑して自立す(西紀一二九五年)。其後諸將を派してグーセラットに克ち(西紀一二九七年)ラジプータナを攻めてチトールを下し(西紀一三〇〇年)兵を德千より半島に進め同地方の印度王を征す。アラウッヂン西紀一三一六年を以て殞す是をキルヂ朝と爲す。蓋し其死後の里に印度人種の叛亂起りパンヂャブの知事ツグラク之を平げてツグラク朝を建つ。時に西紀一三二〇年なり。都を的里を去る遠からざるツグラカバッドの堅城に移す。其子ムハメッド、ツグラク(西紀一三二五年——一三五〇年)の代に至り五穀登らず都をデーラグルに遷さんとして果さず多數の良民を失ひ金貨の代用として銅貨を鑄造し財政上に大恐慌を生じ民心服せず。西紀一三四〇年比ベンガル地方は獨立して一國をなし同四年德千半島地方の印度王は其朝貢を絶てり。ムハメッド、ツグ

ラクの歿後の里の歴史は日を追ひて生氣なく以て帖木兒侵入の日に至る。德干地方の回教徒の軍隊も亦ムハメッド、ツグラクの晩年に於て兵を擧げて其羈絆を脱し阿富汗出生の將官ザフル汗を立て、梭里檀となす(西紀一三三七)。パフマニ王国是なり。世々クルバルガに都すハイダラバッド市の西百五十哩の地に於て今鐵道停車場たり。此時半島の地に井ジャナガル帝國あり西紀一一一八年の建國にして歐洲旅行家のナルシंगाと稱するもの是なり。キストナ河の支流タムバドラ川の河岸井ジャナガル府に都す。交戦止む時なく互に勝敗あり。西紀一五〇〇年頃パフマニ王国分裂して五個の獨立國となり回教徒の勢力萎微して振はず。ビジャブル國は德干の西南に在り西紀一四八九年土耳其の梭里檀アムラス二世の皇子の建る所なり。ゴルコンダ國は其東南に在り西紀一五一二年トルコマンの一冒險家の興す所なり。ア、メ、ド、ス、ゲル國は其西北に在り西紀一四九〇年婆羅門改宗者の建る所なり。ベラル國は其東北にあり西紀一四八四年井ジャナガルより來りたる一印度人の建る所なり。ビダル國は其中央にありて西紀一四九〇年代に於てセオルデア産の一奴隸の創むる所なり。西紀一五六五年以上の諸國聯

合して大に井ジャナガル王をキストナ河畔に破る是をタリコータの役と稱す。井ジャナガル王國支離滅裂又收拾す可らず。

第二節 莫臥兒帝國の起源

帖木兒は成吉思汗の次子察哈台の後にして撒麻兒干に都して國勢を挽回し西紀一三九八年蒙古即ち莫臥兒人を率ゐてパンヂャブ温都斯坦地方に侵入し暴行至らざる所なく翌年代官を的里に置き歸る。ツグラク朝の最後の梭里檀マームド虚器を擁して西紀一四一二年に至る。サイイッド朝之に代りて起り西紀一四五〇年より阿富汗族のロヂ朝又之に代る。阿富汗人は奴隸朝の滅亡より以來印度の史上に其跡を絶ちしが此に至りて復た的里に於て梭里檀と稱す。ロヂ朝は回教の爲にする事殊に力めたりと稱す可く在來の寺院にして滅却を免れしもの眞に稀なり而して其施政一も見る可きなく國內統一を闕き内訌絶ゆる時なし。グーセラット地方は西紀一三九一年より首府をア、メ、ダ、バットに置きて獨立の回教國をなしマルワ地方も西紀一四〇一年ゴル家のデラワルなるものによりて獨立國をな

し都を後にマンツァーに置く。其他ベンガル、徳干地方は既に前節に記し、が如し。但マルワは西紀一五三二年グーセラット王バハツル、シアの兼併する所となる。莫臥兒帝國の大祖バーブルが印度に侵入せる時の的里政府は其政權の及ぶ所實に云ふに足らず。第一章に記し、葡人の初て印度に至りしも亦此、ロヂ朝の時なり傳へ云ふバーブルは帖木兒五世の孫なり。西紀一四八二年を以て生まる。バーブルとは元獅子てふ義なり。齡十二にして父に繼ぎてフェルガナ國王となり。十五歳の時撒麻兒干に克ちジャザルテース、ラクサス兩河の間布哈爾の全部を略す。其後月祖伯人に追はれ西紀一五〇四年阿富汗に入りてカブールを奪ひ王國を建つ。居常印度の征服を志し其機を窺ふ。西紀一五二五年バンデヤアの地方官欸をバーブルに通じラジプータナの盟主チトル王使を遣して莫臥兒兵の里を攻むるの時アグラ市を襲はん事を約す。此年冬バーブル兵一萬を率ゐて印度河を渡り阿富汗梭里檀の大軍をバニバットに破りロヂ朝を滅しての里を占領す。乃ち兵をアグラ市に進む。初めチトル王思へらくバーブルも亦帖木兒の如くの里府を掠らば退去せむ之に乗じて古印度王國を再興するを得むと形勢を觀望す。茲に於て斷然抵抗の

決心をなし西紀一五二七年同市に近きシクリの地にバーブルと戦ひ大敗す。以後ラジプータナの諸王公は復其温都斯坦征服の舉を再ひせず。バーブルは是より重に其力を阿富汗人の驅逐に注ぎ在位四年の後西紀一五三〇年を以て歿す。バーブルの子フーマユーン人君の器なく且回教を棄て、地水火風の自然崇拜を復興せんとす。阿富汗人シル汗ガングス南岸の温都斯坦よりガングスに至るの咽喉チユールナル城を占領し之を扼す。フーマユーン之を討滅する事をなさずして其降を容れ他日の大害を醸す。此頃グーセラットの梭里檀チトル王を攻め其都城を圍むフーマユーン求に應じて之を援け梭里檀を破る。此梭里檀は葡人を驅逐せんとして土耳其の梭里檀の援を求めし同一の人なり。フーマユーン凱旋してアグラ市に入ればシル汗ベンガル占領の報あり。乃ち大に怒り兵を率ゐて東征し先チユールナル城を圍み六ヶ月の後漸く之を降しベンガルに進ませしが時恰も降雨季の初に際し兵士病死するもの夥し。雨季終りアグラ市に歸らんとせしが會々シル汗の襲ふ所となり全軍敗北しフーマユーンは遂に遠く波斯に逃る。時に西紀一五四〇年なり。シル汗復た阿富汗朝を建て印度を治む。フーマユーン異郷に流寓する事十

有餘年波斯王の援軍を得て西紀一五五四年十二月一萬五千の兵を以て印度に入りシル汗の繼嗣を破りて的里並にアグラを復し翌年六月莫臥兒帝國を再興す。莫臥兒人阿富汗人最後の勝敗今や將に一戰にして決せられんとす。フーマユール誤ちて階段より墜落して殞し其成功を見るに及ばず。阿富汗人は西紀一五四〇年より同五五年に至る此時の温都斯坦征服を以て同地領有の口實となし之を忘るゝ能はず。パーブルは曾て帖木兒の侵略を以て其要求を作り後年阿富汗人は亦シル汗の征服を以て温都斯坦占領の理由を構成せんとす。這般の假定は東洋流の空想たるに過ぎず。雖も其東洋史上の潮流を左右する事亦少しとせず。

第三節 アクバル大帝の治世

アクバル大帝はフーマユーンが波斯に向ひて逃走の途上西紀一五四二年十月十四日に生る。西紀一五五六年フーマユーンの里に於て殞するや時に年僅に十四バングジャフに於て阿富汗人の征討に従事せり。老將バイラム汗後見として帷幄の中にありしが小童の皇帝(莫臥兒帝は Padishah)と稱す)となるに及び後見一躍して攝政

となる。此時阿富汗兵の一隊は印度人ヒムの指揮を奉じジュムナの流域を溯りてアグラの里の兩市を奪ひ今や將にバングジャフに進まんとす。莫臥兒帝國の存亡旦夕の間に迫り將校カブルに退却せんとするもの多し。アクバル大帝バイラム汗と共に斷然此議を排し阿富汗兵をバニバットに邀へ大勝を博す。ヒム其目を傷きて捕虜となりバイラム汗爲に殺さる。其後四年莫臥兒人阿富汗人の交戦絶えず。已にしてアクバル年輪十八攝政の制臂を欲せず。親政を布告す。バイラム汗大臣たらんとして得ず他の官職に就くを潔しとせず。一巡禮として將にメツカに向ひて發足せんとす。偶々一阿富汗人あり曾て其父の戰場に於てバイラム汗に殺されしを以て不俱戴天の仇なりとし之を暗殺す。

アクバルは印度に於ける莫臥兒帝國の眞の創建者なり。然れども前代の回教梭里檀の如く文字あるにあらず。父に従ひて波斯に赴くことをなさず。叔父と共にカブルにありて人ど爲りしかば其見聞する處唯戰闘あるのみ。然れども能く古今の歴史に通じ識見遠く庸人の上にあらず。他の回教信徒の如く偶像崇拜者を目するに憎惡の念を以てせず。却て成古斯汗の如く寛容の主義を取り各宗教に對して其待遇

差等を置かず。印度教徒と回々教徒とを打して一丸となし以て一の帝國制度を建て互に相牽制せしめんとす。蓋しツグラク朝の滅亡以來印度に於ける回教帝國は支離滅裂して統一を闕く事恰も二百年に及びコーランの經典は莫臥兒人と土耳其人阿富汗人とを結合するの力なし。アクバルよく大勢を觀破し人種に對し宗教に對し一視同仁の政策を立てたり。是は一世紀以上莫臥兒帝國の結合を保ちし所以にして今なほ英國人印度統轄の秘訣と示す處なり。是をアクバル大帝の治世中に於ける最も重要に而かも最も興味ある政策となす。

此政策の第一着手はラジプータナ諸王の征服にあり。盟主チトル王重婚の制によりて其位地を固くし且同盟諸王の關係を深からしむ。一夫一婦は元來其教とする所なりと雖も諸王は多妻制を見て敢て異まず。チトル王の女を娶るを以て無上の名譽なりとしチトル王に其女を嫁するを以て又其名譽となす。アクバル此策を用ひてラジプータナの盟主となり其軍隊の元帥たらんとす。親ら回教徒に改宗する者にあらざれば娶るを得ずてふ經典の正條を無視し諸王をして又階級制の法律を無視せしめんとし西紀一五六一年兵を出してラジプータナを伐つ。ジャイブル

王ジョドプール王等久しく抵抗し、が其敵する能はざるを見て遂に其女をアクバルに進めて君臣の義を約す。其他の諸王も皆之に倣ひしが惟りチトル王可かず。西紀一五六七年アクバルの兵チトルの都府を圍む府民男女を問はず進みて殉死し國王アラヴリ山中に遁れてウダイプール市を建つ。後にウダイプール王と稱するもの是なり。チトル已に滅しラジプータナ全部アクバル帝に臣事し從來偶像崇拜者として回教徒に疾視せられしもの一變して莫臥兒帝の深く信頼する所となり。アクバル帝は之を用ひて殊に阿富汗人を威服し帝國統一の業を助けし事少からず。回々教徒印度教徒の軌轢を利用し得て巧妙なる者なりと評すべし。然れ共アクバル帝は之が爲に熱心なる回々教徒の信用を害せしや言ふを待たず。西紀一六七五年頃アブルファツルなる年少の學者あり人主を籠絡するの術に長じ大臣の位に昇る。アブルファツル世界の大宗教を研究するの志ありアクバルをして遂に其嗜好を共にせしめ回教學者を放逐して婆羅門教、佛教、拜火教等の學者を招き且使を臥亞に派して基督教の牧師をも其國都に致せり。回教徒の社會には回教紀元千年の終に當り新豫言者現出の説あり西紀一五九一、二年の中に於て、當

代の主現出すべしと。アバル、フアツル帝を説きて親ら當代の主なりとの自信を懐かしむ時にアクバル恰も回教に對する舊信仰の冷却するに際し遂に新宗教を建て、親ら上帝より分出し、ものありと稱し毎朝日出を拜し同時に羣衆の禮拜を受く而して印度教徒に對し十六歳以下の男兒十四歳以下の女兒の結婚を禁じ寡婦の再婚を許し其火刑を廢し、が如き又回々教徒に對し其飲酒の禁を解きて暴飲を戒め晩年多妻の習慣を禁せんとし、が如き社會上の改革をも試みたり。アクバル大帝は西紀一五六六年アグラに城壘を建築して首府を的里より此地に移す。ラジプタータナ平定の後兵を四方に出し西紀一五七三年グーセラットの回教國を滅し西紀一五七六年ベンガルの回教國を下す。グーセラットは其後西紀一五八一年叛旗を擧げしが同九三年再び鎮定す。西紀一五八六年には北の方カシミルを服し同九二年を以て其叛徒を平定す。西紀一五九二年シンドを平げ西紀一五九四年カンダハルを取る然れ共阿富汗の地は叛服常なし。アクバル帝の屬地茲に於て温都斯坦全部を包含す。乃ち兵を徳干の北部に進めア、メドモックル、ベラル兩國に克ち將に其南半の諸國をも略有せんとし、が偶々太子セリム回教徒の推

す所となりて叛を企て西紀一六〇二年大臣アブル、フアツルを殺す。アクバル兵を誅して叛徒を鎮定し太子と和解せしも是より新宗教を棄て、復た回教の信仰に歸れり。西紀一六〇五年十月殂す。年六十四。セリムの毒殺し、と云ふもの信に近きが如しセリム位に即きてジェハンジルと稱す。世界の征服者てふ義なり。

第四節 ジェハンジル帝シア、ジェハン帝の治世

(西紀一六〇五年—西紀一六五八年。)

初めアクバル在位の時ジェハンジルの長子クツルを愛し之に帝位を譲らんとす。るの意あり。クツルはアクバルと同一の思想を懐抱し基督教を敵親せず。ラジプタータナ諸王と親交あり。ジェハンジル之を見て心頗る樂まず。回教徒と共に兵を擧げて叛し、は全く之が爲なり。ジェハンジルの位に即くに及びクツル安ずる能はず。アグラの皇宮を逃れてラホールに至り遠く波斯に走らんとす。已にしてジェハンジルの兵追及しクツル其部下の賣る所となり捕虜となる。ジェハンジルは悉く叛徒を虐殺しクツルの一命を助けて終身囹圄の中に置く。ジェハンジルは其性殘忍

酷薄にして情を解せず飲酒に耽り長夜の宴を事とす。且皇后ヌール、マハル好智に
長け國事に容喙し其弟アツフ汗を以て大臣となす。ヌール、マハルとは後宮の光て
ふ意なり一にヌール、ジェハン世界の光とも稱す。波斯人の女にして同國の人に嫁
しベンガルに在りしがジェハン位に即くや舊時の戀情を忘るゝ能はず其夫
を殺して之を奪ひしと云ふ。此頃英人ハウキンス、スーラットに上陸してアグラ市
に至り其後西紀一六一六年英人スア、トーマス、ロー、英王セームス一世の命を受け
て莫臥兒朝に至りしが正式の修交通商條約を締結せんとせしが爲め成功せず。
時に徳干デカンにアビシニア人マリツク、アムバルなるものありア、メットマッゲル地方
に於て人民の信用を博し前朝の一公子を立て、梭里檀となしビジャブル、ゴルコ
ンダ兩國の援兵を得莫臥兒帝國の兵を追ひてバルハムブルに退却せしむ。ジェハ
ン次子バル#ツを遣して之を伐たしめ次で三子シア、ジェハンを以て之に代
ふ。西紀一六一六年ジェハン其寸功なきを見て親征の議を定め南進す。ビシャ
ブル、ゴルコンダの兩梭里檀其援兵を召還しマリツク、アムバル敗軍してア、メット
マッゲル復莫臥兒帝國の所有に歸す。ジェハン位を得てグーセラットを巡視

し次でパンチャブに赴き都をラホールに遷し離宮をカシミルに設けて暑中の料
に充つ。當時國內叛徒其跡を絶たずジェハン位に據るに温都斯坦地方
は全く平穩の時期無しと云ふ可し。晩年又皇子互に儲位に立たんとし之に加ふる
にヌール、マハルの愛憎とアツフ汗の干渉を以てし混乱を極む。

ジェハン位に四子あり曰くクツル曰くバル#ツ曰くシア、ジェハン曰くシアリア
ル是なり。シア、ジェハン徳干の役に功あり且ヌール、マハルの愛を受けて其姪即ち
アツフ汗の女を娶りしが偶々他の婦人を納れし爲一朝にして其愛を失へり。ヌー
ル、マハル先夫の一女ありクツルの父帝と和解し出獄せるを以て此女を嫁して太
子たらしめんとす。クツル多妻主義を排して應せず乃ち之をシアリアルに與へ之
を立てんとす。偶々徳干地方復叛徒起りしかばシア、ジェハンに命じて之を伐たし
む。シア、ジェハン出陣中父帝の喪に遭ひクツル位を嗣がん事を恐れ同伴せん事を
求め相携へてバルハムブルに到る陣中飛報あり皇帝病に罹り命旦夕を待たずと。
シア、ジェハン刺客を放ちてクツルを殺さしむ。已にしてジェハン病癒ぬ此報を
得て大に怒りクツルの子ブラキを立て、世嗣となす。次でシア、ジェハンに命じて

徳千の兵を撤しシアリアルに會して西波斯の征討に従事せしむ。シア、ジェハン陽に之に従ひ陰に其舅アツフ汗と謀りアグラ市に貯藏せる帝室の財産を奪はんとして成らず。敗走してベンガルに走り次で徳千に遁れビジャブール、ゴルコンダ兩國に流寓す。時にラジブータナ出身の將校に回教に改宗せるマハバット汗なるものありヌール、マハルの爲に辱られて大に怒りジェハンジルを奪て之を奉ず。已にしてジェハンジル又ヌール、マハルの情を忘るゝ能はず。脱して歸る。マハバット汗安ずる能はず。手兵を以てバルキツに倚らんとせしが其死去せるを以て徳千に走りてシア、ジェハンの爲に一臂の力を致さんとす。西紀一六二七年ジェハンジル暴に殞す。アツフ汗遺詔を奉じてプラキを立て以て同胞なるヌール、マハルを制しシアリアルを捕へて盲目となし以てシア、ジェハンの畫策を熟さしむ。乃ちシア、ジェハン病死の報を傳へてアクバル大帝の墳墓の側に埋葬するの許可を受く。プラキ其會葬者中ラジブータナ兵士の多きを見て陰謀あるを察し倉皇ラホールに向ひて遁る。シア、ジェハン群衆歡呼の中にアグラ城に入りて皇帝の位に即く。プラキの後事に付きては或はラホールに於て殺されしども云ひ波斯に逃れて餘生を送り

しども云ふ。

シア、ジェハン即位の後前朝に其萌芽を發し、回教徒と印度人との軋轢は益其度を高めたり。徳千征討の司令官たりし阿富汗人カン、ヂェハン帝の信任を失ひ叛旗を掲ぐ。回教徒の軍隊出征の命を奉ずるものなし。ラヂブータナの軍隊乃ち征討の命を受け之を破る。然れども印度種族は帝に心服するにあらず。此時代より漸く莫臥兒帝國腹心の疾たらんとす。シア、ジェハン亦久しく波斯と其主權を争ひシカングダハルの地を失ひたり。時に西紀一六五三年なり。其東北に當れるカブールは月祖伯人と領有を争へるの地なり。シア、ジェハン亦二個の大土木を起して其名を不朽ならしめたり。一はアグラ市に於けるタヂ、マハルにして一は今の的里府の建設なり。回教徒は今日なほ同市を以てシア、ジェハナバッドと呼ぶ。シア、ジェハンの都府てふ義なり。タヂ、マハルは純白なる大理石を以て建築せる墓碑なり。アツフ汗の女なる最初の皇名マムタツ、マハルの爲に建てしものにして附屬物の營造と共に二萬の人夫を二十年間使用せしと云ふ。的里の新宮殿には又有名なる孔雀玉座を設く。黄金と寶玉を以て孔雀を造り之を玉座の裝飾となし、を以て此名あり。以

て當時莫臥兒帝國の威權赫々として繁榮を極めしを見る可し。而してシア、ジェハンも亦皇子の争亂を以て苦めり。

シア、ジェハンも亦四子あり曰くダラ曰くシェーヂア、曰くオーラングジーブ曰くムーラッド是なり。ダラはアグラ市に住し基督教を好みシェーヂアはベンガルの太守にしてシーア派に屬し德千の太守オーラングジーブ并にグーセラットの太守ムーラッドは共にサンニ派に屬す。サンニ派シーア派とは回々教の兩大派にしてサンニ派はメヂナのカリフを以て悉く正統なりと認めシーア派は惟アリーのみを以て馬哈默の眞正の繼嗣なりとす。要するに其教義の相違は一は嚴肅にして他の一は寛容なるにあり。故にシーア派のシェーヂアはラジブータナ諸王の信頼する所たり。シェーヂア流言を信じ父帝を以て病死すとなし兵を率ゐてアグラに向ふ。ダラの長子スレーマン回教徒の兵に將としジャイブール王ジャイシング、ラジブータナの兵に將とし共に之を伐つ。ジャイシング流言の誤れるを通じシェーヂアを退軍せしめんとす。シェーヂア可かず遂に敗軍してベンガルに歸る。オーラングジーブは英才にして機智に富むムーラッドの兵を以て國都に進むを聞き書

を送りて曰く余はダラ、シェーヂア等を戴くを欲せず君のサンニ派なるを喜ぶ願くは君の即位を助くるを得むと。ムーラッド大に喜び兵を合してアグラに向ふ。ダラ又官軍を出して之を拒がしむ。ラジブータナ軍の司令官マルワル王(ジョドブール)ジャスワント、シング能く戦ひしも回徒の軍一彈丸をも發せず官軍ウーヂヤインの附近に大敗す。ダラ報に接して親ら出て、之をシヤムバル河岸に邀へしが回徒又戦はず敗走す。ダラ國都に還りしが直ちに西、バンヂャブに走りオーラングジーブ、ムーラッドの軍勝に乗じてアグラ市に入る。オーラングジーブ父シア、ジェハンを其宮殿に幽閉し又ムーラッドを欺きて回教の法戒を破りて飲酒せしめ其罪を聲言して之を禁錮す。其後シェーヂアは其軍破れてアラカンに遁れダラは捕虜となりて的里府に暗殺せられ其子スレーマンはカシミルに遁れしが同地の國王之を捕へてオーラングジーブに献ず。オーラングジーブ遂に的里府に於て皇帝の位に即き温都斯坦の人民皆其命を奉ず。時に西紀一六五八年なり。シア、ジェハンは西紀一六六六年に至りて幽閉中に歿せり或は曰く弑せられたるなりと。

第五節 オーラングジーブ帝の治世

オーラングジーブ一にアラムジールと稱す宇宙の征服者の義なり。父帝の在位中、德干地方の太守として其北部を鎮定せしが南部には未だビジャブル、ゴルコンダの二回々教國あり西海岸一帯の山地には又印度種族割據して回教徒の窺窵を許さず。オーラングジーブ即位の後、日ならずして德干地方に留意するの必要を生ぜり。初めビジャブルの梭里檀の臣下にボーズラなるものありジュニア、ブーナの二城を有す其地孟買の東方七十哩に當る。其子シワジ西紀一六二七年を以てジュニアに生まれコンカンの山地に生長す。人と爲り衆に長たるの資格を備へ長じて山賊の魁首と爲りコンカンの住民を組織して騎兵隊となし殷富なる平原地方を掠奪す。ビジャブルの梭里檀之を憂へ大軍を派してシワジを征せしむ。シワジ詐りて降り征討軍の司令官に會見を求め其虚に乗じて掌裏に藏せる銳利なる武器を以て之を殺す。ビジャブルの軍隊忽ちにして潰えシワジの手兵所謂マアラッタ人等追撃して斬獲算ふ可らず。時にオーラングジーブ太守として德干にあ

りしかばシワジを利用してビジャブル國を滅し且之に頼りて成すあらんとし其莫臥兒帝國の侵掠を問はず國境内の地を割き盟約する所あり。然れどもマアラッタ人の同盟を借るに及ばずしてオーラングジーブは印度皇帝となり復たシワジあるを思はず。

此間シワジはビジャブルの領域を以て侵略の地となし掠奪を恣にす。ビジャブル政府時に内亂に苦みしかば數郡と數城とを割きてシワジに與へ和を講ず。シワジ一日も逸樂に安する能はず乃ち轉じて又莫臥兒帝國の領域に向ひ暴行を逞らし遂にオーラングジーブの注意を惹起せり。オーラングジーブ叔父シャイスタ汗を以て德干の總督となし大軍を給してシワジを伐たしむ。マルワル王ジャスワント、シンド、命を受けてラジブータナ軍を率ゐて之に會す。西紀一六六二年シャイスタ汗進みてブーナの城市を併せて略し雨季に際し、かば以て本營に充つ。シワジ夜に乗じて之を襲ひシャイスタ汗の長子を斬り鎧重を奪ふ。シャイスタ汗僅に身を以て免る。蓋しシャスワント、シンド、陰にシワジに通じ、が爲此大敗を招きしや疑ふ可らず。即印度種族が莫臥兒帝に心服せざるの證なり。シワジ次で西紀一六

六四年莫臥兒帝國の開港場たるスーラット市を襲ひ英蘭兩國の商館を攻撃す。當時の商館は防禦の爲に大砲を備へしを以て之を撃退し、雖もシワジが掠奪品は莫大の額に達せり。其後シワジは屢々同地を劫して多額の金錢を貪り中間の地を支配せる小國を併呑して曰く豈に寶庫の鎖鑰を他人に托するを得んやと。シア、ジェハン殞落してよりオーラングジーア大に心を安んじ病をカシミルの山中に養ふ。此時歐洲諸國の海軍と洋上に驅逐せんと欲し伊太利人に命じて二隻の戦艦を造る之をカシミルの湖上に浮べしが乗員を得る能はずして止めり。波斯帝アッバス二世が印度を襲はんとし、も此頃の事なり。アッバス二世、オーラレグジーアのカシミルに滞在するを見てカンダハルを攻むるの準備なりとし先して兵を的里に向けんとし、が發するに臨みて病死せり。已にしてオーラングジーアの里に歸りスーラットの爲に讎を復せんと決し西紀一六六六年ジャイプール王ジャイ、シングを勅使としシワジの許に遣して曰はしむらく親ら國都に來れ徳干太守の職に任せむと。シワジ前朝に於てラジブータナ出身の士がカプール、ベンガル太守に任せられし故事を想ひ喜ひて的里府に至る。到れば則ち冷遇を極め約束を履行

せんとせず却て暗殺の舉あらんとす。シワジ漸く身の危きを曉り果實の籠に潜みて府外に出て姿を變じてベナレスに走り數月の後コンカンの地に歸る。オーラングジーア長子シア、アラムをして回教徒の兵に將たらしめジャイプール王ジャイ、シングをしてラジブータナの兵を引率せしめ以てシワジを征す。陰にシア、アラムに訓令を下して曰く敵地に近づかば偽りて叛旗を擧げよ官軍の將校中余に服せざるものあらば之を知るの便あるべくシワジにして所謂叛徒に投ずるあらば直ちに之を捕へて斬首するを得むと。然るにシア、アラムはラジブータナの公主の出なりしを以て其結果皇子の叛に與せざるもの僅に一人にしてジャイ、シング等は熱心なる同意者たり。然れどもシワジは已にオーラングジーアの詐謀に慣るゝを以て叛徒に同情を表するも敢て之に投せんとせず。シア、アラム如何ともする能はず遂に其詐謀なるを宣言す。官軍新に來りて悉く舊軍隊の將校を殺し或は之を追放の刑に處す。是より後チャイブル王、マルワル王等史上に其跡を示さざるもの數年唯ウーダイプール王の割據するあるのみ。而してオーラングジーア帝は又之によりてアクバル大帝以來の痼疾たる長子の叛亂を免るゝを得たり何となれ

ば此詐謀の後何人もシアアラムの爲に努力せんとするものあらず。西紀一六六八年オーラングジープは其治世の歴史を禁止せり。

カプールは莫臥兒帝國の附庸なりと雖も名ありて實なく太守はヒーシアワルに住して殆ど同地を巡視する事なし。西紀一六六六年波斯來襲の報あるや莫臥兒帝國の大兵國境に集注す。已にして波斯帝殞落するに及びカプールの太守アッバス之に將としてカイバル越を経てカプールの野に入る。一人の抵抗するものなく且糧食盡きんとするを以て退陣に決し再びカイバル越を超ぬんとするや阿富汗人急に起りて全軍敵手に落つ。アッバス辛じて身を以て免る。西紀一六七二年一人の男子あり自らオーラングジープの兄シューシアなりと稱しカプールの據る。シューシアは先にアラカンに走り其存亡を聞かざる。茲に十二年に及ぶ。而かも阿富汗人は其男子を疑はず奉じて皇帝と爲す。ヒーシアワル在住の太守も亦之を信じ中立を守る。オーラングジープ遂に親征の議を決し對陣二年に及びしも克つ能はず。故に的里に歸り新に太守を任命してヒーシアワルに赴かしめ和親の政策を執り機漸く熟するに及て宴會を開き給きて盡く阿富汗の酋長を戮せしむ。阿富汗國民恐怖爲す

所を知らず所謂シューシアなるもの逃亡終る所を知らず。

徳干に於けるシワジの侵掠は日を追ひて益々甚しく條約にもあれ協商にもあれ之を破り之に背くを以て些も其意に介せず。ヒーシアワル梭里檀の所領たるも莫臥兒帝の領域たるを問はず手に任せて掠奪す。其制先づ四分一税なるものを設けて收入の四分一を要求し之に應せざる時は直ちに兵を放ちて押領す。當時回教徒の勢力の衰弱に赴きし事以て知る可し。ヒーシアワルの梭里檀は其極シワジを以てコンカン地方の君主たるを承認するに至れり。西紀一六七四年シワジ大王の位に即く。西紀一六七七年シワジ、マアラッタの騎兵隊を率ゐるゴルコンダ王國を越えて半島の東部に至り下カルナチック地方に克ちタンジョール王國を設く。此頃徳干の莫臥兒兵シアアラムの指揮を奉じてシワジを攻めしがシワジ神出鬼没よく莫臥兒兵を惱まし莫臥兒の將校は亦戦争の繼續する時は多額の軍費を要求して少數の士卒を養ひヒーシアワル、ゴルコンダの兩梭里檀より賄賂を貪るの利益あるを以て活潑なる運動を試みず。シワジは其瞑目の日に至るまで能く獨立を失はず。西紀一六八〇年に至りて死す。

オーラングジーブは嚴肅なるサンニ派の回教徒にして其性質又苛刻なり。阿富汗人の虐殺を試みしより以來印度の偶像を悉く滅却し又回教を國教として全印度に行はれしめんとす。アクバル大帝はラジブータナ諸王を優待し信仰の自由を重じ、がオーラングジーブの爲す所は全く之に反せり。先其政策を直轄の地に實行し次でベンガル、徳干等の太守をして之に倣はしめ改宗を肯せざるものは過重なる人頭税を課す是をジュツヤと稱す。ラヂブータナも次で此命令に接しジャイプル、ジョドプール兩國皆人頭税を納めしがウダイプール王險に據りて應せず。オーラングジーブ三子シア、アラム、アザム、シア、アクバルをして三面より之を圍ましめ親らアヂミルに次ぎて降服を期す。歳月徒に經過して却てラジブータナの兵アクバルを擁して叛を謀る。オーラングジーブ巧に詭計を用ゐて其の間を分離せしむ。アクバル百計盡きマアラッタ族の屬地に遁る。オーラングジーブ已を得ずラジブータナの圍を解きて之を追ひてコンカンに向ふ。かくてウダイプールは其信仰の自由を全くせり。

西紀一六八二年ラジブータナより退軍し、より其殞落に至るまで二十五年間オ

ーラングジーブは嘗て的里に還らず常に軍中に起臥す蓋し兵馬の權を諸子に委任するの危険なるを知るを以てなり。シア、アラムは降服の結果を懼れ波斯に逃れしを以てオーラングジーブはシワジの繼嗣なるサムブハジを執へて之を殺し西紀一六八九年其子サフーを虜にす。然れ共到底マアラッタ族を降すと能はず。ピジャプールとゴルコンダの兩回教國はオーラングジーブの親征するに及び西紀一六八八年を以て降服す。マドラス在住の英人使を新太守ツルフェカル汗の許に派して多額の賄賂を贈る。西紀一七〇二年ダウド汗代りて太守となり復賄賂を求むチヤザム伯の祖父トーマス、ピット時にマドラスの知事たり斷然之を拒絶しダウド汗の爲に圍るゝ事三月の後其軍費賄賂の要求額に超過するを見て初めて之を與ふ。西紀一七〇七年オーラングジーブ死す要するに帝は回教徒の眼を以て論ずる時は明王たるを失はずと雖も信仰の自由を禁じしを以て莫臥兒帝國の基礎を毀けし事少々にあらず。若しアクバル大帝の政策を踏襲し、ならんには半島地方に存在せる印度人種の王國に至るまで悉く之を統一するを得たりしならん。然るに其施政の跡を見るに却りて國民の抵抗心を刺撃しラジブータナ諸王マアラッタ

民族等の制御に苦むに至る然れども此信仰の一事を除く時はオーラングジーブは事莫臥兒帝國第一の明君主たるを失はず。

第六節 莫臥兒帝國の瓦解

オーラングジーブの殞落の後其諸子又即位を争ひしが長子シア、アラム次子アザムシアとシヤムバル河の附近に戦ひて其二子を併せて之を仆し皇帝の位に即きバハヅル、シアと稱す。三子アクバルは已に波斯に走りて争奪に干與せず唯四子カムバクシユはオーラングジーブの遺命によりビジャブール并にゴルコンダの新領地に梭里檀として君臨せんとす。其母基督教を信じしを以てカム、バクシユも亦基督教徒なりとの説あり。莫臥兒人等其治に服せず。徳千の太守ツルファイカル汗攻めて之を殺しバハヅル、シアの位置堅きを致せり。然れども西紀一七〇七年より西紀一七一二年に至る帝の治世は莫臥兒帝國の衰運に向ひし序幕なり。

初め先帝の物故するやラヂブータナのジャイブル王并にマルワル王は直ちに叛旗を擧げて人頭税徴收並に人民改宗の職務を掌れる回教徒の官吏を逐ふ。バハヅ

ル、シア兵を出して之を鎮撫せんとし、が偶とバンジャフ地方に於てシク族反乱の報ありしかばラジブート族の罪を問はず疾驅してラホールに赴く。シク族は元來一の民族にわらずラジブート族以下數民族の雜種にして西紀十五世紀の末葉高名なる豫言者ナック、グルの組織せる宗教上の團體なり。其教義は進歩せるシア派の教理と進歩せる印度教の教理とを融和せるものにしてグルとグルの繼嗣とを以て神の代表者となし崇敬す。サンニ派に屬せるオーラングジーブは固より是を以て異端なりとし迫害を加へしを以てシク族は北部の山地に據りて王師に抗し青衣を穿ちて異を標す。ナックより十代を経てグル、ゴギンドの時に至り迫害殊に甚しく其城郭は陥り其妻子は殺され其徒は悉く刑せられグル、ゴギンドも亦遂に捕虜となりて處刑に遭ふ。シク族怨骨髄に徹し忘れんと欲して忘るゝ能はず。バンヅ、グルなるものを奉じて首領となし復讐の師を興し回教徒の村落を侵し寺院を毀ち住民を屠り老少と男女とを問はず。バハヅル、シア親征してバンジャブに至りラホールを以て大本營と定めシク族の征討に従事せしが治世中戡定の効を奏する能はず。

シワジの孫サフーはオーラングジーブの没後の里の後宮を出て、コンカンに至りサタラ府に於てマアラッタ族大王の位に即き臣を莫臥兒帝に稱す。然れどもマアラッタ族は四分一税の要求を擴張して止まず、徳千の大部分は素より北の方グゼラット并にマルワの地方に及ぼす。莫臥兒帝其弊害を知り之に抵抗せんとするもマアラッタ族の性として神出鬼没極りなく、勢其蹂躪に任せざる能はず。蓋マアラッタ族政府の組織によるに大王サフーは國務を左右するの勢力なし。初めシワジの政府を建つるや普通の官吏は勿論收税官等皆之を婆羅門種族に付與し、が印度種族の慣例として世襲の職となりしを以てサフーの時に至りては其權勢半として抜く可らず。大王は唯虚器を擁するに止まるのみ。シワジの如き山野藪澤の間に不覇獨立の生長をなし、強鷲にして初めてよく之を制御し得べしと雖もサフーは莫臥兒帝國の後宮金碧燦爛たる籠中に生長せる家禽に過ぎず。其政權の下移豈怪むを須むんや。首相即ち婆羅門種族文官の領袖をメイシュワと稱す。大王サフーの在位中首相は政府の實權を握り、各地のマアラッタ族の領袖にサフーの名を以て四分一税徴收の命を下し、も宰相なり。莫臥兒帝の大守と秘密條約を結び

一定の年額を要求して四分一税に代へし、も又宰相なり。

西紀一七一二年バハツルシアの殞落し、時も例の如く繼嗣の争ありしが諸公子は大望ある武將等の傀儡たるに過ぎず。勝敗決してジェハンダルシアの里に於て皇帝となりツルフィカル汗首相の印綬を帯びて帝國の實權を左右す。ツルフィカル汗は上に記し、如くオーラングジーブの時に徳千の太守となり其後其末子を仆し、人なり。然るに皇帝飲酒に耽りて衆望なく、宰相も亦權勢の争奪に熱中するのみ。バハツルシアの孫にフールク、シャルなるものあり難を免れてベンガルに在り。バトナの知事其弟アラハバッドの知事と共に奉じて兵を起し、的里に進む。西紀一七一三年ツルフィカル汗之をアグラの近郊に迎へて敗軍し、次で刺客の手に斃る。バハツルシアも亦叛徒の殺す所となる。茲に於てフールク、シャルの玉座に陞りバトナの知事アツル汗を首相となしアラハバッドの知事フーサイ、ン、アリ汗をラジブータナに遣して莫臥兒帝國に歸順せしめんとす。而してフールク、シャルの眞意は兄弟を分離し間に乘じて其制肘を脱せんとするに在り。フーサイ、ン、アリ汗ジャイプール王を攻めて利あり乃ち又徳千の太守に任じて國都に

滞在せしめず。此頃シク族鎮定に歸し、パンヅ、グル捕虜となり、酷刑に處せらる。西紀一七一九年宰相アブツル汗一身の危きを感じ急を德干に報ず。フーサインアリ汗マアラッタ族の軍隊を率ゐて的里に入る。偶々流言あり曰くマアラッタ族掠奪を行ふと。一宮中に於て刺殺せらる。已にして又流言あり曰くマアラッタ族掠奪を行ふと。一揆市中に起りマアラッタ兵の大數を屠る。皇帝戰慄其爲す所を知らざるに乗じアブツル汗人をして之を牢獄に投せしめ、次で弓弦を以て亂打して死に至らしむ。乃ちフーサイン、アリ汗と共に謀りて皇室の一幼兒を立て之を挾みて號令す。幼兒三月にして死し、之を以て一少年を得て之を立てしに、又二三週にして死す。因て健全なる一少年を選びて帝位に即かしむ。是をムハメッド、シアとす。時に民心漸く兄弟の專横を憤り之を倒さんとするもの頗る多く大結合を爲せり。アブツル汗宰相としての里に止りフーサイン、アリ汗帝を軍中に奉じて、德干に赴任し、戒嚴大に力む。軍中一人の壯士あり、單身フーサイン、アリ汗の身邊に近づき、一刀之を仆す。ムハメッド、シア軍隊を従へて的里に歸るに及びアブツル汗之を路に邀へて戦ひし。も克つ能はず。一朝にして失意の人と爲る。皇帝的里に凱旋して親政の舊に復し、

も帝國の病は已に其旨膏に入り救治す可らず。宮中府中を問はず、朋黨比周して政務の進行を妨げ、皇帝之を制御するの實力なし。オーラングジーア帝以前に於ては屢々太守の轉任を行ひし。も今や叛亂を睹するにあらざれば之を令する能はず。專制時代に於ては六師常に外にありて西征南討寧日なくシク族、ラジプト族を威服せしも、今や的里の近郊に佃獵を行ひて武を演ずるに過ぎず。唯皇帝は榮典大權を有し、地方の太守總督皆其辭令を受けて始めて合法の統轄權を有す。太守の死するや其子則ち世襲の權を唱へて其職を襲ふも、的里政府の辭令を得るにあらざれば一般人民は其命に従はず。邊境の巡撫に於けるも亦然り。太守は巡撫を任命し、巡撫死して其子之に代るも一度中央政府の辭令を受くるにあらざれば合法と云ふ可らず。故に皇帝並に其近侍に對し、地方の太守は常に進献を吝まらず以て其職を近親に傳へんとす。初め莫臥兒帝國は收税總長なる者を置き、太守と獨立して歳出入の事務に従はしめ、直接に皇帝の任命する所なりしが、帝權の衰頽に赴くと共に賄賂其効を奏し、太守の中近親を以て之に任ずるものあり、自ら之を兼任するものあり。中央政府の歳入大に減じ、自ら地方割據の勢を

助長せり。

各省中最も富有なるをベンガル地方となす然れどもベンガル地方の巡撫輩はカルムナナサ河の東にありて的里政府を距る事遠く年々貢税を納付するのみ。ムハメッド、シアの治世中最も帝國の歴史に關係ありしものをオウドの總督サアダット、アリ汗及び德千の總督チンクリ汗となす。サアダット、アリ汗は波斯の産にしてシリア派に屬しはじめコーラサンの綿商人なりしが風雲に際會して終に太守となりオウド王國の太祖となる。當時のオウトはアグラよりベナレスに至る總稱にして今のオウドは其一部に過ぎず。

チンクリ汗は土耳其人にしてサンニ派に屬し其先名族に出づと云ふ。フハルルク、シヤル即位の時功績あり德千總督の任命を受けニザム、アル、マルクの尊號を授けらる。ニザム、アル、マルクとは國務の主治者てふ義にして史家は一般に此尊號を以て汗の稱呼となす。其後フーサイン、アリ汗、ニザム、アル、マルクをマルワ地方に移して自ら德千の總督となりしが其暗殺せらるゝやニザム、アル、マルクは兵を率ゐてナルブッダ河を渡り德千の統轄權を奪ひてマルワ并にグーセラットの兩省を

も併せ領す。

マアラッタ族の第一次の首相たるバラジ、井スワナス西紀一七二〇年を以て死し其子バジ、ラヲ嗣ぐ。バジ、ラヲ夙に名望あり改革の遺志を繼ぎて大王サフイーを奉じて莫臥兒帝に臣事し德千マルワ、グーセラット各省より四分一税を徵收せんとす。其政策の目的は一定の領域内にマアラッタ帝國を創設せんとするにあらずして莫臥兒帝國の範圍内に収税の權利を擴張するにあり。其職務は各地方の武官之を分擔し宰相サタラの中央政府にありて之を統轄す。グーセラットのゲクワル家、マルワのシンチア家、ホルカル家等微賤より起りて掠奪の任に膺り、シワジと同族なるボンストラ家はベラール地方に權勢を震ふ。然れども此武官等が政權を得て割據するに至りしは後年宰相の權力凋落し、時に在り。慧眼なる宰相バジ、ラヲは皇帝ムハメッド、シアと總督ニザム、アル、マルクとが隱然嫉視するを看破し巧に之を利用せり。乃ち先づ官軍を助けてグーセラット并にマルワ地方をニザム、アル、マルクより奪ひ報酬として德千地方より四分一税を徵收するの許可を得轉じてニザム、アル、マルクと鋒を交へ結局マルワ、グーセラット地方の徵税に干渉せざるを約せし

む。此間バシ、ラヲは莫臥兒帝に請求して之が公然たる許可を得んと欲し、がムハメッド、シアはラジブイッタナに於ける徵税を許可し、のみ。是よりラジブイッタ族とマアラッタ族とは其同一印度種族たるの誼を忘れて相争ふに至れり。

西紀一七三六年バジ、ラヲ的里政府に迫りてグーセラット并にマルワ地方四分一税徵收の許可を得んと欲し兵をアグラに進む。ムルハル、ラヲ、ホルカルの率ゐし遊軍ありジユムナ河を渡りて掠奪を實行し、がオウド總督サアダット、アリ汗の兵と戦ひて敗北す。バジ、ラヲ屈せず西紀一七三七年の初的里府の門外に迫る全都震動す。然れどもバジ、ラヲの本意は惟皇帝を威赫せんとするに在り故にサアダット、アリ汗の官軍に加はりしを見て徳干に歸る。是より先ニザム、アル、マルクは皇帝を奉じてマアラッタ族を伐つので策なるを思ひ圍解くる後的里に到る。西紀一七三八年歸任するに當りナルブッダ河岸にバジ、ラヲの軍と衝突し糧道を絶たる。ニザム、アル、マルク進退大に谷まりマアラッタ族の爲に皇帝に請ひてマルワ并にグーセラット地方の四分一税を得んと欲し、的里に歸りバジ、ラヲ、マルワを略す。此時に當り偶々波斯帝の侵略あり局面激變を生じ莫臥兒帝國の基礎動搖す。

波斯の近世史は西紀一五〇〇年シリア派の熱心家なるスフ、統の獨立國を建設し、時に起る。西紀一七一〇年頃カンダハル、ヘラット地方の阿富汗人波斯の羈絆を脱して兵を擧げ魁首マームード西紀一七二二年を以てイスバハンに克ちスフ、統に代りて波斯帝位に即く。其後廢帝の遺子シア、タアマスブ故業を復興するの志あり賊魁ナツル、クリなるもの、助を得て西紀一七三〇年阿富汗人を國境の外に驅逐す。ナツル、クリ之を追撃してコーラサンにありシア、タアマスブが土耳其人と戦て利なく西方の數州を割讓せるを聞き大に怒り國都イスバハンに歸りて帝を幽し其幼兒を奉ず。乃ち西方に軍を進めて土耳其を破り國境を舊に復し又彼得大帝の時露國に割讓せる裏海沿岸の地方をも復す。ナツル、クリ聲望益高く西紀一七三六年幼帝の殞するや自ら帝位を奪ひてナツル、シアと稱す。西紀一七三七年ナツル、シア復た東方に兵を出してカンダハルを攻め使を莫臥兒帝の朝に派す。ムハメッド、シア報せず。ナツル、カンダハル、カナルを陥れ勢に乗じて西紀一七三八年バシジャブに入る沿途迎へ降り日ならずして的里に迫らんとす。

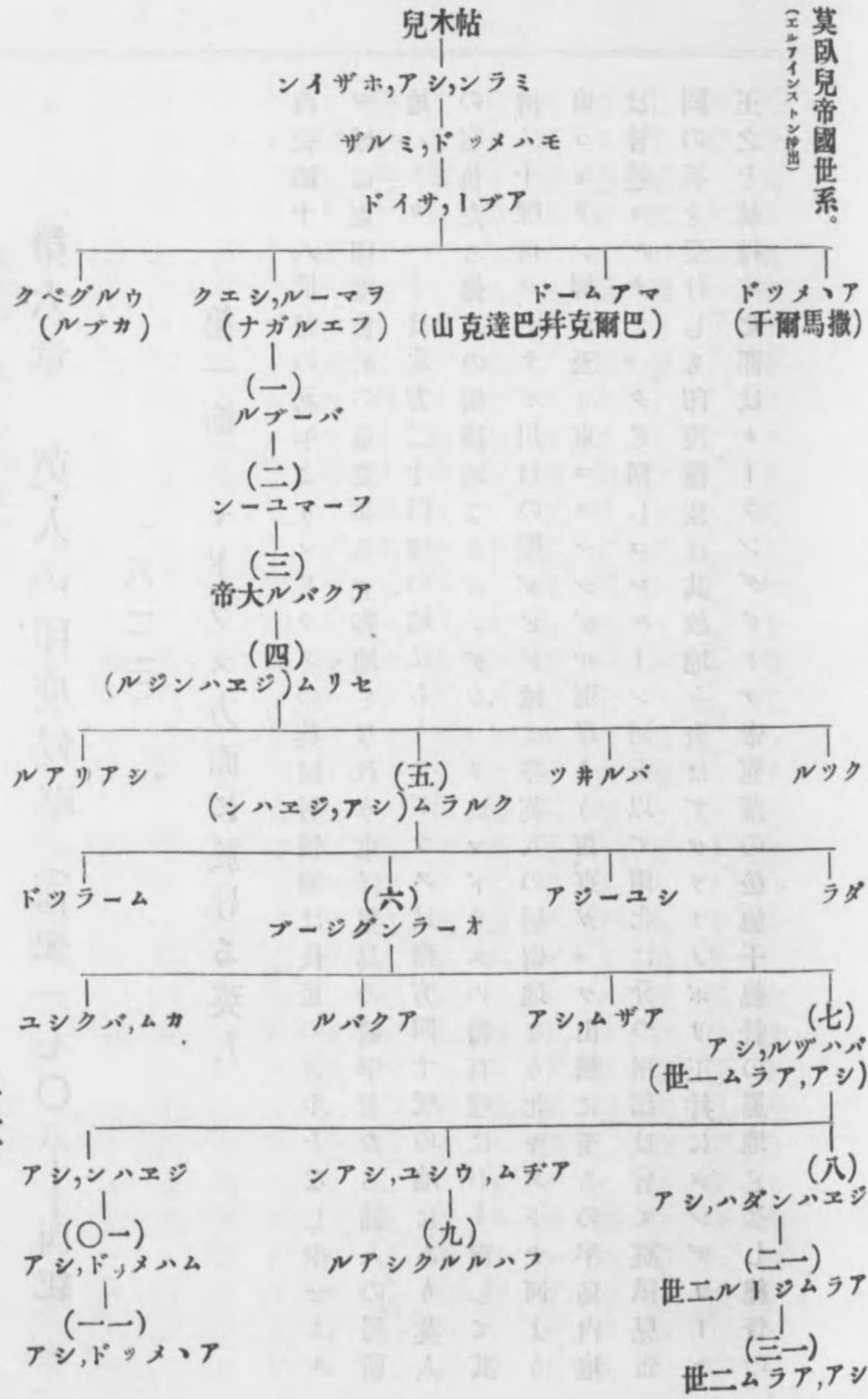
莫臥兒政府始めて驚き大軍を出して的里を北に距る六十五哩のクルナルに陣せ

しむ。ニザム、アルマルク、サアダット、アリ汗共に一方に將としムハメッド、シア之を統轄す。ナヅル、シアの軍次で來り西紀一七三九年大にクルナルの地に戦ふ。ニザム、アルマルク觀望して動かず莫臥兒兵の全敗するに及び使を敵軍に派し二百萬磅の償金を以て退軍せんことを諾さしむ。サアダット、アリ汗之を聞きてナヅル、シアに説きて曰く莫臥兒の國都に進まば二十萬磅を得る極めて容易なりと。ナヅル、シア進みて外郭に迫るサアダット、アリ汗身の危きを覺り毒を仰きて死す。翌日ナヅル、シア二萬の軍隊を率ひて的里府に入り王宮に到りてムハメッド、シアと會見す。府民大に恐れ西紀一七三九年三月十日鋒起して敵軍を虐殺し二十年前マアラッタ族を屠りし時の如し。翌朝ナヅル、シア王宮を出て、市街を巡視せんとし手兵の屍体を見るや怒髪天を指し直に復讐の令を下す。波斯兵恰も狂人の如く手に任せて府民を殺戮し午前八時より午後三時に至り十萬人餘を仆す。其殘酷なる蓋し近世史上以て比較すべきものなからむ。次で掠奪を行ひ王宮の孔雀玉座をはじめ寶玉と云ひ兵器と云ひ一も遺す所なく兵をオウドに放ちてサアダット、アリ汗の遺産凡二百萬磅を押收す。ニザム、アルマルク又多額の償金を出し、が徳子の地邊遠な

るを以て其負擔輕きを得たり。ナヅル、シア温都斯坦に滞在する事二ヶ月ムハメッド、シアの姪を其次子の爲に娶り印度河以西の地を波斯に割かしめ歸國の途に上る。歸國の後サンニ派を以て國教となさんとし、が爲民心を失ひ西紀一七四七年刺客の手に仆れたりと云ふ。時に年六十。

ナヅル、シアの侵略以後莫臥兒帝國の衰頽は著しく其速力を加へムハメッド、シアは帝位にあるも虚器を擁するのみ。國庫空乏して慰撫の金員を支出するによしなくマアラッタ族は其掠奪の區域を擴張して南はカルナチックに東はベンガルに及ぼす。西紀一七四〇年バジ、ラヲ死して其子バラジ、ラヲ宰相の位を嗣ぐ。西紀一七四八年大王サフーの死してラジア、ラムのサタラの位に即くや統御の實權全く宰相に歸しバラジ、ラヲはマアラッタ族の政府をシワジの舊都ブーナに移し宰相即ちメイシユワの舊名を以て君臨す。此年ムハメッド、シアも亦殂す。此頃阿富汗人復波斯の扼を脱して獨立シ、マッド、シア、アブダリを奉じて中央亞細亞の大半を服シカシミル、パンチャブ地方を併呑す。ア、マッド、シア、アブダリ阿富汗帝國を印度に復興せんとするの志あり是よりムハメッド、シアの繼嗣は交る、く、阿富汗人と

莫臥兒帝國世系。
(エムファインスタン神話)



二二二

第五章 莫臥兒帝國の勃興并に其瓦解

二二〇

マアラッタ族とに擁立さるゝに至れり。而して此時に當り印度在住英人の勢力漸く人目を惹き印度の歴史は新生面を開き政治上の中心は將に的里的の莫臥兒國都を去りてマドラス并にカルカッタの英人居留地に移らんとす。

（以下は非常に淡く印刷された本文が続き、内容は上記の文脈に沿って莫臥兒帝國の歴史や政治情勢について記述されていると推測される。）

第六章 英人の印度侵略 (西紀一七〇八—西紀

一八二三)

第一節 マドラス方面に於ける英人

西紀第十八世紀の初年よりマドラスの英國居留地は長足の進歩をなし聖セオル
チ城は東印度會社の重要な立脚地となれり。東洋貿易の競争者たる蘭人の居留
地バリカットは北方二十四哩の地にあり。マドラスは南方四十哩の地にあり。英人
の宿仇たる佛人の根據地なるボンデシエリはマドラスの南百哩にあり。而して其
南二十哩南ベンナル川口の聖ダビド城は亦英人の居留地なり。北キストナ河より
南コモリン岬に至り東コロマンデル海岸より西東ガッツ山脈に至るの半島内地
は普通カルナチックと稱しコレルン河を以て南北に分つ。南部は曾て莫臥兒帝
國の兵を受けしも印度種族は其故地を失はず。トリチノポリ王并にタンデョール
王之を統轄す。北部はオーラングジーブ帝殂落の後德干總督の屬地となし總督の

任命せる巡撫マドラスを距る七十哩なるアルコットに政府を置きて君臨す。
西紀一七三二年アルコットの巡撫死す嫡子ドスト、アリ先例に循はず總督に通せず
して巡撫の職を襲ぐ。ニザム、アル、マルク其舉を怒るも的里の中央政府に事あるを
以て邊境に意を用ゐる能はず。西紀一七三六年トリチノポリ王殂して繼嗣の争決
せず。巡撫ドスト、アリ好機逸す可らず。なほ其子ザブダル、アリ其婚チャンダル、サ
ヒブを遣して侵略せしむ。チャンダル、サヒブ機智に富み王妃を欺きてトリチノポ
リを奪ひチンデガル并にマデユラの二市又相次で莫臥兒人の有となる。西紀一七
四〇年マアラッタ族兵を放ちてカルナチックを掠らんとす。ドスト、アリ之を東ガッ
ツ山脈に邀へて克たず陣歿す。ザブダル、アリ陰にマアラッタ族に通じトリチノポ
リを奪ひてチャンダル、サヒブを捕獲せしめ自立して巡撫と稱す。義兄モルチス、ア
リ貢賦を拒み刺客を放ちてザブダル、アリを暗殺せしめしが民心の歸せざるを見
て居城ベルロルに歸る。此時ニザム、アル、マルク稍、間を得西紀一七四三年ハイダラ
バットを發して三月アルコットに着しアンワルウッヂンなるものを以てザブダ
ル、アリの遺子を奉じてカルナチックの政を執らしむ。次でトリチノポリに至りて

マアラッタ族を追ひマドラス知事の派遣せる英國使節を延見し西紀一七四四年三月徳干に歸る。六月幼巡撫大婚の禮を擧げんとするに際して暗殺せられアンワルウッヂン徳干總督の命を以て巡撫となる。時に歐羅巴の本國に於ては澳國の繼嗣問題より英佛兩國干戈の間に相見ゆるに至り西紀一七四五年英國の艦隊はコロマンデル海岸に現はれマドラスの陸兵と其力を合してボンヂシェリを圍まんぞす。佛人ゾーブレー人と爲り智略に富む東印度會社に入り二等書記生より累遷してシヤンダルナゴルの通商事務長と爲り西紀一七四二年總督に榮轉してボンヂシェリに移る。ゾーブレー英人の企圖を偵知し使をアンワルウッヂンの許に遣して其領内に於ける英佛人の戰爭を禁せしむ。翌西紀一七四六年九月十四日佛人ラブールドンネの艦隊英艦の虚に乗じてマドラスの南方十四哩の海上に碇泊して陸戰隊を上陸せしめ海陸並び進みてマドラスに向ひ數日の後終に之を陥る。アンワルウッヂン、ゾーブレーが最初の約に背きてマドラスを興へざるを以て喜ばず一萬の兵を擧げて之を奪はんとし、が佛兵四百に敵する能はず敗走す。英人政府を聖ダビド城に移しボンヂシェリと交戦

止む時なし。西紀一七四八年英將ボスカウエン艦隊を率お少佐ラウレンスの陸兵と相前後して印度に至り共同してボンヂシェリを攻むる事二ヶ月克つ能はず十月圍を解く。此年歐洲に於てはアアヘンの和約成り英國は北米殖民地の略取せるルイスババルグを以てマドラスと交換し再び之を東印度會社の所有に歸す。西紀一七四八年は印度史上局面一變の時なり莫臥兒帝マアラッタ大王の此年を以て殞落し阿富汗人物興の勢あるは已に前節に記し、が徳干總督ニザム、アル、マク此年を以てハイダラバッドに死し英人ロバルト、クライヴの名はじめて此年を以て顯る。ロバルト、クライヴは西紀一七二五年を以て英國シユロブシアに生る。幼より膽力ありて讀書を好まず西紀一七四四年十九歳の時マドラスに著して東印度會社の書記となり英佛開戦するに際して職員に加はり旗手となる。ボンヂシェリ攻撃の際殊功あり長官の注意を惹きしも未だ十分に其天賦の伎倆を揮ふ能はず。西紀一七四九年英人タンヂョール王國の叛公子を助けて兵を出す。王英人に依りて回教徒の侵略を免れんと欲しデッコッタに居留地設置を許可す。初めニザム、アル、マルクの死するや其次子ナジル、ジャング其愛孫ムザッパイル、ジャング互に總

督の位を争ふ。佛の總督ヅェブレール通商の薄利なるに甘んぜず印度経略の大志あり。巡撫アンワルウッヂンがカルナチックの民心を得ざるを察し其保護者たるニザム、アル、マルクの死去し、に乗じ莫大の償金をマアラッタ族に與へてチャンドル、サヒブをサタラの牢獄に迎ふ。チャンドル、サヒブ、ムザッフィル、ジャングど同盟してアンワルウッヂンをアムブールに破りて之を陣斬しアルコットに至りて巡撫となる。故巡撫の遺子ムハメッド、アリ逃れてトリチノポリに據る。同盟軍々費に闕乏せるを以て急に之を攻めずタンデョールに至りて貢賦を徴し議決せず徒に歲月を經過す。ナジル、ジャング間を得て大軍を率ゐて西紀一七五〇年ハイダラバッドを發してカルナチックに向ふ同盟軍報を得て爲す所を知らずムザッフィル、ジャングは出で、降りチャンドル、サヒブはボンジシエリに逃る。ナジル、ジャング進みてアルコットに入りムハメッド、アリを以てカルナチックの巡撫に任じヅェブレールの畫策畫餅に歸せんとす。

ヅェブレール計略に長じ敢て此挫折に屈せず佛軍の一隊をしてムハメッド、アリをトリワヂに破らしめ他の一隊をしてキストナ河口のマズリバタムを占領せしむ

ナジル、ジャング顧慮せずアルコットに在りて優游自適快樂に耽りしが佛將ブッシーがカルナチック第一の堅城ジンジを下すに及び佛軍の侮るべからざるものあるを覺り大軍を以てジンジ城に向ふ。ヅェブレールの夫人は一にジアン、ベガムと稱し印度に生長して土語に通じ東洋流の詭計に熟す。ナジル、ジャングが臣下に人望なきを知りヅェブレールを助けて反間を放たしめしに策略功を奏し叛徒ナジル、ジャングを仆してムザッフィル、ジャングを總督と爲す。新總督先ヅェブレールの功を賞しキストナ河南統轄の權を與へチャンドル、サヒブを以てカルナチックの巡撫となし其命を奉せしむ。ブッシー佛兵を以てムザッフィル、ジャングを保護し徳干に歸りしが叛徒等賞與に満足せず投槍を以て新總督を仆す。ブッシー騒がずナジル、ジャングの弟サラバット、ジャングの幽閉を解き奉じて徳干の總督となす。時に西紀一七五一年なり。此時ヅェブレール并に佛人の權力は恰も旭日の東天に昇るが如く總督巡撫皆其擁立する所なり。地をナジル、ジャングの暗殺されムザッフィル、ジャングの踐祚せる處に卜して一都府を建設しヅェブレール、ファチハバット、Dupleix Patihabadと稱す即ちヅェブレール勝利之都府の義なり。

惟りナジル、チャングの巡撫に任せしムハノッド、アリはトリチノポリに據りて佛人とチャンタル、サヒブとの聯合軍に抵抗す。英人時々援兵を派遣せるも公然佛人と戦端を開始するの意なし。已にしてトリチノポリ開城の説あり。英人はじめて防禦の必要を認め大尉コーブをムハメッド、シアの許に遣す。時にクライヴ大尉たりトリチノポリに至りて形勢を視察し思へらく同城にして下らんか佛人はカルナチックの全權を占め英人の在留を禁すべきや明なり。是實に死活の問題なりと。西紀一七五一年七月クライヴ、カルナチックの内地を経てマドラスに歸り戍兵の留るもの少きを見慮に乗じて其首府アルコットを抜き以て牽制する所あらんとす。其説衆の容るゝ所となり。英人二百土民兵三百を率ゐて雷雨を冒してアルコットに向ふ。守兵一千一百を超えしもクライヴの勇氣に畏れ戦はずして城を棄つ。チャング、サヒブ報を得て驚愕し四千の兵を派して都城を回復せんとす。クライヴ孤軍を以て此大兵を支へ五十日間自若として驚かず。已にしてマアラッタ族兵を擧げてクライヴに應じ援兵新にマドラスより到着せんとす。回教徒の軍其祭日を以て大擧して一齊に進撃し勝敗を決せんとし、が遂に克つ能はず圍を解く。クライ

ヴ北ぐるを追ひて之を破り進みて諸城を下し所謂「ヴェブレ」勝利之都府を粉碎す。

西紀一七五二年三月少佐ラウレンス再び印度に至り軍務を總轄してトリチノポリに向ふ。此時英佛の勢力一變してタンデョール王援兵をムハメッド、アリの許に派しマイソール國の攝政か雇聘せるマアラッタ兵も其將モラリ、ラヲと共に來會す。マイソール國は東ガッツ山脈の西に位せる印度種族の王國なり。五月チャング、サヒブ力盡きタンデョール兵に降りて其殺す所となる。トリチノポリに於ける佛軍も亦同時に降服し英人の權勢滔天の勢あり。偶こムハメッド、アリが初めマイソール國の援助を乞ふに際しトリチノポリの割讓を約し茲に至りて其實行を肯せざるを以て兩者の間に紛議を生じ荏苒決せず。此間德千の佛軍は總督の爲に叛を鎮定し軍功囁々たるを以てヴェブレ夫妻の離間策其功を奏しマイソールの攝政はマアラッタ族と共に復佛人に與みず。總督サラバット、ジャング、ヴェンシ擁立の功に酬わんとしカルナチックの境より北の方海岸六百哩の地を佛人に割讓す。其地の歳入年額五十萬磅を超えマズリバタム港を包含す後に北部サルカルズと

稱するもの是なり。ヅェブレーは又キストナ河南半島の統轄權を總督より得自ら莫臥兒政府の辭令書を有すと稱しムハマド、アリの巡撫たるを認めず。時に英將ラウレンス活潑なる動作に出でず。クライヴは健康を害して歸國し、かば英人は本國政府に訴へて其裁定を仰ぐ。英佛兩國の東印度會社共に軍費の徒に増加して通商の利を殺ぐを喜ばず等しくヅェブレーの舉動を非難す。西紀一七五四年佛國政府ヅェブレーを召還して歸國せしめ翌年一月英佛媾和假條約ボンデシェリに於て調印せらる。ヅェブレー之を聞きて快々として樂まず。西紀一七六四年十一月十日巴里の陋巷に窮死す憐む可き哉。

クライヴ歸國の後代議士となりしが當選訴訟に敗れて復た印度に赴かんとし大佐に任せられ聖ダビド城の司令官に補せらる。西紀一七五五年孟買に着し英佛和成るを聞きて德千進撃を中止し轉じて提督オトソンの艦隊と聯合してアングリア族と稱する海賊を征す。アングリア族は西紀十八世紀の初年莫臥兒帝國の瓦解に際し孟買と臥亞との間に海賊國を建て掠奪を業とす。陸上に於てマアラッタ族シワジの恐怖されしが如くアングリアは海上を横行し海濱百二十哩の地を略し

て船舶に重税を課す。クライヴ、オトソンと共に其第一の要塞ゲリアを圍み西紀一七五六年二月之を滅却す。殘黨マアラッタ族に降りて要塞を棄て航客初めて迫害を脱す。クライヴ任地聖ダビド城に赴く。此時德千總督サラバット、ジャング佛將ブッシーと隙ありブッシー此年七月兵をハイダラバッドに進めて要地を占領す。サラバット、ジャング使をマドラスに派して援軍を求む。英人和約の中に德千の紛紜を規定せざるを以て本國に於て英佛互に干戈に訴へんとするの勢あるを察し之に應せん。八月急報ベンガルより着す曰くベンガル、ビハル、ヲリッサの巡撫カルカッタを占領し英人百二十三人黒害の中に塞息して死すと。德千の事又顧るに違わらず。

第二節 メンガル方面に於ける英人

カルカッタ在住の英人はフーグリ在住の莫臥兒官吏に貢賦を納めベンガル、ビハル、ヲリッサの巡撫と直接の關係を有せず。佛の居留地シャンデルナゴル、蘭の居留地チンストラ共にフーグリの附近にあり其距離互に三四哩に過ぎず。英人は又カ

ルカッタの分店をコッサムバザル、ダッカ、パトナの三地に置き河流を利用して内地と通商す。西紀一七〇〇年ムルシド、クリ汗なる者ベンガル、オリッサ等三省の巡撫となり都城をダッカより移して名をムルシダバッドと命ず。毎年貢賦を的里政府に納め賄賂を朝臣に送りしを以て兼ねて收税總長の職に補せられカルムナ沙河以東世襲の基を開く。ムルシド、クリ汗子なし。西紀一七二五年を以て死す。其甥シユージア汗ヲリッサ代官より入りて巡撫の職を襲ぎ嬖臣アリワル汗を以てビハルの代官となす。西紀一七三九年シユージア汗死し其子サルフハラス汗嗣ぐ。サルフハラス汗虐政を好み民心服せず。西紀一七四二年叛徒を攻めて陣歿す。アリワル汗其擁立する所を爲り巡撫の職を篡奪す。此時マアラッタ族遠く三省の地に出没し以後連年雨季の終るを待ちてベンガルを侵す。アリワル汗詭計を以て威服せんとし却て其反抗を招き西紀一七五〇年終にヲリッサ全省をベラール王ボンスラ家に割譲しベンガル、ビハル兩省の四分一税年額十二萬磅の支出を約す。西紀一七五六年四月アリワル汗八十歳の高齡を以て死し其孫スーラジヤ、ドーラ遺命によりて巡撫となる。新巡撫英人の勢力盛なるを見て喜ばずカルカッタの

知事ドレークに令して曰く新築の堡寨を滅却せよと。ドレーク答へて曰く佛人カルカッタを襲ふの説あり因て在來の堡寨を修築するに過ぎずと。スーラジヤ、ドーラ英佛兩國人が領内に戦ふを好まず先一隊の騎兵を派してコッサムバザルの居留地を略せしめ自ら五萬の大軍を率ゐて六月カルカッタに向ふ。在留の英人井ルリヤム城を守らず城外の分營に據りて防禦す。十六日初めて兵火を交へしが分營支ふる能はず十八日激烈なる巷戦となり戦員井ルリヤム城に入りドレーク以下婦女子等船に乗じて逃る。越えて二十日城兵敵する能はず白旗を掲ぐ。スーラジヤ、ドーラ城中に入り金庫を開きて正貨の少額なるを知り失望す。其部下捕虜保管の命を受けて之が處置に苦み所謂黒害を得て之に投ず。黒害は方僅に十八呎の一小室に過ぎず二個の小窓ありて空氣を通ずるのみ。時正に印度に於ける三伏の炎暑宛も燬くが如く翌朝之を開きし時は全員百四十六人の内氣息奄々として僅に生くるを得しもの二十三人に過ぎず。誰か此慘狀を聞きて寒心せざる者あらむ。而かもスーラジヤ、ドーラは惟英人の財貨を検出するに熱心にして之が爲に一掬の涙を濺がず。回教徒の史家又カルカッタの占領を述ぶるも一語の黒害に及ぶなし。思ふ

に印度人民が人類の同情に乏しき其衰替の一原因たらずんばあらず。八月此報のマドラスに達するや居住の英人激昂甚しく徳千の遠征軍を以て直ちにベンガルに派遣するに決す。提督オトソン海軍を指揮し大佐クライヴ陸兵の總督となり十月マドラスを發し翌西紀一七五七年一月一日カルカッタに着す。莫臥兒兵の司令官英人の來着を聞き倉皇フーグりに走り二日英國の國旗井ルリヤム城上に樹つ。十日英軍進みてフーグりに向ひ直ちに之を占領す。スーラジャ、ドーラ、カルカッタ占領の後佛蘭兩國の居留地より多額の貢賦を納め且英人の捕虜を放還し其復讐の舉あるを思はず。ぬに於て慌忙大軍を率ゐてカルカッタに向ひ英人の損害を賠償し和睦を議するの意を揚言す。クライヴも亦佛人と開戦の曉を豫想し腦裏又他事を思はず和議に急なり條約直に成りクライヴ、オトソンと共に巡撫の承諾を経てシャンデルナゴルを襲ひ佛人を逐ひて之を略す。巡撫陽に使を遣して之を賀し陰に佛人の脱走せるものを保護し其將マイル、ジャフィールをしてブラアシに陣せしむ。ブラアシはムルシダバッドよりカルカッタに至るの途に當る。クライヴ其敵意を含むを抗議するや巡撫ろの兵を悉してマイル、ジャフィールの軍

に合す。

マイル、ジャフィール大望あり巡撫の内外に信用なきを察し印度のロスチャルドの評あるジャガット、セスと謀りて不軌を企て巡撫を廢して自立せんとしクライヴに應ず。クライヴ乃ち歐人千人、土民兵二千人を率ゐ大砲八門を以てカルカッタを發してブラアシに向ふ。巡撫の軍は歩兵三萬五千、騎兵一萬五千、大砲五十門と稱す。午前六時巡撫砲戦を挑む。クライヴ砲火を樹林に避けて應せず。日没を待ちて奇功を奏せんとす。正午に至り敵軍堅柵の中に退きて午餐を喫す。クライヴ其先鋒の一隊要地を占むるものあるを見て急に一角を襲ふ。午餐未だ終らず巡撫、麾下の將校休るゝもの多く陣營大に擾亂するに驚き駱駝に騎して走る。全軍潰亂しクライヴ始めて大勝を博しゝを知る。マイル、ジャフィールの軍隊形勢を觀望して動がざりが茲に至りて英軍に加はり敗兵を追撃す。時に西紀一七五七年六月二十三日也。クライヴ進みてムルシエダバッドに至りマイル、ジャフィールを以て巡撫となす。マイル、ジャフィールは深く英人を徳とし莫大の正貨を支出しゝ。外フーグリ河岸の地を東印度會社の知行所となし三萬磅の地料を名義、上莫臥兒政府に納付せしむ。其地

實に十萬磅の歳入あり、其後クライヴは又莫臥兒帝國の貴族に叙せられ其知行所に代えて三萬磅の地料を得たり。スーラジャ、ドーラはブラアシーの役後十日捕虜となり一族と共に残酷なる處刑を受けしと云ふ。

莫臥兒帝國の皇太子即ちシアザタ Shahzada オウド巡撫スーシア、ドーラ并にシャンドルナゴルの故知事ラウの助を得ベンガル、ビハル、ヲリ、サ三省巡撫の敕任を得たりと稱し西紀一七五八年カルムナサ河に臨む、初め西紀一七四八年ムハメッド、シアの殞落するや其子アマッド、シア位に即く。サンニ派シューア派互に宰相を争ひ結局サンニ派勝利を得てニザム、アル、マルクの孫ガズウッヂン印綬を帶す。カズウッヂン帝の執拗なるに堪えず敢て廢立を行ひ西紀一七五四年アラムジイル二世を立て、權勢を專にす。時に阿富汗人バンジャブ地方に侵入し、的里の東北ロヒラ州の地に割據す今のラムポール國の附近なり。西紀一七五七年阿富汗帝アマッド、シア、アブダリ大軍を以て的里に來りガズウッヂンを放逐してロヒラ州の阿富汗人ナジブ、ウッドウラを攝政に任じ掠奪を恣にして歸國す。ガズウッヂン其遠くカンダハルに至るに及びマアラッタ族を率ゐて攝政を追放し皇太子シアザ

ダを殺さんとす。シアザダ逃れてオッドの巡撫スーシア、ドーラに頼る。スーシア、ドーラはサアダット、アリ汗の婿スフダル、ジャングの子にしてシューア派に屬しガズウッヂンと宿仇たり。シアザダを利用してベンガル地方を經略せんとす故に此舉あり。シアザダ、クライヴの勇武を聞き幣を厚くして其援助を求む。クライヴ、身帝國の貴族なるを以て莫臥兒政府の辭令を有せるマイル、ジャフィールを助くるの義務ありと答へ英軍の一隊をバトナに進めて侵入軍を擊退し、がシアザダの窮乏を憐みて八百磅を贈與す。

德千の形勢はクライヴ等北の方ベンガルに赴きしより西紀一七五七年ブッシ、サラバット、ジャングと和を講じ北部サルカルズに師を班へす。サルカルズの地ラジブート族一流の印度種ポリガル族あり從來險を恃みて德千の總督に抗し、が諸王互に和せず遂に佛人に制せらる。殊に井チアナグラム王ポピリ王と相容れずブッシの怒を激してポピリ王を征せしむ。ポピリ王領域を棄て、深山の險に據り佛軍を拒ぎしが其敵せざるを知るに及び婦人と小兒を集めて悉く之を焚死せしめ城を擧げて皆戰死す。從臣四人免れて藪澤に匿れ一夜忍びて井チアナグラ

ム王宮に入り舊主の爲に復讐す。北部サルカルズ地方のポリガル族、ボピリ家の惨憺たる滅亡を見て恐怖せざるなく皆款を佛軍に投ず。此役ブッシー、スーラジアドーラの書に接し、がシャンドルナゴル陷落の報を得てベンガル進軍の策を中止し、#1ザガバタムを攻めて在留の英人を驅逐し且ゴダワリ河口の英人居留地三處を奪ひて報復す。當時の印度人記して曰くブッシーは錦繡燦爛たる衣服を着し出るに必ず象背を以てす之に反してクライヴは常に軍服を着し市街にあるにあらざれば絹布を用ゐず行くに必ず馬背を以てす以て英佛兩國國民資性の差を見る可し。

西紀一七五八年四月佛國の艦隊ボンヂシェリに着し新總督ド、ラリイ伯大軍を以て上陸す。ラリイ伯英人を憎む事甚しく直に兵を聖ダビド城に進め六月二日之を陷る。乃ちマドラス進撃の準備をなしブッシーを德里より召還してド、コンフランを以て之に代ふ。ブッシーの南方に赴くや#2ジアナグラム王直に叛旗を翻へし援をカルカッタに求む。大佐フォルド、クライヴの命を受けて北部サルカルズに赴き十二月コンフランの軍と戦ひて之に克つ。此月十二日ラリイ伯マドラスを襲ひ其

外郭を取りしが聖セオルヂ城堅く守りて下らず。ラリイ伯軍費を備へず翌西紀一七五九年二月十六日英將ボーコックの艦隊來着するあり遂に圍を解く。ボンヂシェリの佛人報を得て歡呼す人心の一致せざる斯の如し豈英人に敵するを得んや。フォルドの軍は其後ブッシーの曾て占領せる英人の居留地を回復し北部サルカルズ地方又佛人の跡を絶つ。サラバット、ジャング幼弟ニザム、アリの叛に遭ひ已に佛人の助を得る能はず英人亦干渉を辭し、を以て西紀一六七一年總督の位をニザム、アリに奪はれ二年の後暗殺に遭ふ。是より先ラリイ伯は西紀一六七〇年一月英の佐官クートの軍とマドラスとボンヂシェリとの中間なるワンヂワッシに戦ひて大敗す。同年冬クート遂にボンヂシェリに迫る。ラリイ伯偶と病床にあり病を力めて防禦に肝膽を碎きしが翌年一月糧食續かず開城す。數週の後ジンジの堅城も亦陥り佛人全くカルナチックを失ふ。ラリイ伯歸國の後國人の攻撃を受け西紀一七六六年五月死刑の宣告を受く。時に獄中にありてコロマンデル海岸の地圖を畫きつゝあり報を得て其兩脚規コンパスを取りて自殺せんとし獄卒の支ふる所となり刑場の露と消えしとぞ。

クライヴは西紀一七五八年六月を以て本國政府よりベンガル知事の辭命を受く。時人巡撫マイル、ジァファイルと呼びて大佐クライヴの牝驢ヒナとなす其實權のクライヴに存するを以てなり。マイル、ジァファイル喜ばず佛人の恃むに足らざるを以て使をバタビアに遣して蘭人の助を得て以て英人を驅逐せんとす。蘭人大に喜び軍艦七隻兵士一千五百人を以てフーグリ河に來襲す。時に英軍ベンガルに止るもの少かりしがクライヴ意を決して之を河口に破り轉じてチンヌーラの蘭人の居留地を征し其通商を許して其軍備を禁ず。是より在印度の蘭人復振はず。此役後三月クライヴ佛人の恐るゝに足らざるを認めて職を辭して歸國の途に就く時に西紀一七六〇年二月なり。マコーレ曰く當時クライヴ版入四萬磅の上に出づ之時價に換算作りしは英人中歸國の前クライヴ書を宰相井ルリヤム、ピットに寄せてベンガル、ビハル、ラリッ、サ三省の地を英國の所領となさんことを勸告す(西紀一七五九年一月七日)ピット爲に王室の權を過大ならしめんことを慮り其策を納れず。

西紀一七五九年的里の宰相、皇帝アラムジールが阿富汗帝と謀を通ずるを發見し皇帝を暗殺す。阿富汗帝ア、マッド、シァ、アブダリ大軍を以て復た的里府に入り宰

相を逐ふ。宰相マアラッタ族を煽動して阿富汗人に抵抗せしめしが西紀一七六一年一月七日的里の近郊バニバットの野にて激戦の後大敗しマアラッタ族二萬戦場に仆る。ア、マッド、シァ、アブダリ莫臥兒帝國を動すの權を握りシァザダ流浪せるを以て其子を以て父に代りて政を攝せしめロヒラ州の阿富汗人ナジブ、ウッド、ラを以て後見となす。シァザダ機に乗じて莫臥兒皇帝の位に即きシァ、アラムと稱しオウド巡撫スージァ、ドーラを以て宰相となし再びビハルの國境に兵を出してベンガルを征せんとす。カルカッタの知事ワンシッタルト夙にマイル、ジァファイルが難局に當るの器にあらざるを察し其義子マイル、カシムを助けて巡撫の位を奪はしめ報酬としてバルドワン、ミドナポール、チッタゴング三州の地を受く。歲入五十萬磅の地なり。新巡撫英の少佐カルナクの援を得てシァ、アラムの軍を破りしが其正統の莫臥兒帝なるを以てバトナに於て拜謁式を行ひ巡撫の辭命を受け二十五萬磅の貢賦を約す。シァ、アラム三省收稅總長の職をワンシッタルトに與へ英人の助を得て的里に入らんとす。ワンシッタルト應せず。而かも是よりマイル、カシム英人に平ならず都城をカルカッタを距る三百哩のモンギールに移し財政を整理し

兵制を改革し暗に英人に備ふ。

西紀一七六二年英人と巡撫との間に通過税賦課の問題に付きて争議を生ず。プラ
アシー役以前に於ては惟會社の通商のみ通過税免除の特権を有し、が役後會社
の役員は盛に私商を營み亦賦課に應せず。殊に土人の英人の手代をなすものは主
人の權勢を利用して内地の官吏を侮蔑し横暴を極む。巡撫堪ゆる能はず遂に會社
役員の商船を押へ通過税を徴收せんとす。知事ワンシタルト并に參事會員ウオ
レンヘスチングス等之に應せんとするも多數の英人は自己の利害に大關係を有
するを以て可かず。西紀一七六三年マイル、カシム通過税を全廢し英人の特權をし
て又特權たるの價値なからしむ。英人大に怒り參事會員アマアット、ヘイの兩人を
使節としてモンギイルに派す。パトナ在留の英人エルリス、アマアット等の談判不調
に歸せんとするの報に接し六月二十五日曉天突然起りて同市を占領す。然るに意外
の成功を喜び警戒を加へざりしを以て正午に至りて逆襲を蒙り逃れんと欲して
能はず在留の英人悉く捕虜となる。マイル、カシム報を得て雀躍し直ちに兵を遣しコ
ッシムバザルを襲ひて英人を捕へアマアットを追ひて之れを殺す。カルカッタ參

事會員の多數はワンシタルトの注意を斥けて用ゐず復讐の方針を決定して同
市内に在住せるマイル、ジアフイルを訪ひ巡撫の位に復す。七月英軍マイル、ジアフ
イルと共に進みてムルシエダバッドを占領しモンギイルに向ふ。マイル、カシム英
人の捕虜百五十名を携へてパトナに赴きしが新都モンギイル陷落の報到るや直
に捕虜屠殺の令を下し十月五日エルリス、ヘイ等以下悉く統殺せらる。十一月英軍
パトナを襲ひて之を下しマイル、カシム家族と共にオウドに通る。オウドの巡撫は
莫臥兒帝國の宰相たり西紀一六七四年四月帝シアアラムを奉じて大軍を以てピ
ハルを襲ふ。英軍境上の兵を退けてパトナの近郊に開戦し之を撃退す。已にして少
佐ヘクトル、マンロー援兵を率ゐてパトナに着し土民兵の將校中敵軍に應ずるも
のを捕へて大砲の口に縛して砲殺す。軍紀漸く正しく十月二十三日雨季の終るに
及びて莫臥兒宰相の軍をバクザルに破り、ラックナウに進む。宰相ロヒラ州に通れ
帝英軍に投ず。英軍オウド全省を占領し印度人ラジア、シタプ、ライ并にブルワント、
シングを以て收税裁判の事を行はしむ。ラジア、シタプ、ライは身的里政府の屬官
に起し功を以てラジアの尊號を得たる人にしてブルワント、シングはベナレス王

なりはじめ宰相に従ひしがシタプ、ライの誘説によりて英軍に投ず。宰相ロヒラ州の阿富汗人に援助を求めしも阿富汗人言を左右に託して兵を出さず。マアラッタ族の援兵を得しも英軍の砲兵に敵せず。已むを得ず降服す。此時マイル、カシムは宰相の爲に其家産を奪はれ。西北方に走りて終る所を知らず。

西紀一七六五年一月マイル、ジアファイル死す。是より先ワンシッタルト英國に歸りスメンヌア臨時知事の職にありクライヴが知事の任命を受け渡來するを知り先んじて功を收めんと謀りマイル、ジアファイルの庶子を立て、巡撫となしムハメッド、レザ汗を以て代理巡撫となし二十萬磅を得てベンガル、ビハル統轄の實權を賣却す。クライヴ四月を以てマドラスに到り五月カルカッタに着す。議定せるを知りスメンヌア等を詰責せしも契約を解除せしむる能はず。乃ちムハメッド、レザ汗の代理巡撫を承認し新にラジア、シタプ、ライを以てバトナにありてビハル省の代理巡撫たらしむ。初め西紀一六七三年二月十日巴里和約を以て英國は印度に於ける占領地を悉く佛國に遷斥し戰端の局を結べり。故にクライヴは佛蘭兩國の嫌疑を新にせん事を慮り莫臥兒帝を擁し其公吏と稱してベンガル、ビハルの兩省を統轄

せんとす。カルカッタを發してガンシス河を溯りアルラハバッドに至りて帝シア、アラム并に宰相に會す。クライヴの權勢盛大にして若々其目的を達しオウド省を宰相に還付して五十萬磅の償金を納めコリア并にアルラハバッドの兩州を貢賦としてシア、アラムに献せしめベンガル、ビハル、オリッサ三省の收稅總長の職を會社の掌中に握る。史家の所謂二重政府即ち是なり。是より巡撫の兵權、法權、警察權等順次に英人の手に歸しベンガル、ビハル兩省は事實上會社の所有とならんとす。

クライヴの外交政策は本國の訓令に基きて内地の諸國に干渉せざるにあり。然るに北部サルカルズ領の所有權に付き徳干の總督と議詰はず。初め大佐フォルドの同地を征するやサラバット、ジャングは其主權を英人に割讓せしがニザム、アリの總督となるに及びて領域の削減に應せず。クライヴ、シア、アラムを以て正統の印度皇帝なりと稱し其詔書を得て領有の權利を決せんとす。思ふに莫臥兒帝國傳來の權利を主張して印度に號令せばクライヴはシア、アラムの大臣として印度全土を統轄する事難きにあらざ。西紀一七六六年英將コーリオウドを派して北部サルカルズを占領せしむ。マドラス在住の英人ニザム、アリがカルナチック侵略の舉るるを

開きてコーリオウドをしてハイダラバッドに赴きて和約を締結せしむ。年末に至りて條約成りシア、アラムの詔書が無視して貢賦年額七萬磅をニザム、アリに納付して初めて北部サルカルズを英領となす。此時英人は又ニザム、アリと同盟して共にマイソールのハイダル、アリを征するを約す。翌西紀一七六七年一月クライヴ印度を去りて復歸らずエレルスト、ベンガル知事の職を襲ぐ。クライヴは歸國の後其改革に不平なりし一派の攻撃を受け議會に於て罪狀を決議さるゝに至り心頗る樂まず西紀一七七四年十一月二十二日を以て自殺す。時に年四十九歳なり。ハイダル、アリは回教徒にして微賤より身を起し初め佛軍の土民兵たりしが次で盜賊の首領となり後にマイソール王の軍に従ひて將校となる。時にマイソール王若年にして攝政叔父ナンヂェラヂと軋轢を事とし政府統一せず。ハイダル、アリ大志あり詭計を用ひて攝政を陥む。自ら王を擁して國內に號令し遂に王位を篡奪して回教帝國を興す。兵を四近に出して經略を事とし西北方の小國若干を併呑して國境を擴大し佛人と同盟せんとす。英人約に従ひニザム、アリと兵を合せてマイソールを襲ひてパンガロール市を占領す。ニザム、アリ陰にマイソール政府と交渉

し英人に背きてハイダル、アリと共にカルナチックを侵さんどす。英軍マドラスに向ひて退却し援兵の來るに及びて回教徒の聯合軍を邀へ二度戦ひて二度之に克つニザム、アリ輕率を悔ひてハイダル、アリを捨て、ハイダラバッドに退き西紀一七六八年復た英人と和を構す。ハイダル、アリは新に兵を募りてカルナチックに横行し課役をタンジョール王に令しボンヂシェリの佛人に通じ精銳の騎兵六千に將として遂にマドラスの近郊に迫る。同地の英人大に驚き西紀一七六九年四月攻守同盟の約を締結す。

ベンガルに於ては會社の經濟益紊亂し西紀一七七〇年エレルスト歸國してカルヂエ知事の職を襲ぎしも改善する處あらず。蓋しクライヴは本國の訓令に従ひて内治に干渉せず惟金錢を獲得せんとして二頭政府なるものを發明し、其制度の不合理なる言を要せず。租税を人民に收めて其權利を保護せず天下豈かゝる怪事あらんや。内地の官吏等が暴斂至らざるなく弊政極めざるなきも英人は措て之を問はず否制度の上より之を問ふ能はず。會社の役員は年々大金を懐にして歸國するも通商の利益は減少して會社は破産の域に沈淪せんとす。西紀一七七〇年よ

り七一年に掛けては又ベンガル地方に大飢饉ありて事態は益否運に向ふ。而して西紀一七七一年シアラム帝マアラッタ族に投じアルラハバッドを去りて的里に赴きクライヴの計畫せる政治上の狂言は頓挫せり。茲に於て會社の取締役は大副振を行ひ面目を一變せんと欲しウォレン、ヘスチングスを以てベンガルの知事に任ず。今其施政を叙するに先ちて孟買政府とマアラッタ族の關係を略述するの必要あり。

第三節 孟買とマアラッタ帝國との關係

鐵道電信の今日に於てこそ其特色を失ひたれマドラス、カルカッタ、孟買は前世紀に於ては各々其政治上の關係を異にし特異の歴史を有す。孟買はマラバル海岸の小島にして對岸の陸地はマアラッタ族の領域たり。北の方スーラット南の方ジンジーラには名義上莫臥兒帝國の海將たるアビシニア人ありシーデー族と稱す。なは南方ケリアに至ればアングリア族なるものありて海賊を業とす。西紀一七四八年マアラッタ帝國の大王サフーのサタラに殞するや王子の踐祚すべきなく王妃

サクワル、バイはサフーの幼弟コルハポール王サムブハジ二世の血族を推さんとしシワジの末子ラジアラムの妻タラ、バイはラジアラムなる少年を以て己の孫なりと稱し互に權勢を争ふ。ラジアラムは西紀一六八九年其兄サムブハジ一世の殺されし後立ちて大王となりしが西紀一七〇〇年其殞するに及びてタラ、バイ幼兒を奉じて攝政となりサフーの立つや西紀一七〇八年禁錮の刑に遭ひ茲に至りて又奸計を施さんどす。宰相バラジ、ラオ王位を篡奪するの志あり先サクワル、バイを仆しラジアラムを奉じて大王の位に即かしめ政府の機關を悉くシワジの舊都プーナに移しマアラッタ帝國攝政の委任をサフー大王に得たりと稱し政府の實權を掌握す。

タラ、バイ宰相の羈絆を脱せんとしマアラッタ諸侯の一なるダマジ、ゲクワルを引きて自家の爪牙となし宣言して曰くラジアラムはシワジの血統にあらざる言は虚偽なりと。バラジ、ラオ急にサタラに赴ひ欺きてゲクワルを禽にしてプーナに移しタラ、バイがなほマアラッタ族の信任あるを以て其ラジアラムを禁錮するを止めず。此頃の里政府に軌轢ありバラジ、ラオ、ニザム、アル、マルクの孫ガデ、ウッヂン

を助けて宰相の職に就くを得せしむ。クライヴ并にオトソンがアングリア族を征し、時は交戦中傍觀せしもマアラッタ族は約に基きて其故地を略す。バラジ、ラオは一の策士にして行政の才あるにあらず。行軍の能あるにあらず。温德斯坦在住軍隊の統御を弟ルーゴナス、ラオに委任し、ブーナの施政を従弟シワダス、ラヲ、バヲに托す。西紀一七五四年の里の宰相莫臥兒帝を廢する時、ルーゴナス、ラヲは其舉を助け兵をラホールに進めてバンジャブを占領す。其後宰相ガザ、ウッヂンが再び廢立を行ふや、阿富汗帝ア、マッド、シア、アブダリはバンジャブに入りてマアラッタ族を驅逐し、的里に入りてジェワソ、バクトを帝位に即かしむ。シワダス、ラヲ、バヲ德干の兵を率ゐて北進し、行々諸侯の兵を會し、印度種族を結合して、阿富汗人を撃退せんとし、西紀一七六一年一月バニバットの一戦却て大敗し、バラジ、ラヲ報を得て憤死す。タラ、バイも亦其敵の後を追ひて死亡せりと云ふ。

バラシ、ラヲの末子マーヅ、ラヲ年十七宰相の位に即き、叔父ルーゴナス、ラヲ攝政の職に就く。即位の後サタラに至りて、禁錮中の大王より叙任の虚禮を受け、且其看守を寛にす。ハイダラバッドの新總督ニザム、アリはマアラッタ族がバニバットの

一敗より回復せざるに先ちて侵略を試みんとし、ベラールのボンストラ家は宰相の權勢に平ならず、機を得て之を仆さんとし、内に於てはマーヅ、ラヲ、ルーゴナス、ラヲと相和せず。ルーゴナス、ラヲ遂に遁れてニザム、アリに倚り、援兵を得てブーナに歸らんとし、がマーヅ、ラヲ急に叔父に降り甘じて、囹圄の人となりしかば、一舉して反對黨を羅致せんとす。ニザム、アリ、ルーゴナス、ラヲが約を踐みて領土を割かざるを怒り、其宰相の献策を納れ、ベラールのボンストラ王を以てマアラッタ帝國の正當の攝政なりと稱し、開戦す。ルーゴナス、ラヲは又ケクワル家、ホルカル家の援を得て、急にベラール州を襲ふ。ニザム、アリ即ちジャノジ、ボンストラと共にブーナの虚を搦く。ルーゴナス、ラヲ轉じてハイダラバッドに至り、反間を放ちてジャノジ、ボンストラをして同盟を棄て、マアラッタ族に復歸せしむ。總督の軍ゴダワリ河畔に於てマアラッタ族と戦ひ、激戦二日、ハイダラバッドの宰相之に死す。茲に於て和成り、ルーゴナス、ラヲはニザム、アリに歳入十萬磅の地を割讓し、且ジャノジ、ボンストラの變心に酬ふ。

西紀一七六四年頃、マイソールのハイダル、アリ漸く盛ならんとするの勢あり、ルー

ゴナス、ラヲ、マーヅ、ラヲと和し、が已にしてルーゴナス、ラヲ陰謀を企て西紀一七六八年には公然叛旗を挙げしが破れて禁錮せらる。蓋し西紀一七六七年マルハル、ラヲ、ホルカル死し、を以て此失敗を招きし也。マルハル、ラヲは遠くサフーの朝よりマルワ地方に於て四分一税徴收の職にありしが此時嗣子死し其妻アイラア、バイ政權を掌握しツカジ、ホルカルなる者を以て司令官となす。孟買在住の英人マーヅ、ラヲと和親を約しサルセト島とパッサーン半島とを得て孟買の防禦に供せんとす。然れ共マアラッタ族は葡人に克ちて其地を占領し、を以て之と別るゝに忍びず。西紀一七六七年同七二年の兩回英人は使節をブーナの朝廷に派して目的を達せんとせり。故に西紀一七六九年マドラスの英人がハイダル、アリと攻守の同盟を約し、後マアラッタ族に對し出兵を促され大に其處置に苦みしと云ふ。ベラールのジアノジ、ボンストラはベンガルに對して四分一税を要求し、かばクライヴはオリッサ省を割讓せしめて之に應せんとせしが本國取締役の反對に會ひて之を實行せず。ボンストラ家も亦前に記し、が如くブーナ并にハイダラバッドと交渉の事件あり且英人の精銳なる兵器を憚り強て要求を主張せず。

ナジブ、ウッドーラはバニバットの戦後その死に至るまでよく其權勢を維持せり。温都斯坦地方にジャット族なるものありて一州をなす今のバルトポール國は其後なり。領袖スラジ、マルなるもの西紀一七六三年を以て的里府を脅迫し翌年又府外の禁園に入りて游獵を縱にす。莫臥兒帝の後見ナジブ、ウッドーラ騎兵を放ちて悉く主従を虐殺せしむ。其後西紀一七六四五年の頃ナジブ、ウッドーラはベンガルの知事スメンシアと謀りオウド省を得シア、アラムを的里に迎へんとせしがクライヴの來着に及て果さず。西紀一七六七年阿富汗帝ア、マッド、シア、アブタリは最後の侵略を試みしがナジブ、ウッドーラの圖る所となり少額の償金を得て快々として歸國す。已にしてマアラッタ族はバニバットの傷痍癒えて復た強國となり五萬の騎兵を以て北進しラジブ、ウッドーラ族より貢賦を收めジャット族の領域に入りスラジ、マルの子を助くと稱し大金を掠む。ナジブ、ウッドーラ大に驚きマアラッタ族と和せんとし、が西紀一七七〇年を以て死し其子ザビタ汗職を襲ぐ。西紀一七七一年マアラッタ諸侯の一なるマハダジ、シンデア突然アルラハバッドに現はれ皇帝シア、アラムを擁して莫臥兒帝國の首府に到る。ザビタ汗ロヒラ州に逃亡しマアラ

タタ族復た温都斯坦の全權を掌握す。マハダジ、シンヂア家はシンヂア家の太祖ラマ
ジ、シンヂアの庶子にして西紀一七五九年其兄の不幸に會ひて相續す。西紀一七七
二年宰相マーヅ、ラヲ肺病に罹りて死し其弟ナライン、ラヲ嗣ぐ。ブーナ政府の混
乱益甚しく孟買との關係を深からしめ遂に第一次マアラッタ戦争を惹起せる顛
末は次節に詳述すべし。

第四節 ウォレン、ヘスチングスの施政

ウォレン、ヘスチングスは其先英國の名流にして西紀一七三二年十二月六日を以
てデイルズフォールドに生る。其父バイナストン十八歳の子なり。西紀一七五〇年一
月齡十八歳の時ベンガルに向ひて本國を出帆し同年十月カルカッタに着し商會
書記の事務に服す。ブラアシーの役後ムルシダバッドの理事官となり西紀一七六
一年よりカルカッタの參事會員となり私商事件の紛議に際し公正の見を執りし
は已に前節に記し、が如し。西紀一七六四年英國に歸りしが忽ちにして貯蓄を蕩
盡しマドラスの參事會員となりて復て印度に航す時に西紀一七六九年なり。通商

上參畫施設する事頗る多く拔擢せられて西紀一七七二年ベンガルの知事となり
益其敏腕を振はんとす。蓋しヘスチングスの施政時代は英領印度の歴史中最も重
要なるものなり。

ヘスチングスのカルカッタに着するや先ムハメッド、レザ汗、ラジア、シタプ、ライの
兩代理巡撫を召換して其權力を收め新に政治機關を設けてクライヴの計畫せる
二重政府を廢す。是よりムルシダバッド在位の巡撫は唯位に備はるのみにしてカ
ルカッタは一躍してベンガル、ビハル兩省の首府となる。殊に前年莫臥兒帝シア、ア
ラムが的里に走りしより英人の主權は其表面の名義を失ひ一に兵力の實權によ
りて維持さるゝに至れり。マアラッタ族マハダジ、シンヂアはシア、アラムを擁して
温都斯坦を統治するの意あり英人に向ひてベンガル兩省の貢賦とアルラハバッ
ド、コラア兩州の租税とを請求す。英人シア、アラムが會社の關係を無視してマアラ
ッタ族に依りしを以て之に應せず。マアラッタ族怒りて兵をロヒラ州に進めオウ
ド省の境に逼りて爲すあらんとす。ロヒラの領袖ハフィツ汗援をオウドに求め四
十萬磅の軍費賠償金を約す。己にしてマーヅ、ラヲ死去の報ありマハダジ、シンヂ

ア等徳干に歸りロヒラ州又安し。オウドの宰相巡撫茲に於てロヒラ州侵略の企圖を爲し英軍を得て其用に供せんとす。西紀一七七三年ヘスチングス宰相にベナレスに會見し軍費四十萬磅を得て其請を納れ且五十萬磅を得てアルラハバッド并にコラアの兩州を宰相に與ふ。蓋し此時會社の經濟紊亂し資金の必要大なりしを以て此策に出でしなり。西紀一七七四年一月英軍オウド省を経てロヒラ州に入り阿富汗人を平定す。ハフィツ汗陣歿す。オウドの巡撫其子フ、イツウラア汗と條約を締結して遂に之を臣屬す。爾來ラムポール巡撫と稱するもの是なり。英國政府西紀一七七三年の議會に於て編制法案を可決しベンガルの知事を以て印度總督となし四名の評議官を置き之を補佐せしめ其任期を五年とし外にカルクッタに高等法院を置き獨立して事を執らしむ。西紀一七七四年ヘスチングス總督となり會社の役員バルエル評議官となり他の三評議官將官クラエリシグ佐官モンソン、フィリップ、フランシス新に英國より着す。フィリップ、フランシスは匿名の論文「ジュニーヤスの手簡」の作者にして才氣縱橫新渡の同僚と共に一體となりて評議會の多數を制しヘスチングスを陥れて代らんとし得失を顧みず其反對

に出づ。西紀一七七五年宰相巡撫死し其子アフ、ウ、ド、ラ嗣ぐ。フランシスの議總督の反對を排して行はれベナレスをオウドの巡撫より奪ひ前巡撫の遺産を其妻并に其母に與ふ是を二公主（イザム）と稱す。印度内地の人士ヘスチングスの權勢失墜するを見て其受賄の罪を數へて功を立て賞を得んとするもの數ふ可らず。殊に著名なるをナンコマルの告訴とす。ナンコマルは高位の婆羅門にして曾てムハメッド、レザ汗免職に與りて功あり其子ベンガル巡撫の内政を掌る。ナンコマル曰く此任命を受くるや賄賂をヘスチングスに納れしが爲なりと。ヘスチングス防訴して曰くナンコマルは賤劣なる匹夫のみ答辯の必要なしと。文書偽造の罪を以てナンコマルを告發して高等法院の評議會と獨立せるを利用して死刑の宣告を與へしむ。法院長エリジ、ア、イム、ペイはヘスチングス同窓の友なり。是より又ヘスチングスの罪を議するものなし。

西紀一七七二年ナライン、ラヲが第五世宰相の位に即くや叔父ル、ゴナス、ラヲの禁錮を解きて攝政の職に復す。叔姪の爭復び起り大臣も亦互に黨を樹て、陰然軌轢す。サカラム、バブーは攝政を助けナナ、フ、ハル、ナ、ベースは宰相を助く。西紀一七七

三年四月攝政忽ち捕縛の命を受けブーナの宮中に幽閉せらる。八月ナライン、ラヲ暗殺に遭ふ。蓋し攝政の妻が捕縛せよとの命令を恣に改竄し、が爲に此不幸を見るに至れり。ルーゴナス、ラヲ第六世宰相となる。ニザム、アリ機を見て兵を動し、マアラッタ族を攻む。此時ジャノジ、ボンストラ死し、西紀一七七三年其弟ムダジ、ボンストラ遺命を矯めて主權を握らんとし、新宰相を助く。ニザム、アリ勝つ能はず、歳入二十萬磅の地を失ひしが、ルーゴナス、ラヲの與みし易きを見て欺きて之を回復す。西紀一七七四年ルーゴナス、ラヲ兵を率ゐて南ハイダルアリを襲ふ。會しナライン、ラヲの未亡人男子を擧げ、ブーナに革命起り拒みてルーゴナス、ラヲを入れず。西紀一七七五年孟買政府ルーゴナス、ラヲとスーラットに於て條約を締結し、サルセット、パッサーン兩地を得て援兵を出す。英軍ブーナ政府の兵を破り約に従ひて、バアローチ州を得る。近きにありしにカルカッタ評議會の嚴命あり、急に兵を收む。大佐アプトン評議會多數の訓令を帯びてブーナに赴き、スーラットの條約を破棄し、僅にサルセット一地の割讓に甘んじ、西紀一七七六年ブルンドハルの條約成る。

ブルンドハルの約後間もなく評議官佐官モンソン死し、ヘスチングスはバルエル

の贊助に加ふるに裁決權を以てシ、フランシスを嗣す。此時佛國は亞米利加殖民地の獨立戰爭を助け、日ならず英國と開戦せんとするの勢あり。佛人サン、ルーバンなるもの佛王の進物を携へてブーナに着し、同盟して英人に當らんとす。ナ、フハルナベース大に喜び、コール港をサン、ルーバンに與ふ。ナ、フハルナベースはナライン、ラヲ未亡人の情人なり、幼主マター、ナライン、ラヲ二世を奉じ、國事を左右せんとす。已にして未亡人死し、ナ、フハルナベースの反對黨サカラム、バブー、ツカジ、ホルカルの同盟を得て、ルーゴナス、ラヲの位を復せんとし、書を孟買に送りて援兵を求む。ヘスチングス佛人の計畫を打破せんと欲し、直に之に應じ、大佐ゴッダルドをしてベンガルを發して、マアラッタ族の領域に向はしめ、孟買兵をしてルーゴナス、ラヲを擁してブーナに進ましむ。時に西紀一七七八年なり。會しマハダジ、シンヂア、ブーナに至りて、ナナ、フハルナベースを助け、サカラム、バブー失意の人と爲り、ツカジ、ホルカル其都城インドールに屏居し、ルーゴナス、ラヲの黨與悉く仆る。孟買兵ブーナを距る十八哩の地に至りて、初めて之を知り、大尉ハルトレーの勇敢なる亦策の施す可きなく、ルーゴナス、ラヲ身をマハダジ、シンヂアの軍に投じ、英人サルセット

の地を還付す。是を西紀一七七九年一月のウルガウムの盟約と爲す。時に大佐ゴッダルトの軍は進みてナルブッタ河畔のバルハムポールにあり盟約成るを聞いて北の方スーラットに向ふ。然れ共此時英佛已に開戦し到底マアラッタ族と和す可らず。ヘスチングス斷然ウルガウムの盟約を眼中に置かず戦闘を繼續せしむ。大佐ゴッダルトの軍轉じてグーセラット省に入りマアラッタ族の所領を奪ふ。マハダジ、シンデア、ツガジ、ホルカル騎兵を以て其後を斷ちゴッダルトをして進退に窮せしむ。ヘスチングス危急を察し大尉ポブハムをして二千四百の土民兵と砲兵若干を率ゐベンガルを發してマルワに向ひ牽制を試みしむ。ポブハム行々マアラッタ兵を破り西紀一七八〇年遂にマハダジ、シンデアの都城グワリオルを下す。グワリオルは温都斯坦に於ける堅城の魁たりマハダジ、シンデア急に兵を領域に廻しジユムナ河沿岸の地を得て中立を約束す。西紀一七八一年マハダジ、シンデア宰相の評議會を動かし英人と盟約す。翌西紀一七八二年の終に於てナ、フハルナベース漸く之を承認すサルバイ條約と稱するもの是なり。其大意はマーゾー、ラヲ二世を以て宰相となしルーゴナス、ラヲには養老金を與へサルセツト以下

の小島を英人の有とし其他の占領地をマアラッタ族に還付し互に其敵を助けずと云ふにあり。史家西紀一七七九年より同八二年に至るの間を第一次マアラッタ戦役と爲す。

カルナチックの巡撫ムハメッド、アリ西紀一七七三年タンジョールを襲ひ英人の助を得て其王を廢し其地を併呑す。會社の取締役會議之を認可せず新にバイゴット卿をマドラスの知事となし西紀一七七六年タンジョール王の位を復す。マドラス參事會紛擾を極め西紀一七七七年五月バイゴット卿囹圄の中に死す。翌年ベンガルの市民スアトーマス、ラムボルド知事の任命を受けマドラスに赴く。兵を派してボンデシェリーを占領し次でマラバル海岸なるマアへの佛人居留地を略せんとす。マアへは時にマイソール帝ハイダル、アリの領域に屬し開港場として闕く可らず。故に揚言して曰く英人若しマアへを襲はば兵をカルナチックに出さむと然れ共英人は半島内より佛人を驅逐するに決し海陸より道を分ちて兵を進め容易に之を占領す。ラムボルドは亦北部サルカルズの一部ガンツール州の件に付きニザム、アリと協はず。初め同地はニザム、アリの長兄バザラット、ジャングの知行にし

て其死後英人に讓與するの約なりしがバザラット、ジャングが佛軍を得て守備に供せしを以て英人急に之を奪ひムハメッド、アリに與ふ。ニザム、アリ之を聞きて憚ばずヘスチングスも亦ラムボルドの濫りに諸王侯の恨を買ふを怒る。ラムボルト、ヘスチングスの命に従はず西紀一七八〇年四月瓢然として英國に歸る。マドラスの市民ホットヒル知事の職に就き前知事の方針を變せず。此年七月ハイダル、アリ十萬の大兵に將としてカルナチックを襲ふ其帷幄に參畫するは多く佛人なり。是より先ベラール王ムダジ、ボンストラ使をヘスチングスの許に遣して曰くハイダル、アリ、ニザム、アリ、マアラッタ族の三強は聯合してベンガル、孟買、マドラスを陥るゝの議あり。余はブーナ政府の命を受しが諫言を進めたり願くは報酬としてベンガル、ビハル兩省の四分一税を得む。已にしてマドラスの英軍はバクザールの勇將スア、ヘクトル、マンローの指揮を奉じハイダル、アリを邀へ克たずして降服す。ヘスチングス敢て屈せず奇策湧出先ベラール王をして中立を守らしめニザム、アリをして同盟を脱せしめマドラスの知事ホットヒルを罷てガンツール州をニザム、アリに還付す。スア、アイリ、クートの軍海路よりマドラスに向ひボルト、ノ

ボの一戦ハイダル、アリに克ち爾來連戦連勝カルナチックを克復す。西紀一七八二年ハイダル、アリ死し其子チャブー位を嗣ぐ。マカルトネー卿マドラスの知事と爲り西紀一七八一年を以て印度に着しマイソール國との戦端を繼續せしが西紀一七八四年使節をチップーの許に派し媾和條約をマンガロールに於て締結す。戦役中マカルトネー卿カルナチックの財政を管理し役後巡撫ムハメッド、アリに養老金を與へて實權を會社に留保せんとす。西紀一七八四年ピットの法案議會を通過し皇室の指名に成れる監督局なるものを設けて東印度會社の事務を統轄す。マカルトネー卿監督局の認可を得る能はずカルナチック還付の命に接し辭職す。マカルトネー卿は亦西紀一七八一年を以て蘭人の所有なるバリカット、サドラスの二港を奪ひ其敵手に落つるを防ぐ。

初めヘスチングスのフランシスと容れざるや辭職の意を郷國の友人に通じ、かば取締役は將官クラエリングを以て其後に擬す。報カルカッタに達するに及びヘスチングス決心を翻し相持して下らずクラエリング病死して事止む。西紀一七八〇年フランシス、ヘスチングスの對マアラッタ族政策を攻撃せざるを約して和解

し、がバルセルの歸國するに乗じて約を守らず。兩雄終に決闘に訴へフランシス重傷を負ひ滿腔の不滿を忍びて英國に歸る。其後ベンガル政府財政究迫を告げベナレス王廢立の舉あり。西紀一七七一年アルワント、シング死し其子チャイト、シング、ベナレス王となり。西紀一七七五年同地の英領となりしより諸侯の資格を以て統治す。ヘスチングス佛人と開戦せるより以來連年チャイト、シングに向ひて貢賦以外に臨時賦課を命ず。最後に五十萬磅を要求し其百計盡きて叛を謀るに及び一舉にして之を破り其甥を以てベナレス王とし貢賦を倍加す。オウドの二公主チャイト、シングの叛に與すとの説あり。ヘスチングス、アフ、ウッドーラより十萬磅の賄賂を得て二公主の保護を辭しアフ、ウッドーラをして恣に其寶庫を掠め以て償金を完納せしむ。是が爲に財政の究乏は之を援ふを得しも烈しく取締役會の譴責を受けしかばヘスチングスは西紀一七八五年二月總督の職を辭して印度を去り復た來らず。歸國の後フランシス等躍起運動をなし、爲西紀一七八八年より彈劾の議々會に現はれバルクの演説殊に名あり。西紀一七九五年免訴の宣告を受け西紀一八一四年樞密院議官に任せられ西紀一八一八年を以て死す。

第五節 コルンウォリス井にショーアの施政

マハダジ、シンヂアはマアラッタ諸侯中に在りて最も策略に富みナルバイ條約の前後より殊に權勢あり。西紀一七八四年帝シア、アラムの書を得て的里に赴き刺客を放ちて宰相アフシア汗を殺しマアラッタ宰相の爲に皇帝代理の稱を得自らマアラッタ宰相代理と稱して莫臥兒帝國宰相の事を行ふ。初めシア、アラムの的里に還御するや波斯人ナジャフ汗なるもの宰相となり後にオウドの巡撫と結びてザビタ汗と其位を争ひ西紀一七八二年を以て死すアフラシア汗は其子なり茲に於てマハダジ、シンヂア新にガンチス、ジユムナ兩河の中間に領域を開き佛人ヅウ、ボアニユーを雇ひて軍隊を訓練シアグラを去る三十哩のムットラに本營を置きシア、アラムを軍中に奉ず。英佛の兩國は西紀一七八三年九月三日エルサイエの和約を以て干戈を收めしど雖も佛國の理事官がブーナに在勤するを見て英人も亦チャールス、マレットを派して之に備ふ。マハダジ、シンヂア英人が直接にブーナ政府と往復するを見て怒色あり即ち往復の文書悉く檢閲を経るを約す。此時マ

アラッタ族とマイソールと戦端を開きしが英人は前年の條約により一方に與して他の一方を敵とする能はず。ヘスチングスの歸國するやマクフェルソンを以て假總督となし、が此時將來の總督は須く貴族を以て之に任ずべしとの説あり。マカルトネー卿を薦めしも應せざりしかば、コルンウォリス卿就任し西紀一七八六年カルカッタに着す。其改革の著しきものは從來の賞與金制度を廢して俸給を増加し官紀を正して閑職を廢止し風紀を矯めて賭博等を嚴禁せし等一二に止まらず。殊に重大なるを地租徵收法の改正となす。初めヘスチングスがベンガル知事の職に就きし時制度の改革を行ひ五ヶ年の期限を以て從來の收税吏に土地を賃貸せり。然れども結果頗る不満足にして五年の後一ヶ年の賃貸を以て之に代ゆるに至れり。コルンウォリスはショーアの策を納れて賃貸の制度を廢し土地を收税吏に交付し地租の年額を一定せり。是が爲收税吏は變じて貴族の大地主となりしと雖も農民の状態は進歩するを得ず利病斷ずるを得ず。コルンウォリスは又ヘスチングス施政以來司法權の英人收税官に歸し、を獨立せしめて新に各都市に法官を置き裁判の事に從はしむ。

マイソールのチャップーは回教を信ずる事篤く父ハイダルアリの上にありマラバル地方に回教の信仰を強ゆ。且他の印度諸王侯の如く莫臥兒帝の王權を認めず自らマイソールの梭里檀と稱す。西紀一七八七年コルンウォリス卿が兵制改革を實行せるを見て大に恐れ急にマアラッタ族と和しトラワンコール王と事端を啓く。トラワンコール王はマラバルの南に位しマンガロール條約を以て英人の保護に屬せり。コルンウォリス卿斷然開戦に決し西紀一七八四年ピットの法案によりて内地諸國との同盟禁止あるにも拘はらずニザム、アリと盟約す。西紀一七九〇年新任マドラス知事ミドウス戦闘に當りしも功を奏する能はず。コルンウォリス卿親ら軍に赴きて指麾し西紀一七九一年バンガロール城に克ちニザム、アリの軍漸く來會す。已にしてマアラッタ兵も亦軍に加はり西紀一七九二年コルンウォリス卿マイソールの國都セリンガタムに迫り近郊の小丘を以て砲兵陣地と爲し攻撃す。チャップー敵する能はず領土の半を割きて英人と總督と宰相とに等分せんことを求め軍費として償金三百萬磅の支出を諾し二子を質とし以て和を講ず。コルンウォリス卿は本國政府の政策を遵奉せずトラワンコール王保護を名としマイソール

梭里檀をして佛人と連絡の途を絶たしめ且一步を進めて權力平均の策を實行せんとせり然れ共印度諸王侯の平和を望まず信義を重せざるが爲其策も亦施すに所なし。

此間温都斯坦に於けるマハダジ、シンヂアの權勢も亦消長を免れず。シア、アラム突然ムットラの陣營を棄て、的里に歸りラジブト諸侯叛を謀る。マハダジ、シンヂア叛徒を征せんとすれば麾下の回教徒悉く敵軍に通じて命に從はずグワリオルに退きてブーナ政府の援を求む。是より先西紀一七八五年前宰相ザビタ汗死し其子ゴーラム、カデル西紀一七八八年を以て盜賊の群を率ゐて的里府に入り二ヶ月の間恣に掠奪を極め遂にシア、アラムを地上に投じ劍を抜きて其眼を刺す。帝復マアラッタ族に倚るの意あり、ナナ、フハルナベース、マハダジ、シンヂアの勢力を忌む。雖も北方に於ける權勢を棄つるに忍びずツカジ、ホルカル并に宰相の近親アリ、バハツルを以て援軍を率ゐて赴かしむ。マハダジ、シンヂア同盟兵と共に的里に入り老帝を援ひゴーラム、カデルを追ひて之を屠殺す。西紀一七九二年マハダジ、シンヂア軍を率ゐて的里よりブーナに至り莫臥兒帝代理の稱號を幼主に授く。是より益

ナ、フハルナベースと相容れず、温都斯坦屯在の軍もホルカルの軍と軌轢しツウ、ボアニュー利を得てツカジ、ホルカル都城インドールに退却す。然る西紀一七九四年二月マハダジ、シンヂア、ブーナに於て死しナ、フハルナベース、マアラッタ帝國の全權を掌握す。

ベンガル地方は極めて平穩にしてコルンウォリス卿は西紀一七九三年を以て地租徵收法の改革を布告して本國に歸りスア、ジョン、ジョーアこの改革完成の功を以て代りて總督となる。是より先佛國に大革命起り王國仆れて共和國と爲り此年二月一日英國に向ひて宣戦し、がば英人三度ボンヂシェリを略す。然れ共ジョーアは本國政府の訓令を守りて内地の政治に干渉せず。ニザム、アリ爲に佛人レイモンを聘して軍隊を整理し以てマアラッタ族に備ふ。西紀一七九五年ブーナ、ハイダラバッド兩政府の間談判遂に破裂して三月兩軍クルドラ城の附近に戦ふ。レイモンの枝隊は其戦闘線を維持せしも總督の騎兵破れて城中に退き二日の後領域の一半を割讓し三百萬磅の四分一税支出を諾して和す。蓋しマアラッタ諸侯が悉く宰相の命を奉じて従軍せるは此役を以て最後となすと云ふ。然るに宰相マーゾーラ

ヲ、ナライン時に年二十一ナ、フハルナベースの掣肘を脱する能はざるを覺り身を階上より投じて死す。ルーゴナス、ラヲの子バジ、ラヲ年二十幽閉中より出て、宰相となりナ、フハルナベースと互に陰謀を試みざるを約す。マハダジ、シンヂアの子ドウラット、ラヲ、シンヂア兵をブーナに進め内訌益々甚しくナ、フハルナベース遂に牢獄に投せられドウラット、ラヲ、シンヂア全市を掠めて北歸す。シヨリア這般の變亂に處するの手腕なきを覺り取締役に向ひて後任者の撰定を申告し西紀一七九八年三月英國に歸る。歸國に先ちて西紀一七九七年オウドの巡撫アツフ、ウッドーラ死し井ジャル、アリなるものを立てしが故巡撫の弟サアダット、アリの正當の繼嗣なるを發見し井ジャル、アリをベナレスに移して養老金を支給す。サアダット、アリ巡撫となり全力を盡して蓄財を事とす。

第六節

ウエルズリ侯のマイソール、カルナチック侵略

ウエルズリ侯が英領印度の總督として初めてカルカッタに上陸せし時は未だモルニングトン卿と稱し時に年三十八才なり。此時に當り英國國民は佛國の革命政府

を憎む事甚しくルイ十六世が皇后と共に斷頭臺上の露と消ぬナポレオンが英國を襲はんとするに至り其情益々深し。新總督佛人がニザム、アリ并にドウラット、ラヲ、シンヂアの軍中に在り梭里檀チッピーが佛國と同盟せんとするを聞き頗る安んせず。初めモルニングトン卿の赴任せんとするやコルンウォリス卿の遺策なる權力平均を實行せんとし、ガクルドラの敗後ニザム、アリの勢甚だ振はずブーナ政府は君臣互に黨を樹て、一致せず。乃ちニザム、アリ并にマアラッタ宰相と同盟してチッピーに當らんとす。ニザム、アリ容易にモルニングトン卿の言に従ひ佛兵を解雇して英兵を以て之に代へチッピーを伐つに當りて援兵を出すを約す。マアラッタ政府は英人がニザム、アリと同盟せるを嫉み條約を締結するを拒みしが開戦の時に至らばマアラッタ兵を派遣すべきを口約す。

梭里檀チッピーの敵意は公然の事實となれり。使節を佛領モーリシヤスの知事の許に派して巴里政府と攻守同盟を約せんとす。已にしてナポレオン佛軍に將として埃及に上陸すとの報あり佛國の艦隊マラバル海岸に向ひて紅海を航進すとの説あり。モルニングトン卿終にチッピーに向ひて大打撃を加へんとし先使節を派

して説明を求めしにチップー使節を拒みて應ぜず。西紀一七九九年英將ハルリスの軍マドラスを發してマイソールを襲ひ大佐アルサル、ウエルズリ枝隊を率ゐて之に従ふ。大佐は總督の弟にして後に有名なるエルリントン公是なり。其他ハイダラバッドの援軍も來會し孟買の英軍は西方よりマイソール國に侵入せしが惟りマアラッタ兵は來會せず。チップー英軍を邀へ撃ちて克たず都城セリンガバタムに退き降を請ふ。英人其領域の一半の割讓と償金二百萬磅を要求し一步も譲らず。チップー要求を斥けて曰く養老金を受くるの巡撫とならんよりは寧ろ戰場に仆れんのみと。五月セリンガバタム城陥りチップー城門の傍に戦死す乃ち屍を收め禮を以て先塋の次に葬る。ハイダル、アリの朝僅に四十年にして亡ぶ。英人喜ばざるもなく土侯其成功の迅速なるに驚かざるものなし。モルニングトン卿此功を以てウエルズリ侯に封せらる。侯も亦クライヴ卿の遺策により領域擴張を蔽はんとしマイソール帝國の一部を以て一王國を起し故印度種王朝の遺子を民間に得て大王となし其餘を三分し一を英領とし一をニザム、アリに與へ一を條件を付してマアラッタ宰相に與ふ。

マイソールの征服以後タンジョール王カルナチック巡撫もベンガルの巡撫の如く虚器を擁するに至れり。タンジョールは西紀十七世紀に於てシワジ家の一族君臨し西紀十八世紀に於て國境一定し其地僻在するを以てマアラッタ中央政府に貢賦を納れず。バイゴット卿が前節に記し、が如く其國王の位を復せし時將來内治に干渉せざるを約し、が爲國王益苛歛を事とし西紀一七八六年の如き六萬五千の住民國境外に逃る。翌西紀一七八七年王殂し義弟アマル、シング嫡子セルフエジと位を争ひて決せず。マドラス政府土民の學識あるもの、言を納れアマル、シングを王位に即かしめしが暴政前代に譲らず。セルフエジ前王の妃と共に禁錮されしがマドラス政府の忠告により同地に移住す。其後セルフエジの歎願によりマドラス政府は再び學識あるもの、言を聞き前の決定を取消す。エルズリ侯乃ちセルフエジを王位に即かしめ行政權を悉く會社に收む故にセルフエジは事實上タンジョールの城市を有し王國の歲入五分一と年金三萬五千磅を得廢王アマル、シングは年金九千磅を支給せらる。

の内政を管理し、後西紀一七九二年ムハメッド、アリと條約を締結して將來開戦の時行政權を會社に握り巡撫は濫に外國と交渉せざるを約す。ムハメッド、アリ西紀一七九五年を以て死し長子ウムダット、アル、ウムラ、アルコットの位に即く。西紀一七九九年エルズリ侯のマイソールを伐つや迅速戦局を結ぶの心算ありしを以てカルナチックを問はず爲に戦役中巡撫の爲に妨害を受く。セリシガバタムの没落後果してムハメッド、アリ父子が前年の約に背きチップーに通せし確證を發見す。エルズリ侯時に巡撫ウムダット、アル、ウムラが病床にありて臨終に近きを以て西紀一八〇一年其死するに及び遺族に告げてカルナチックを收め故巡撫の甥を立て、位に即かしめ年金五萬磅を給しカルナチックの歳入五分一を其一族に約す。茲に於て南方印度全く平定し其他コレルン河南のチンネエリ、マデユラ、マラバル海岸のマラバル本部、カナラ等みな英人領となりクルーグ、コーチン、トラワンコール諸王國は英國政府の諸侯となり半島地方悉く服す。初めコロマンデル海岸六哩の地と一小島とより成立せしマドラス管轄地は西マラバル海岸に達し北キストナ、ゴダワリ兩河に至り南コモリン岬に及ぶ。西紀一八〇〇年スーラット市の

巡撫もカルナチックと同じく英國政府の治下に屬せりと云ふ。

第七節 エルズリ侯のマアラッタ戦役

梭里檀チップーの滅後權力平均の策全く窮し印度の平和は一に罹りて英國政府にあり。エルズリ侯新に政策を案出し内地諸國の外交權を奪ひて保護國に化せしめんとす。大國は英國の軍人を派して其士卒を統率し其報酬として領域を割讓せしめ小國は貢賦を納めしむるに在り。トラワンコール等の小國が斯くの如くにして保護國となりしは上に記ししが如し。ハイダラバットの總督次で英國の諸侯となるを諾し駐屯軍隊の報酬として西紀一七九二年西紀一七九九年の兩回マイソールより得たるの地を英領となす。エルズリ侯は次にマイソールの殘餘をマアラッタ政府に與へてこれが保護權を得んとす。バジ、ララ、ナ、フハルナベース其地に垂涎するも約を立つるを欲せずダウラット、ララ、シンヂアに至りては殊に其意を動し難し。是より先阿富汗帝デーマン、シア西紀一七九六年を以てパンヂヤブに侵入しラホールに及びしが今又書をエルズリ侯に送りて共にマアラッタ族を伐たん

とす。デーマン、シアはアア、マッド、シア、アブタリの孫なり。エルズリ侯其書をダウラト、ラヲ、シンヂアに示し阿富汗人に對して同盟を作為せんとす。シンヂア應せず。エルズリ侯阿富汗人の侵略を恐るゝ甚しくオウドの攻撃の衝に當るを以て巡撫に迫りて其地の一半を英人に割讓せしめ以て温都斯坦地方の防禦に備ふ。オウド即ち保護國と化す。西紀一八〇〇年デーマン、シア位を失ひ阿富汗人の侵略は空想たるに止りしと雖も侯の處置は自衛の必要に出でしものなり。

西紀一八〇〇年マアラッタの大臣ナ、フハルナベース死し宰相バジ、ラヲ實權を握る。而かもダウラト、ラヲ、シンヂアの干渉を蒙る事却て激甚なる者あり。西紀一七九五年ホルカル家の女主アイラア、バイ死しツカジ、ホルカルも二年の後鬼籍に入りしかばダウラト、ラヲ、シンヂアは盟主の勢を以てインドールに至り其遺子の魯鈍なるものを立て、賢明なるものを殺す。然るにツカジの庶子にジャスワント、ラヲ、ホルカルなるものあり藪澤に逃れて無頼の徒を聚め衆二萬を擁して掠奪を業とし西紀一八〇一年十月シンヂアと戦ひて破れしが敢て屈せず。バジ、ラヲ其弟をブーナ市に屠殺するを聞き大に怒り西紀一八〇二年十月シンヂアと宰相と

の聯合軍をブーナに破る。バジ、ラヲ英船に乗じてパッサーンに脱れ同年十二月三十一日同地に於て英人と條約を締結し其諸侯となるを約す。西紀一八〇三年英軍バジ、ラヲを擁してブーナに向ひ大佐エルズリはマドラスの兵を率ひ大佐スチーヴンスンはバイダラパッドの兵に將とし共に之に赴く。バジ、ラヲ陰に援をダウラト、ラシ、ツンヂア并にベラアル王ルゴジ、ボンスラに求め英人の羈絆を脱せんとす。ルゴジ、ボンスラはムダジ、ボンスラの長子にして西紀一七八八年を以て父に嗣ぎて王位に即く。シンヂア、ボンスラ大軍を以てハイダラパッドの西境に迫りジャスワント、ラヲ、ホルカルをして其兵を會せしめんとす。ホルカル其機を利用してインドール王たるの承諾を得軍を遣して人馬を休す。

此時歐洲にありてはナポレオンはなほ印度侵略の素志を變せずシンヂアの軍中を見るにツミボア、ニユーは歸國し、も後任者ペロンは熱心なる共和黨にしてジユムナ、ガンヂス兩河間の軍隊を指揮す。エルズリ侯ベンガル軍の指令官將軍レイクに命じてオウドの境上コウンブールに駐屯して以て之に備へしむ。大佐エルズリ、スチーヴンスンの軍は徳干にありてシンヂア、ボンスラの動靜を伺ひしが西紀

一八〇三年八月最後の談判成らず遂に第二次マアラッタ戦争を見るに至る。九月二十三日エルズリ四千五百の孤軍を以て敵の聯合軍五萬とアッサイの地に戦ひ奇勝を博す。十一月二十九日聯合軍復たアルガウムの地に戦ひて大敗しシンヂア、ボンヌラ降を請ふ。將軍レークは八月に入りてコウンブールの營を發しペロンの騎兵をアリグルに破りて其城を略し佛の歩兵を擊破して的里に入る。莫臥兒帝シア、アラム英國政府の保護を請ひ年金を得て宮中に住す。將軍レーク大佐ヲクテルロニーを的里に留め兵を進めてアグラを略し十一月一日ラスワリの一戦ペロンの軍を粉碎し上温都斯坦全部英人の有となる。シンヂア遂にジエムナ河北シヤムバル河西に對する要求を放棄しボンヌラ王は東方カッタック西方ベラールの地を英人に割譲す。是よりボンヌラ家はナグポール王と通稱す。エルズリ侯領域擴張は本國人の猜忌を招くを憚りベラールをハイダラバッドの總督に與ふ。西紀一八〇四年バロダのゲクワル家ラジブト、諸王侯バルトブールのジャット王等悉く英人の保護國たるを諾しエルズリ侯の政策に従はざるは惟りジャスワント、ラマ、ホルカルある耳。

ジャスワント、ラマ、ホルカルはシワジ一流の賊魁にして鞍上を以て家となし馬首の向ふ所掠奪を極めざるなし。ラジブト、タナ地方殊に其害を被る甚し。エルズリ侯命を將軍レークに下して南ラジブト、タナに進ましめ將軍エルズリをして徳干より北進しシンヂアの軍と合して夾撃せしむ。會て徳干戰役に次ぐに飢饉を以てしエルズリ兵を出すを得ず大佐マアリをして代りてグーセラットより進ましむ。西紀一八〇四年四月將軍レークの軍進みてホルカルの領域に入り五月其屬城ラムブーラを下す。時に雨季に近づきしを以てレーク大佐モンソンを留めて敵に當らしめ本營に歸る。モンソン六月シヤムバル河を渡りコタアを経て益々南しホルカルの國境に入りしがシンヂアの援軍は固よりマアリの軍も亦た來會せず。ホルカル兵を悉してモンソンの軍を襲ひモンソン險を棄てて退軍し八月殘兵アグラに歸着す。ジャスワント、ラマ、ホルカル勢に乗じて北進しムットラを略し的里を襲ひしがオクテルロニー寡兵を以て之を擊退す。時にラジブト、ジャットの諸王侯皆英人に叛き敵兵バルトポールの堅城に據る。將軍レーク先敵の騎兵を破り次てバルトポールを圍み西紀一八〇五年一月より四月に至るまで砲聲を絶たず。バルトポ

ル王恐怖の念を生じ償金二十萬磅を約して復た保護國となる。英國政府エルズリ侯の進取政略を喜ばず印度總督交迭の讒起り此年七月コルンウォリス卿再ヒカルカッタに着しエルズリ侯歸國す。侯の政策は固より欠點なきにあらずと雖も印度の大半を英國の版圖となせし功は百世の後に至るまで赫々たる光輝を史上に放つものあらむ。

コルンウォリス卿時に年六十七老體印度の風土に適せず十月五日を以て死しスア、セオルヂ、バルロウ代りて總督となる。バルロウはエルズリ侯時代の參事會員にして進取主義を賛す。雖も反動の大勢支え難くコルンウォリスの平和維持の遺策に従ふ。西紀一八〇六年一月六日ジャスワント、ラヲ、ホルカルとの間に和約成りラムブーラの外悉く侵地を還付す。バルロウ次でラムブーラを還付しラジブート諸王侯保護の約を廢棄す。この年マドラスの軍令部土民兵の風俗に干涉し、爲チッブー家の遺族の在住せるエルロールに叛亂起りしが大佐ギルレスピ、アルコトより急行して鎮壓す。西紀一八〇七年ミント卿バルロウに嗣ぎて總督となり儉安の策に出でんとせしが外圍の事情は之を許さず。此年シタ族の領袖ランジイト、

シングなるものラホールに起りてパンヂャブを服し東侵す。西紀一八〇八年ミント卿チャールズ、メットカルフを使節として派遣し其撤兵を請せしむ。此頃ジャスワント、ラヲ、ホルカルは飲酒に耽りて幽閉せられ阿富汗人アミール汗なるもの其部衆を領し西紀一八一二年ジャスワント、ラヲ死して養子マルハル、ラヲ、ホルカル、の嗣ぐや益兇暴を逞うす。ラジブータナに於ては西紀一八〇六年よりジョドブルジャイフル兩國間に争亂起り決する處あらず。ヒンドハリ族と稱する盜賊の一群中央印度地方に起り數千群を爲して各地に横行す。西紀一八一三年ミント卿印度を去りてモイラ卿總督の職に就きエルズリ侯進取の政策復び實行せられんとす。ミント卿の在職中西紀一八一〇年佛人を逐ひてマウリシヤ島を奪ひ翌年又其當時占領せる瓜哇島を英領に歸す。或は曰くミント卿が内地の干涉を避けしは這般の事件ありしが爲なりと。

第八節 ネポールの征討。

ネポールは温都斯坦の北ヒマラヤ山の南麓に位し往古より印度人種の佛教徒あ

りて之に住す。是をネワール族と稱す。三個の王國を成しカトマンヅー其盟主となり。農業商業を勤め英人と通商す。然るに西紀一七六七年彼の中古に於て印度史上に大變革を來せし婆羅門の反動は其最後の波動を此山中に及ぼしカシミル在住の郭爾喀族は銳を盡してネポールを襲ふ。郭爾喀族はラジブト族と婆羅門族とより成れる尙武の人種にして其ネワール族を伐つや宛も猛虎の群羊を驅るが如し。カトマンヅー王都城に籠居し援を英人に求めしかば大尉キンロックは一隊の兵を率て進みしが士卒病に斃れ糧食亦繼かず。郭爾喀族の領袖ブリスイ、ナライン土民の命に従はざるものを悉く屠りてネポール大王の位に即く。西紀一七七一年ブリスイ、ナライン死す。二子あり西紀一七七五年長子次で死し其子ラン、バハヅル位に即き叔父を以て攝政となす。攝政武を好み兵を四近に出して掠奪を恣にし遂に西紀一七九二年を以て清國と難を構へしが其詳細は後章に記述すべし。此年郭爾喀族初めて英人と修交通商の約を結び且援を英人に求む。コルンウ、リス卿大佐カルクバトリックをカトマンヅーに派して居中調停せしめんとす。カルクバトリック至れば郭爾喀族已に清軍と和し英人との條約を悔ゆるの色あり使命何の得る所な

くして歸り條約又空文となる。

西紀一七九五年大王ラン、バハヅル年二十叔父の攝政を廢して牢獄に投じ親政を令す。大王暴虐正妃子なし次妃一子あり共に棄て、顧みず族制の異なるに拘らず婆羅門族の寡婦を納れ一子を舉ぐ。已にして愛妃痘を病みて死す。大王大に悲み位を四歳の幼子に譲り長子六歳なるを立て、宰相となし次妃を攝政とし親ら實權を左右す。貴族等ラン、バハヅルの暴政に苦みダモツル、バンデイなるもの首領となりて黨を樹て叛を謀る。ラン、バハヅル敵せず西紀一八〇〇年正妃と貴族ビム、サイン、タバを伴ひて夜に乗じて國都を棄て、ベナレスに走る。蓋しタバ家とバンデイ家とは宿仇たり。ダモツル、バンデイ宰相となり一族を以て大臣の位に充て國政を恣にする。時にエルズリ侯總督の位にあり此機に乗じてネポールの通商を復興せんとし大尉ノックスをしてラン、バハヅルと交渉せしめ次で西紀一八〇二年を以てカトマンヅーに至らしめしが成功する能はず。西紀一八〇三年正妃急にベナレスを去りて歸國しダモツル、バンデイに迎へられて國都に入り次妃に代りて攝政となる。西紀一八〇四年ラン、バハヅル、ビム、サイン、タバと共に又ネポールに歸りダモ

ヅル、バンデイを捕縛して斬罪に處しビム、サイン、タバを宰相となす。ラン、バハヅルに弟あり異圖を抱き其顯るゝに及びてラン、バハヅルを弑して仆る。ビム、サイン、タバ正妃と通じ共に權を專にせんと欲し此舉に出しは蓋し疑ふ可らず。郭爾略政府はダグデーリングよりシムラに至る一帶の地に於て至る所として英領を蠶食せざるはなくスア、セオルヂ、バルロウ抗議しミント卿抗議せしも敢て耳を傾けず。最近二十五年間に於て英領の村落二百有餘を奪ひ其意ガンヂヌ河に達せざる時は止まざるが如し。遂に二個の廣大なる地を奪ひしかばミント卿はネポール政府に交渉して互に委員を設けて調査に従はしめしに其地は西紀一八〇一年オウドより英國に割讓せる領域なる事明白となれり。然るにネポール政府は委員を召還して其議に従はず。ミント卿乃ち最終談判書を送りしにモイラ卿の赴任の後に於て回答ありて要求に應せず。モイラ卿復び談判書を送り書中に領域還付の日時を定む期に至るも回答至らず。英兵直ちに進みて其地を占領し巡查駐在所を置き保護に備ふ。カトマンヅに於ては貴族二十二人召集の命を受けて和戦を議す。老将アマル、シング和議を主として曰くネワール族を伐つは鹿を獵するが如

し英人と戦ふは猛虎に向ふが如けむと、衆可とするもの多し。獨りビム、サイン、タバ曰くネポール天險何者かよく之に敵せむ。英人はバルトポールの人造城寨すら陥るゝの勇なし如何ぞ我に敵せむやと、貴族會議遂に戦端を啓くに決し大軍を争論の地に送り駐在所を襲ひて巡查十八人を屠り凱歌を奏して急に國都に退軍す。モイラ卿直に遠征の策を定め兵士三萬を分ちて四隊となし西路の軍はサットラジ河に沿ひて進み東路の軍はカトマンヅに向ひ其他は中路よりす。ネポールの南境ヲライ山地險にして近く可らずエルロールの驍將將軍ギルレスピ山城を攻めて克たず陣歿し他の一軍の司令官は其兵を山中に置き遣れ歸る。惟西路の司令官將軍オクテルロニーは老功の士なりよく軍をヒマラヤ山腹の地に行り前後五ヶ月險阻を恐れず風雪に屈せず敵將アマル、シングを追撃して遂に堅城マローンを陥る。マローンはヒマラヤ山中の架上にありて兩面の絶壁二百丈と稱す。ビム、サイン、タバ此天險の陥落を聞きて大に驚きカリ河西の地并にヲライ山地を英國に割讓し國都に外交官の駐在を諾し和を求む。唯駐在兵の一事を言はず。和成りモイラ卿功を以てヘスチングス侯に封せられヲクテルロニー爵位を受く。已にして

テライ山地の解釋に付きて異議あり西紀一八一六年將軍スア、ラクテルロニー二萬の兵を率ゐてカトマンヅーに向ひ國都を距る五十哩の地に於て郭爾喀兵を破る。宰相タバ急に原條約を承認し和約スゴリーに於て締結せらる。然れ共其後異議又起り英國政府は交戦を避けてテライ山麓の草澤のみを以て満足し其山地に對する要求を放棄するに至れり。

第九節 ヘスチングス侯の經略

ネポール戰役中西紀一八一五年の冬期よりヒンドハリー族大舉して英領を襲ひ一隊八千ハイダバット總督の領域に入りてキストナ河に達し一隊二萬五千マドスラの管轄地に入りてコロマンデルの海岸に於て村落三百を屠り一隊マアラッタ宰相の國境に入りてマラバル海岸二百哩の地を掠む。翌年冬季又其巢窟を出で、掠奪を事とす。ヒンドハリー族は平時は盜賊なりと雖も戰時にありては從來マアラッタ諸侯の麾下に奮戦せし事少からず。ヘスチングス侯意をヒンドハリー族の鎮壓に決しマアラッタ諸國をして援を與ふるの地なかしめんとす。初め宰相

バジ、ラヲ大臣トリムブクデ、ダイングリアと謀りてバッサインの條約を破棄しマアラッタ帝國元首の權を回復するの志あり。西紀一八一五年パロダのゲクワル家に向ひて舊債の談判を試み大臣の出頭を求む。大臣ガンガドハル、ジャストリ英國政府に身體安全の保護を求め而してブーナに來着す。談判成らんとして成らずトリムブクデ、ダイングリア刺客を放ちてガンガドハル、ジャストリを暗殺す。ブーナ駐在の理事官エルフィンストン英國の保護を破るの罪を以てトリムブクデ、ダイングリアをサルセット島のタヤンナ城に幽す。時に西紀一八一五年九月なり。翌年十二月バジ、ラヲ陰に策をトリムブクシ、ダイングリアに授けて脱走せしめシンジア、ホルカル、アミール汗ヒンドハリー領袖等と交渉し兵を擧げんとす。翌西紀一八一七年五月エルフィンストン宰相バジラヲに迫りて平和の擔保として三個の要塞を得六月ブーナに於て條約を締結し宰相は復た其領域を割讓し私に他國と交渉せざるを宣誓す。

この時ヘスチングス侯の作戦計畫全く成り三管轄地の兵總計百二十萬を動かしヒンドハリー族を滅し併せてシンヂア、ホルカル并にアミール汗を威服せんとす。

親らベンガルの軍を率ゐて北路より進みスア、トヲマス、ヒスロップ、マドラスの軍に將として南路より進み夾撃の策を定む。ダウラット、ラヲ、シンジャ等其策を知らず。マドラス軍の北進するを見て英領并に保護國の國境を防禦するに過ぎず。爲しヒンドハリ族に心を寄す。會てシンヂアがネポールの郭爾喀族に送りて同盟を求むるの書英人の手裏に入る。シンヂア大に恐れラジブト諸王侯の英國の保護國たるヲ諾しヒンドハリ族の驅逐に加はるを約し將來賊群を組織せざるを誓ふ。アミール汗時に年已に老ひ悉く英人の要求を納れ賊首忽ち化してラシブータナなるトク巡撫の祖となる。マルハル、ラヲ、ホルカルは幼弱にして軍人の跋扈を制する能はず攝政太后と共に英人の保護に倚るの意あり。西紀一八一七年十月ヘスチングス侯コウンボールを發してジユムナ河を渡り進軍す。ヒンドハリ族マドラス軍の驅逐する所となりて北進しシンジャの援助を得る能はずベンガル軍の前路を扼するを知りて軍氣急に沮喪し全隊潰亂或は英軍に降るものあり或は戰場に死するものあり或は藪澤に遁れて土民に殺さるものあり孟虎に害せらるものあり。數年の後復たヒンドハリ族の所在を聞かず。

ヒンドハリ族征討の舉あるやヘスチングス侯の眞意は從來の政治組織に變更を加へず單に盜賊の制度を全滅するにあり。然るに征討中マアラッタ宰相、ナグボール王、ホルカルの軍隊等公然叛旗を擧げしを以て現制維持に頼る能はず。宰相バジ、ラヲ西紀一八一七年六月を以てブーナの條約に調印し次で駐在理事官を欺かんと欲し陰に其將校に七ヶ月の俸給を前拂となし騎兵の大隊を解隊す。七月ブーナを去りてマホリに赴き當時ブーナに滞在せるスアジョオン、マルコルムを招き平和の擔保として割讓せる三城の還付を求む。マルコルム其舉兵の準備なるを察せず之を許す。エルフィンストン其情を察するも曲て之に従ふ。九月バジ、ラヲ都城に歸り急に騎兵を召集し揚言して曰くヒンドハリ族の征討に會せむと。而かも北進の令を下さず城塞の守備を堅くし糧食の欠乏を補ひ異圖掩ふ可らず。時にブーナ駐在軍は將軍スミスに屬してヒンドハリ族の征討に向ひ其駐屯する者は土民兵を合せて二千八百に過ぎず。エルフィンストン之を理事廳を去る四哩なるキルキ村に移す。已にして援兵孟買より着し十一月五日エルフィンストン理事廳を去りてキルキの軍に赴く。午後バジ、ラヲ騎兵一萬八千、歩兵八千、大砲十四門を以て

キルキを襲ひ死傷五百に及び敗軍す將軍スミスの軍報に接して南歸し將に十七日の黎明を以て宰相の軍を撃破せんとす。然るに宰相バジ、ラヲ氣力耗き前夕を以て遁れ英軍砲火に訴へずしてブーナを奪ひ將軍スミス、バジ、ラヲを追ふ。此間ナグポール王も亦陰にバジ、ラヲに通ず。西紀一八一六年ルゴジ、ボンストラ死し嗣子白痴なるを以つて甥アツバ、サービッブ攝政となりしが遂に之を殺して自立す。西紀一八一七年十一月バジ、ラヲ英人と戦端を啓きアツバ、サービッブを以つてマアラッタ兵の司令官に任ず。二十四日の夜アツバ、サービッブ書をナグポールの理事官ジェンキンスに送りて曰く、明旦軍隊を會し式を擧げて任命を受けむ乞ふ來會せよと。ジェンキンス回答して曰く、是れバツサーイン并にブーナの約に背くものなり出席する能はずと。翌朝ジェンキンス始めてアツバ、サービッブの詐謀已に熟するを知り英軍を招集してシタツバルヂ丘に陣す丘は理事廳とナグポール市との中間に在り。二十六日午後六時アツバ、サービッブ一萬八千の大軍を以つてシタツバルヂ丘を攻む。英軍僅に一千四百の土民兵より成る而かも此寡軍を以て奮闘頗る勉め翌日正午に至るもなほ勝敗決せず時にベンガル騎兵隊理事廳を護衛す隊長大

尉フイツケラルド危險を顧みず敵の騎兵隊を襲ひ丘上の兵と相應じて夾撃し英軍大勝す。會、アツバ、サービッブ弑逆の罪顯はれしを以てジェンキンス之を廢しルゴジ、ボンストラの外孫九歳の兒童を得てナグポール王とし其母を名義上攝政とし施政の實務を收む。

ホルカルの形勢は其後一大變化を被れり。蓋しマアラッタ宰相府庫を開きてホルカル軍隊の俸給に宛てしめマルハル、ラヲ、ホルカル并に攝政王后其軍隊と和し宰相の爲に英人と開戦せんとす。西紀一八一七年十二月スア、トヲマス、ヒスロップの統率せるマドラス軍ウィチャイン附近に於てホルカルの軍に遭ふ。軍中に隨行せるスア、ジラン、マルコルム攝政王后并に大臣と交渉し和を議せんとす。軍隊の將校交戦を欲し攝政王后を附近の河畔に殺し其死体を河中に投じ大臣を幽す。戦鬪避く可らずスア、ジラン、マルコルム指麾の任に當り西紀一八一七年十二月二十日ホルカル兵を大にミヒッドポールに破る。兵器糧食悉く英軍の掌裏に歸す。茲に於てマアラッタ諸國悉く倒れヘスチングス侯新に政治組織を立つ。其シンジヤ、アミイル汗、ナグポール王との關係は要するに前述の如しと雖も惟マアラッタ族の勢力をラジ

ブータナに及ぼさしめざるの必要ありシンジアの所領アジミール州を英領となす。關係の未定なるは宰相バジラヲ并にマルハル、ラヲ、ホルカルの二國主なり。宰相はブータナを出奔して南サタラに至り久しく虚器を擁せる大王を軍中に奉じてマアラッタ帝國の忠義心を復活せんと試みしが時機已に逸して亦た爲す可らず。有名なるコリイガウムの役は此間の事なり。大尉スタウントン孟買兵の一枝隊に將として西紀一八一八年一月一日ピマ河畔のコリイガウム村に着す。時に宰相の全軍對岸にあり總計騎兵二萬五千歩兵八千と稱す。スタウントン手兵八百に過ぎず直ちに村落を占領して防禦の地を爲し交戦す。日没に及びて兵を收めしは將校十人の中八人を失ひ兵士三分一を失ひしもマアラッタ兵の死傷八百に上る。翌朝バジラヲ再び戦はんと欲せしも軍隊應せず退却す。其の後バジラヲは復たアシユチの役に敗れサタラ王將軍スミスの軍に歸す。ヘスチングス侯宰相を廢して後患を除くの得策なるを認め西紀一八一八年六月其スア、ジヨン、マルコルムの軍に降るに及びコウンボールの近郊に徙し年金八萬磅を給して晩年を送らしむ。トリムブクジ、ダイングリア亦次で降りチユーナル城に幽閉せらる。サタラ王は已にマアラ

ッタ族を御するの信用なく宰相の故地悉く英領となる。ホルカルの領域はヘスチングス侯悉く之を併呑するの意なく其一部を割讓せしめて保護國となす。茲に於て新政治組織完成す。ヘスチングス侯は其他土民の教育を實施し、等文勳も亦乏しからず西紀一八二三年一月一日六十八才の高齡を以て印度を去る。侯は實に能くエルズリ侯の遺志を紹きて其終極の點に至らしめ以て英領印度の基礎を建てしものと云ふ可し。アマアスト卿代りて總督となりしが同年八月まで着任せざりしかば其間會社員アダム假に總督の事を行ふ。アマアスト卿施政中の大事件は第一次緬甸戦争なり請ふ後章に於て之を叙述せむ。

第七章 滿洲朝の西南方經略并に教匪海寇

(西紀一六九七—西紀一八三一)

第一節 青海部并に準噶爾部の叛亂

初め準噶爾部の噶爾丹が其兄價格の長子を殺して自立するや次子策妄阿拉布坦舊臣と與に土魯番に逃れて清朝に通ず。其後虛に乗じて伊犁に歸り博羅塔拉河邊に游牧し噶爾丹滅亡するに及びて阿爾泰山西準部の故地に據りしは已に前章に見ゆ。蓋し康熙帝が破竹の勢に乗じ大軍を進めて其部落を收め其羽翼を絶ち郡縣の制を施行せさりしは失策なり。策妄是より亦た噶爾丹の所爲に倣ひ覇業を再興するの大志あり。自立して汗と稱す。先土爾扈特部阿玉奇汗の女を納れて其父子を離間し其清朝に入貢するの道を阻む。康熙五十四年兵を哈密の北境に出して五寨を侵掠し三月二十五日城下に迫る駐在の清兵撃ちて之を破る。吏部尙書富寧安命を受けて六月二十九日甘州を發し八月十八日巴爾庫爾に至る巴爾庫爾は今の巴

里坤なり。康熙五十六年三月富寧安を以て靖逆將軍となし巴爾庫爾の方面より傳爾丹を以て振武將軍となし祁德里を以て協理將軍となし阿爾泰の方面より準噶爾を征討せしむ。此年策妄其配下をして西藏を占領せしめ爲に又西藏征服の事あり其詳細は第四節に記述すべし。康熙五十九年富寧安等吐魯番、烏魯木齊等に兵を進めて遂に征藏の軍を助く。已にして西藏も亦平ぎ將に大舉して策妄を伐たんとす。康熙六十一年十一月十三日聖祖崩ず在位六十一年にして壽六十九なり。第四子允禩位を嗣ぐ是を世宗憲皇帝となす母は皇后吳雅氏十七年十月三十日を以て生る。即位の明年を以て雍正と改元す。

雍正元年夏青海和碩親王達什巴圖爾の子羅卜藏丹津先人の覇業を回復せんとし陰に策妄阿拉布坦に通じて叛を謀る。初め羅卜藏丹津清軍に従ひて西藏に到りしが茲に於て諸部を誘ひて盟約を定め其猶心を清朝に寄するものを伐つ。且青海の塔爾寺なる大刺麻を擁して遠近を風靡し其衆二十餘萬西寧を犯して牛馬を掠め官兵に抗す。十月川陝總督年羹堯を以て撫遠大將軍と爲し四川提督岳鍾琪を以て奮威將軍となし征服せしむ。年羹堯其部下をして入藏の路を扼せしめ富寧安等に

救して準夷に通ずるの路を截たしむるを請ふ、羅卜藏丹津懼れて罪を請ふと雖も許さず、二年正月岳鍾琪刺麻の賊に黨するものと西寧の東北なる郭隆寺に攻め三嶺を奪ひ十七寨を焚き斬首六千其寺を燬く、二月兵を青海地方に進め哈達河の賊二千を殲し夜を冒して急行し黎明賊の帳に迫る、羅卜藏丹津番婦の衣を纏ひ白駝に騎して遁れ準噶爾に投ず、岳鍾琪其母并に弟妹を俘にして凱旋す時に三月なり、詔して年羹堯を一等公に岳鍾琪を三等公に封ず、三年内外蒙古の例に照し青海諸部を二十九旗に編す之を青海蒙古と云ふ。

羅卜藏丹津の準噶爾に投ずるや清朝使を遣して之を求めしも策妄阿拉布坦應せず而かも亦邊を犯さず故に西師を罷め戍兵を留む、雍正五年冬策妄阿拉布坦死し其子噶爾丹策零立ち亂を好て邊を犯す、七年三月傳爾丹を以て靖遠大軍將と爲し北路より岳鍾琪を以て寧遠大將軍と爲し西路より共に準噶爾を征せしむ、會ま羅卜藏丹津、噶爾丹策零を殺さんとし謀覺れしを以て策零之を清朝に獻せんとし使者を遣す、八年冬準噶爾西路の備なきに乗じ兵二萬を以て潤舍圖卡倫を犯し、が轉戦七晝夜の後退却す、九年四月傳爾丹進みて科布多に城く、六月噶爾丹策零兵三

萬を以て北路を犯し傳爾丹を博克托嶺に誘出して十八日より二十五日に至るまで連日交戦大勝を博す、傳爾丹の兵萬餘人七月一日科布多に還りしもの僅に二千人に過ぎず、傳爾丹を降して振武將軍と爲し順承郡王錫保を以て之に代へ、科布多の營を察罕度爾に移し又馬爾賽を以て撫遠大將軍となし歸化城に屯せしむ、九月噶爾丹策零道に阿爾泰山南に取り東して喀爾喀に侵入す、郡王策凌迎へ戦ひて大に其衆を破る、策凌は元の太祖十八世の孫圖蒙肯の裔なり圖蒙肯刺麻黃教の爲に盡力し達賴刺麻より三音諾顏の號を得しもなほ土謝圖汗に屬し、が策凌幼より北京の内庭に成長して公主に尙し且準噶爾從征の功あるを以て此年親王に封せられ分離して獨立の部落を爲し三音諾顏部と稱す、是より喀爾喀四部七十四旗と爲る、雍正十年七月噶爾丹策零自ら大軍を率ひ北路より入寇す、此時清國は推河翁金河及び拜達里克河の三處に城寨を築き察罕度爾の本營と相犄角して守備す、噶爾丹策零潛に抗愛山に至り哲卜尊丹巴胡土克圖の地を掠めしが胡土克圖已に多倫泊に徙り得る所なし乃ち轉じて三音諾顏部を犯し子女牲畜を掠奪す、時に親王策凌出で、軍に在りしが報を得て急に間道を繞りて其不意に出で準噶爾を喀喇森齋

泊に撃ち大戦二日大に之を取。噶爾丹策零退きて鄂爾昆河を扼し復た策零の爲に破られて麾下三萬其半を失ひ河水爲に赤し。時に馬爾賽拜達里克城にありしが兵を擁して其歸路を邀ふる事を爲さず十一月營中に於て刑せらる。順承郡王も亦功なし十一年七月多羅平郡王福彭を以て定邊大將軍と爲し次で策零を以て之に副たらしむ。是より先十年七月岳鍾琪を召還し張廣泗を以て護理寧遠大將軍となし翌年查郎阿を以て署理定遠大將軍となし張廣泗を副とす。十二年九月張廣泗賊兵を布隆吉大坂に破る。此年噶爾丹策零使を遣して和を請ひ阿爾泰山の故地を得んと欲す。使者往返二載の後議初めて成り阿爾泰山を以て喀爾喀、厄魯特游牧の疆界となし事遂に平く。

雍正十三年八月二十三日世宗崩す年五十八歳なり第四子弘曆立つ是を高宗純皇帝と云ふ。明年を以て乾隆と改元す。乾隆十年噶爾丹策零死す。初め噶爾丹が準噶爾國を起せしより以來三世皆梟雄にして能く其衆を用ひしが是より所部遂に亂る。策零三子あり次子那木札爾母貴きを以て汗位を嗣ぎしが狂暴にして下の爲に弑され庶兄喇麻達爾札立つ。宿將大小二策零の部族其弟策零達什を擁立せんとす。喇麻

爾札之を知り先策零達什を殺し次で小策零の子達什達瓦を殺す。其宰桑薩喇爾千戸を率ゐて清朝に降る。是に於て大策零の孫達瓦齊其黨阿睦爾撒納と哈薩克に奔る。阿睦爾撒納は西藏拉藏汗の孫にして丹衷の子なり而して策零阿拉布坦の外孫なり。人と爲り狼戾にして準噶爾の内亂に乗じ其志を逞うせんと欲し突然精兵に將として伊犁に歸り襲ひて喇麻達爾札を殺し達瓦齊を立つ。小策零の孫濟噶爾服せず兩酋汗位を争ひ國中大に亂る。阿睦爾撒納誘ひて濟噶爾を除き功を恃みて益々驕桀なり。

初め丹衷の殺さるゝや其妻已に子班珠爾を生み且遺腹ありしが改めて輝特部酋に適きて阿睦爾撒納を生む。輝特は土爾扈特に代りて四衛拉特の一なり。故に阿睦爾撒納は輝特台吉として雅爾に居る。時に班珠爾和碩特台吉となり庫爾烏蘇にあり。阿睦爾撒納又都爾伯特台吉納默庫を從へて帳を額爾齊斯河に遷し遂に三部を合して伊犁を侵す。達瓦齊兵三萬八千を領して東西より夾攻す。阿睦爾撒納抗する能はず乾隆十九年秋班珠爾納默庫二台吉と共に所部の兵を率ひて清朝に内附し熱河に入勤して伊犁を取るの方略を説く。既にして準部の驍將瑪木特も亦身を脱

して來歸す是に於て準部の爪牙心腹盡く至り其形勢を指畫する目睫に在るが如し二十年二月機に乗じて大舉し兩朝の憤を雪かんと欲し班第を定北將軍となし阿睦爾撒納を之に副とし永常を定西將軍となし薩賴爾を之に副とし烏里雅蘇臺、巴里坤の兩路より進攻す各部落風を望みて降り五月一日兩路の軍約の如く博羅塔拉河に會す達瓦齊初めて驚き親兵を率ゐて格登山に據りしが清兵が伊犁河を渡りて其營に近くに及び戦はずして遁れ冰嶺を踰ゑて回疆に走り烏斯城に投ず城主霍吉斯已に清將の檄に接し之を執へて以て獻す青海の叛賊羅卜藏丹津も亦捕虜となる高宗其死を赦し班第を誠勇公に薩賴爾を超勇公に封し阿睦爾撒納を雙親王に封ず其後達瓦齊霍吉斯も亦皆親王郡王に封せられて旗籍に入り天山南北二路及び劔らずして平定す。

然るに阿睦爾撒納四部の盟長と爲りて西域を專制せんと欲し隱然自ら總汗を以て處る此年八月十九日入覲の途に於て烏隆古河より北逸し叛旗を舉ぐ時に清兵の伊犁に留るもの僅に五百人に過ぎず班第等歸路梗塞し力戦して死す外蒙古車臣汗部の郡王青衮雜布阿逆に應じ盡く阿爾泰軍台を撤す是より先乾隆十五年三音

諸顔の親王策凌死し世子成衮札布父に嗣ぎて定邊左副將軍たり首として檄を各部に傳へ兵を率ゐて之を討ち遂に驛站を復す此時厄魯特四部前後賊に應じ阿逆博羅塔拉河畔に於て自立して汗と爲り準部復大に擾亂す策楞達爾黨阿相次きて征討の任に當りしが皆功を奏する能はず惟り定邊右副將軍兆惠寡軍を以て伊犁に轉戦し賊を殺す數千其兵一百に當らざるなし二十二年三月高宗厄魯特の徳を以て懐く可らざるを知り成衮札布をして北路より兆惠をして西路より大に之を剿す會に諸部落自ら亂れ互に相呑噬し痘疫亦た盛に行はれ死亡相望む兆惠長驅して諸部の酋長を斬獲し六月阿逆を追ひて左哈薩克に至る哈薩克汗阿布賚使を遣して入貢し阿逆を擒にして獻せんとす阿逆驚きて露西亞の界内に投ず此冬阿逆痘を病みて死し露國清朝の移照に應じて其屍を邊界に移す是に於て成衮札布に命じて歸りて烏里雅蘇臺に鎮せしむ二十二年春兆惠等漏網の厄魯特を討ち準部蕩平す。

其後乾隆三十一年土爾扈特部來歸の事あり本節を終るに臨みて其顛末を略述せむ土爾扈特部露國移住の後清朝との關係は第四章第六節に記せり其後阿玉奇の曾孫渥

巴錫汗位に即かんとして露國の認可を得ず心平ならず。時に其族舍稜清朝に叛きて渥巴錫に投じ盛に伊犁の空虚にして據る可きを説く。乾隆三十六年十一月渥巴錫人口十六萬餘を率ゐて露領を退去し沿途哈薩克并に布魯特の劫掠に遭ひ翌年六月始めて伊犁に達す部衆僅に七萬餘口を存す。伊犁將軍舒赫德其來意を詰る。渥巴錫伊犁既に平き據る可きの地なきを見て答へて曰く露國は宗教風俗同からず願くは中國に依りて部衆を安せむと。廷臣或は之を斥けんぞ。高宗曰く儻し我中國に復さずんば彼將に焉に往かむやと。部衆を新舊二部に分ち舊土爾扈特部は渥巴錫を以て之を領せしめ裕爾都斯河の谷地に遊牧せしめ新土爾扈特部は舍稜を以て之を領せしめ布魯罕河の谷地に遊牧せしむ。此に於て四喀爾喀部四瓦剌部の衆と清朝皆之を撫有す。英國の文豪デ、クイン、シーの「韃靼種族の脱走」を參看せよ。

第二節 回疆の戡定

回疆即ち天山南路は漢書に所謂西域城郭三十六國の地にして北路の準部の如く行國にあらず。元の太祖次子察哈台を土耳其斯坦に封せしより子孫數世相傳へて西

紀一三九五年トグルク、テムル汗の時に至りて始めて回教を奉ず。蓋し回教の始めて此の地に入りしは西紀第八世紀に於て亞刺比亞の名將クチエイバが兵を敖罕より喀什噶爾に移し、時にありと雖も是れより佛敎漸く衰へ諸部の酋長をはじめ回教を信ずるもの益多し。西紀一三八八年帖木兒大舉して東征しトグルク、テムル汗の孫を立て、西サマルカンドに歸る。其後喀什噶爾の梭里檀サイド英名あり四境平定し、が已にして又宗派の爭端を啓く。初め帖木兒の帝國盛運に達するや各地の回教學士國都サマルカンドに集り教祖摩哈默の後裔和卓木ミヤドミ、アジヤムなるもの殊に衆の尊敬を受く。西紀第十五世紀の中葉二子カリヤン及びイサクと共にか喀什噶爾に移り弟子を集めて宗義を講ず。兄カリヤンの徒弟を白山と稱し弟イサクの徒弟を黒山と稱し歲月を経るに従ひ兩黨の軋轢甚しく紛争已まず。西紀一六四五年の頃喀什噶爾領主イスマイル黒山派に屬し白山派の盛なるを見て之を忌み和卓木アバクを放逐す。アバク準噶爾の噶爾丹に應援を求め怨をイスマイルに報ひんとす。西紀一六七八年噶爾丹兵を率ゐて喀什噶爾に入り和卓木アバクを立て、領主とし舊主の一族を率ゐて伊犁に歸る。此に於て元の太祖成吉思

汗の繼統始めて斷え和卓木一族之に代る。噶爾丹の滅後清廷が阿卜都里什特を援けて葉爾羌に歸らしめしは第二章第八節に記し、が如し其子瑪罕木特二子布羅尼特并に霍集占と共に策妄拉布坦の時より執へられて伊犁に在り。布羅尼特霍集占は白山派に屬し清人の所謂大小和卓木是也。乾隆二十年夏清兵の伊犁を定むるや大和卓木に兵を興へて南路を平定せしむ。喀什噶爾葉爾羌等黒山黨の勢強く抵抗を試みしも烏什の攻撃利なく敗走せるに乗じ大和卓木長驅して悉く之を復す。小和卓木留て伊犁に在り阿逆の變に際し衆を率て清兵と戦ひ其の破るゝに及び通れて喀什噶爾に還る。霍集占清將兆惠の招撫に應せず兄布羅尼特に勸めて獨立の計を爲し自立して巴圖爾汗と稱し檄を各城に傳ふ。庫車城主鄂對等伊犁に走り援兵二千を得て還りしが城已に賊の有となり援軍の將伊敏圖戰死す。報北京に達し雅爾哈善を以て靖逆將軍と爲し滿漢の兵萬餘を發し吐魯番より進みて庫車を攻めしむ。和卓木兄弟之を聞き兵萬餘を率ゐて捷徑を取りて來援す。六月清兵其前隊三千を半途に迎へて和托鼎に殲し十六日復千六百を城外の鄂根河に斬り其歸路を絶つ。和卓木兄弟餘兵八百を歛めて城

に入る。雅爾哈善二賊の網に投じしを喜び終日棋奕を事とし備を爲さず。二十四日夜和卓木兄弟四百騎を以て潛に西門を出で鄂根河を渡りて橋を去り追兵を斷つ。然れども城固くして抜けず清兵乃ち地を穿ちて隧道を作り將に城に及ばんとするに至り城兵の覺る所と爲り清兵六百餘悉く溺死す。八月城將圍を突きて夜遁れ餘衆門を開きて降る清兵之を殘殺して剩さず。

高宗怒りて雅爾哈善以下の諸將を誅し兆惠の請を許し師を移して南征せしむ。時に布羅尼特走りて喀什噶爾に據り霍集占葉爾羌に據り東西相犄角す。兆惠副將富德を阿克蘇に留め大軍の集まるを俟ち繼ぎて進ましめ自ら歩騎兵四千を率ゐて先發し十月六日葉爾羌に着す。城の大小十餘清里にして四面に十二門あり兆惠兵少きを以て城東の黒水河を隔て、營を設けて自ら固くす。所謂黒水營是なり。又兵八百を分ち副都統愛隆阿をして喀什噶爾の援路を扼せしむ。城南英奇盤山下に賊の牧羣あり兆惠之を取りて軍資に充てんと欲し十三日千餘騎を率ゐて河を渡る。四百騎僅に渡りて橋忽ち斷たれ城中の賊騎兵五千歩兵一萬相繼ぎて來り侵す。清兵河を隔て、相救ふ能はず且戦ひ且退き水に浮びて營に歸る。死傷數百人兆惠も亦

た再び落馬して再び其馬を易ふ。賊兵河を渡りて來り攻め長圍を築き對陣三閱月に互るも兆惠自若として驚かず。富徳黒水の圍急なるを聞き兵三千を率ひ雪を冒して進軍し二十四年正月六日呼爾滿に於て賊兵五千騎に遭ひ轉戦四晝夜九日葉爾羌河を渡る。而かも黒水の軍を距る猶三百清里賊愈々衆くして進む能はず。是より先愛隆阿、阿克蘇に還りて援軍を催すの檄に接し途に巴里坤大臣阿里衮の援軍と合し兵一千六百を以て來會し夜に乗じて火光を望みて賊壘に逼る。賊暗夜格殺して遁る。兆惠砲聲を聞き援軍の至るを知り圍を潰えて賊兵を破り兩軍會合振旅して阿克蘇に還る。

二十五年六月兵二萬馬三萬駝一萬皆阿克蘇に集りしを以て兆惠は烏什より喀什噶爾に向ひ富徳は和闐より葉爾羌に向ひ兩路より並び進む。和卓木兄弟兆惠の武威に恐れ大兵の至るを見て城を棄て人畜を驅り葱嶺を逾わて西に赴く。初め小和卓木、伊犁より共に歸りし回徒と新に投じたる厄魯特を以て親兵と爲し舊部を疎外し、を以て衆解體し従ふ者少し。前鋒の將明瑞追撃して葱嶺の巔なる霍斯庫嶺に戦ひ勝に乗じて七月七日阿楚爾山に至り斬獲甚だ多し。又た三日にして巴達克

山國の界なる伊西洱庫河に至り回衆一萬二千人を降す。大小和卓木妻子舊僕三四百人と輿に巴達克山に奔る。伊西洱庫河は今のヒヤンヂ河なり。巴達克山酋長大小和卓木が其國を奪はんとするの舉あるを知り兵を興して阿爾渾楚嶺に拒ぎ兄弟を擒にす。後清將の檄に應じ其尸を贈る。波羅尼都の尸は盗み去る者あり二十八年に至りて始めて獲て之を獻す。回部平ぎ二十五年八月捷奏北京に至る兆惠富徳以下諸將の功を賞す。喀什噶爾を以て參贊大臣建牙の所と爲し南路の各城を治め各城其大小に依りて辦事大臣駐防大臣或は領隊大臣を設く。

烏什の酋長霍吉斯が準噶爾の役に達瓦齊を俘にして獻じ、は已に上に見ゆ。然るに二和卓木の亂に際し兩端を持し、を以て高宗其反覆を恐れて北京に召し哈密の阿布都拉を以て之に代ゆ。阿布都拉暴戾にして利欲を縦にし辦事大臣蘇成亦酒色に耽り事を顧みず。土着官吏の妻を官署に留め兵卒をして裸逐せしめ見て以て樂とするに至る。民訴るに所なし。此時布哈爾、阿富汗等西域諸國清朝の西征を懼れて同盟軍を起し巴達克山に至て其王を殺し其城を屠り乾隆二十八年其先鋒霍爾和土に達す。二十九年二月烏什の住民阿富汗人等の應援を恃み叛を謀りて阿布都拉

蘇成以下官吏守兵を併せて盡く之を殺す。阿克蘇辦事大臣卡塔海變を聞き兵五百を領して烏什に赴きしが叛民の爲に破らる。庫車大臣鄂寶の兵も又敗軍す。既にして喀什噶爾參贊大臣納世通、伊犁將軍明瑞兵を率ゐて來會し晝夜城を攻む。叛民防ぎ戰ふこと三ヶ月五月より七月に至りしも期する所の阿富汗人等至らず諸回城又一の應援の擧に出づるものあらず遂に首逆を縛して降る。官軍城に入りて其黨與を殺し老弱萬餘口を伊犁に徙し烏什平ぐ。

亂後二年を經乾隆三十二年復た昌吉の變あり。昌吉縣は烏魯木齊管内の屯田なり。雖も今茲に併叙せむ。此地兵民回屯の外流屯と稱し内地謫戍の屯戸あり。中秋の夕官吏酒を山坡に置きて流人を犒ひ男女雜座して興を遣る。宴酣にして官吏醉に乘じ流婦に偈りて誦はしむ。流人強倖且酒氣の之を激するあり俄に變を爲し官吏を殺し軍器を奪ひ遂に城に據りて叛す。黎明報烏魯木齊に至る都統溫福駐防兵百五十を率ゐて進みて之を討つ。洪山口に至りて賊兵の來るに會し百戰の老兵を以て烏合の衆を迎へ北るを追ひて瑪納斯河に至り悉く之を殲す。其後高宗屢烏什、昌吉二役を擧げて回疆官吏の大戒と爲す。是より後五六十一年間天山の南北又事無し。

第三節 西域諸國との關係

葱嶺以西にありて清國に入貢し服屬せるは哈薩克、布魯特、敖罕、巴達克山、愛烏罕の五國なり。今其關係を聊か左に記さむ。

哈薩克は即ちキルキズ部落にして左右三部に分れ左部は準噶爾の西北に當り右二部は其西に當る。左部は鄂爾圖玉斯と曰ひ其西北境は伊什河に臨み風俗文字略、準部に同じ乾隆二十一年阿逆、哈薩克に走り其汗阿布賽を誘て清兵に抗す。將軍達爾黨阿、哈達哈兩路より出で、哈薩克を伐ち三戰三捷伊什河畔に至りしが詭られて阿逆を逸す。明年將軍兆惠、富德等復た兵を以て追撃深入し、かば阿布賽使を遣して罪を請ひ誓ひて阿逆を擒にして獻せんとす。阿逆覺りて露領に遁れしは上に記せるが如し。是より阿布賽清朝に臣事し互市の地を烏魯木齊に定め歲時朝貢を例と爲す。右二部齋々玉斯、烏拉玉斯は亦中部西部と稱す。西部亦塔什干と名け時に中部と兵を構へしが阿布賽の使清朝の使臣と單騎兩陣の間に入り檄を傳へて甲を解かしむ。適、富德厄魯特の逸賊を追ひて中部に至り莽格特城外に軍するを以

て軍に詣りて款を納る。以上をキルキーズ大部落となす。其他なほ中小の二部落あり一に北部と稱し露境に接近して中國に通せず。

布魯特即ちカラキルキーズ部落はキルキーズの同種別族にして東西部に分つ。東部は天山の北準部の西南に在りて葱嶺に近し。はじめ特穆爾圖泊即ち熱海の左右に游牧し、が準部に迫られて西安集延に寓し清兵伊犁を定むるに及び故地を復す。二十三年六月將軍兆惠等逸賊を追ひて其界に至り侍衛を遣して先づ薩雅克部薩拉巴噶什部を服し次で霍索楚及び啓台兩部を撫す。七月薩婁部も亦來歸し東布魯特五部皆使を遣はして入朝す。西十五部は天山の南回部喀什噶爾城の西北三百清里の地にあり額德格納部之れに長とし水草を逐ひて游牧する事東部に異ならず。乾隆二十四年清兵が逆回を追ひて其地に至るや額德格納部長阿濟畢書を清將に奉じて曰く謹みて所部を率ゐて布哈爾より以東二十萬衆盡く臣僕とならむ。此に於て十五部落亦清朝に服し每歲馬を貢す。

敖罕は葱嶺以西の回國にして四城あり最東なるを安集延と曰ひ次を瑪爾噶朝と曰ひ次を納木干と曰ひ最西なるを敖罕城と爲す。皆那林河岸に濱し敖罕城の額爾

德尼之が長たり。外に塔什干城等の附庸ありて敖罕入城と稱すと雖も同城は哈薩克族の有にして盡く敖罕に屬せず。西に布哈爾國ありて世々敖罕の勁敵たり。乾隆二十四年清軍の霍集占を追ふや霍集占使を遣して安集延に投せんとし、が安集延報せず。既にして清將の派遣せし侍衛布魯特諸部を撫して其境に至り敖罕城主に説くに清朝の威德を以てす。額爾德尼畏れて表を奉じ且馬を貢す。其後霍集占兄弟の巴達克山に於て殺さるゝや博羅尼都の子薩木克敖罕に逃れしを以て同地に回酋の遺孽ありと云ふ。

巴達克山は葱嶺の西南なる回國にして西北に伊西洱河あり。乾隆二十四年霍集占兄弟の破れて巴達克山に奔るや道を假てメッカに赴き教祖に謁せんと稱し兵を縱ちて掠奪す。國主素爾坦沙怒りて博羅尼都を執へ次で霍集占を阿爾渾楚嶺に圍みて之を擒にす。時に副將軍富德軍を瓦漢城に進め檄を移して賊を索む。素爾坦沙傍近回教諸國の詰責を恐れ之に應せざりしが霍集占が陰に塔爾巴斯國と約して謀る處あるを知り霍集占兄弟を殺して其尸を清軍に送り所部及び隣部博羅爾を率ひて俱に款を納る。二十五年使を遣して清國に入朝し刀斧及び八駿馬を貢し是よ

愛烏罕即ち阿富汗は巴達克山の西ある大回國にして三大城あり喀賓堪達哈默沙特是なり。乾隆二十四巴達克山の素爾坦沙が霍集占兄弟を殺すや愛烏罕帝アア、マツト、シア、アブダリ温都斯坦布哈爾等と聯合して師を興し罪を問ふ。二十七年愛烏汗帝清朝の廣大なるを規はんと欲し使を遣して入貢す。降りて道光二十二年に至り布哈爾國敖罕を滅し捷を邊境の卡倫に告げしも乾隆以來通市するのみにして朝貢に列せず故に詳述せず。

第四節 西藏の平定并に廓爾喀族の征討

西藏は古の吐蕃にして元明の時代には烏斯藏と稱し其住民は即ち唐古特人なり。其地を三部に分ち康衛藏となす。康は四川省打箭爐の西に當れる巴塘察木多の地にして前藏となし亦喀木と曰ひ衛は即ち布達拉并に大招寺にして本吐蕃之に都し今達賴之に居り中藏となす。藏は即ち扎什倫布にして本拉藏之を治め今班禪之に居りて後藏となし之に極西の阿里を加へて四部とも稱す。北は黃河の水源に界

し南は大金沙江に界し西は雪嶺に達す。雪嶺の南は所謂五天竺にして佛教の故國なり故に夙より佛教傳來して隆盛を極め高僧八思巴元の世祖の時大寶法王に封せられて其地を領しより釋教の宗主となる其僧皆印度製裝の舊式に法どり紅綺の禪衣を用ひしを以て是を紅教と稱す。其後紅教専ら密呪を持し流弊遂に刀を呑み火を吐きて俗を眩するに至り毫も師巫に異なるなく盡く戒定慧の宗旨を失ふ。此に於てか黃教起る。黃教の開祖宗喀巴は明の永樂十五年西寧衛に生れ西藏の林丹寺に得道し成化十四年に示寂す。初め紅教を習ひしが宗教改革の時機熟せるを觀破し衆を會して自ら其衣冠を黃にし紅教以外別に一派を立て二大弟子に遺囑す。世々呼畢勒罕即ち化身を以て轉生し大乘教を演べしむ。二大弟子は二を達賴喇嘛と云ひ一を班禪喇嘛と云ひ皆死して神通を失はず自ら轉生する所を知り其弟子遵へて之を立て。明の申葉にありては其勢力既に遠く黃教の上にあり。達賴の第一世敦根珠巴は吐蕃贊普の裔にして世々西藏の國主たりしが此に至りて位を會て出家し羅倫嘉穆錯と稱し宗喀巴の衣鉢を傳へ始めて法王を以て藏王の尊稱兼ぬ。第二世の達賴自ら第巴等を置きて兵刑賦稅を代理せしめ其弟子の

胡土克圖と稱するもの教化を分掌す。第三世の時に至りて蒙古地方黃教に従ひ第五世の時に至りて崇德始めて清朝に通ず。此頃厄魯特部の固始汗唐古特部を襲ひて青海に據り喀木を服す。第巴に桑結と稱するものあり達賴を奉じて衛地にありて藏地の藏巴汗と和せず。十年師を固始汗に乞ひて之を滅し其地に班禪を居らしめて二藏を治め紅教の僧侶を放逐す。是より紅教益々微なり。第巴功を恃みて專横を極め康熙二十一年第五世達賴の卒するや秘して喪を發せず。準噶爾を教唆して清朝に抵抗せしめ清朝の西北境をして擾攘數十年の久しきに亘らしめしは皆第巴の致す所なり。四十四年第巴拉藏汗を毒殺せんとして遂げず却て其殺す所と爲る。拉藏汗は固始汗の孫にして布達拉に住して衛藏を治めしを以て遂に此衝突あり。此に於て第巴の立てし假達賴を廢し博克達山の伊西嘉穆錯を立て、第六世達賴となす。青海の諸蒙古之を奉せず別に裏塘の噶爾藏嘉穆錯を以て眞達賴と爲し西寧衛城西南四十清里の塔爾寺に居らしむ。塔爾寺は宗喀巴の胞衣を瘞めし地にして黃教の祖寺なり。兩部の爭議未だ決せずして策妄阿拉布坦擾藏の事起る。初め策妄阿拉布坦拉藏汗の姉を納れ且其子丹衷を伊犁に迎へて女婿となし歸國

を許さず。康熙五十五年十月拉藏汗の守備を怠るに乘じ大策零敦多布に命じ精兵六千を以て丹衷夫婦の歸國を送ると稱し西藏を襲はしむ。翌年七月藏界に達し騰格里海の天險を逾え唐古特兵を破て布達拉を圍む。城中内應して門を開く者あり遂に拉藏汗を殺して其妻子を虜にし各廟の重器を伊犁に送りて新達賴を幽す。西安將軍額倫特援軍の總督となり五十七年六月十八日木魯河を發し途に賊兵を破り侍衛色稜の別軍と會して喀喇河を渡らんとす。賊兵數萬一半を以て河を拒ぎ一半を以て清軍の後にいで其糧道を截つ。兩軍相持する月餘九月額倫特陣歿して清軍大敗し賊勢益々盛なり。乃ち皇子允禔を以て撫遠大將軍となし木魯河に屯して兵饑を治めしめ準部征討の富寧安等をして牽制を試みしむ。五十九年正月平逆將軍延信青海より進み二月定西將軍噶爾弼四川より發す。大策零敦多布自ら青海の軍を拒ぎ部下をして南路を拒かしむ。噶爾弼副將岳鍾琪の計を用ひ土司を招きて前驅となし八月四日拉里より前進し二十五日西藏を取る。延信達賴喇嘛を送りて兵を進め三度戦ひて三度勝ちしかば厄魯特の兵進退敵を受け舊路より北走し其伊犁に逐るを得たるもの半數に及ばず。此に於て蒙古兵二千を駐留し拉藏汗の舊臣

康濟爾をして前藏を掌らしめ頗羅鼐をして後藏を掌らしめ西藏平定す。雍正二年冬康濟爾の權を忌む者あり之を殺して準噶爾に投せんとす。頗羅鼐後藏及び阿里の兵九千を率ゐて賊首を擒にし功を以て西藏總轄の任を受く。是より駐藏大臣正副二人を置き鎮撫の任に當らしむ。其後噶爾丹策零の汗位を嗣くや其入寇を避けて達賴を西裏塘の惠遠廟に移し巴塘裏塘を收めて四川省に歸し其中甸維西を雲南に隸す。十二年準噶爾和を請ひしを以て達賴を送りて藏に歸らしめ噶爾丹復敢て藏地を窺はず西南の巴勒布三部及び布魯克二部相繼ぎ風に奮て入貢す。乾隆十二年頗羅鼐死し其子朱爾墨特襲ぎ奏して駐防の兵を罷め十五年黨を聚めて變を謀りしが成功せずして仆る。是より西藏は四噶布倫をして其權を分たしめ達賴喇嘛をして之を總べしむ。四十五年高宗七旬萬壽節に際し第六世班禪喇嘛北京に至りて之を祝し次で痘を病みて卒しを以て翌年春其遺骸の西歸するに際し朝野の寄捨極めて多し。班禪の兄仲巴呼圖克圖盡く其財を有して一も寺廟と軍隊とに與へず其弟舍瑪爾巴紅教を奉ずるを以て配分を受くるを得ず垂涎已まらず遂に憤りて廓爾喀族を誘ひて入寇せしむ。

廓爾喀は本の巴勒布國にして葉楞部布顏部庫木部より成り雍正九年清朝に方物を貢し、事あり其後廓爾喀族の同地を征服せるは前章に記し、が如し。乾隆五十五年舍瑪爾巴の誘導に應じ商稅の増額と食鹽の糶土とを以て詞を爲し兵を興して邊を侵す。援軍の將侍衛巴忠等兵を按へて戰はず私に和を講じ歲幣を送るを約し飾りて上奏して曰く賊降を乞ふと而して廓爾喀族の大王を讓して入貢國王の封を受けしめんとせしが廓爾喀族清兵を侮り翌年歲幣の約の如くならざるを名ぞし再舉を謀る。駐藏大臣保泰防禦の策を講せず空しく天險を賊手に委じ班禪を前藏に移す。仲巴呼圖克圖貨財を携へて先遁れ衆心潰頽し廓爾喀族札什倫布に入りて大に掠奪を恣にす。乃ち福康安を將軍となし海蘭察を參贊となし索倫滿兵を率ゐて征討せしむ。廓爾喀族前年の役に紐れ一半は所掠を運びて歸國せしも一半は屯留して去らず。五十七年二月將軍參贊青面より後藏に至り四月屯在の敵兵を破りて盡く藏地を復し六月大舉して三路より索倫滿兵に侵入す。廓爾喀族降を乞ひしも許さず七月再び進みて六戰六捷敵兵四千を殺し其國都カトマンツを距る一日程の地に達す。子ボールの南境は時に巴に英人に屬す廓爾喀族其援助を得ん

と欲して得る能はず再び人を遣はし詞を卑くして哀を乞ふ。將軍參贊八月を過れば大雪の歸路を埋むるを以て其降を允し掠奪物を還付し沙瑪爾巴の尸を献せしめ師を班す。是よりチポールの廓爾喀族は絶えず清朝に貢獻す。廓爾喀征討の後土番兵三千漢蒙古兵千を留めて西藏を戍らしめ且駐藏の二大臣をして達賴班禪と與に國事に膺らしむ。是より西藏の政治は始めて一に歸し郡縣を以て治めらるるに至れり。蓋し西藏は喇嘛教の祖國にして布達拉即ち拉薩は基督舊教の羅馬と異ならず。葱嶺以東回部を除くの外漢南と云ひ漠北と云ひ青海と云ひ滇蜀と云ひ皆喇嘛教を奉せざるはなし。喇嘛教は殺生を以て戒禁と爲すを以て其蒙古に入りしより慄悍殺伐の風一變して亦た昔日の北方の強なるものを失へり。乾隆帝深く此に着眼し喇嘛教を以て蒙古を綏服するの方略を定め爾來著しく其功を奏し邊疆無事なるもの久し。而かも是内江を禦くに止まるのみ却て外侮を招くの媒となるを如何せむ。西藏の事を叙し併せて喇嘛教に及ぶ。

第五節 西南苗民金川土司甘肅回徒の鎮撫

支那本部の南雲南貴州兩省僻遠の地苗蠻群居して北京政府の命を奉せざるもの多し。雍正四年鄂爾泰雲南の巡撫となりて總督の事を兼ね苗蠻改土歸流の建議を爲す。乃ち四川の所轄なる東川烏蒙鎮雄の三土司を以て改めて雲南に隸し六年復た三省總督の印を鑄て鄂爾泰をして兼ねて廣西を制せしむ。烏蒙の祿鼎坤四年土司征討の初に於て降り軍功ありしを以て河南參將に任せられしが其望む所土職にあつてを以て憚ばず。其子祿萬福陰に舊部を會して鎮城を陥れ東川鎮雄の苗民を煽動す時に八年の秋なり。總兵哈元生材武膽略人に超え勇名あり能く寡を以て衆を破り叛徒を平ぐ功を以て貴州提督に任せらる。滇邊の諸夷は鎮沅威遠地方先づ服し次で瀾滄江内の孟養茶山の土夷を平げ普洱を以て府と爲す。黔邊の諸夷は廣順定番鎮寧諸州の長寨より鎮撫に着手し古州に至る。古州は沅水の上游清水江の水源に位し萬山の間一の別天地を爲し三國の時孔明駐軍の所なりと云ふ。張廣泗招撫の命を受け八年秋を以て悉く平定の功を奏す。其他廣西省の土司土目も前後服従し九年に至りて三省の邊防皆歸順す。鄂爾泰功を以て襄勤伯に封せられ此年冬武英殿大學士と爲る。

當時貴州台拱の九股苗招撫に就かず十三年春各寨蜂起して清江台拱の間に集り黃平以東の諸城を陷る。五月哈元生を以て揚威將軍と爲し六月湖廣提督董芳を以て副とし之を伐たしむ。會々八寨協副將馮茂降苗六百餘を殺し之を以て苗族の決心益々堅く多くは妻女を手及して後出で、官兵に抗するに至り其徒蔓延して招撫す可らず。且哈元生董芳と合はずして號令一途に出る能はず賊兵間に乘じて益々猖獗極め官軍狼狽して奔命に疲る。乾隆帝位に即き十月湖廣總督張廣泗を以て七省の經略となし哈元生等を節制せしむ。廣泗兵を三隊に分ち一軍をして上九股を攻めしめ一軍をして下九股を攻めしめ自ら清江下流の各寨を攻め向ふ所皆克復す。乾隆元年春復た兵を増して八路に分ち進て其餘黨を牛皮の大箆に圍み斬獲萬餘。瘡痍を犯し棲莽を冒して之を殲す。生苗既に平ぎしを以て六月兵威に乗じて熟苗の賊に與し、之を伐ち前後千二百二十四寨を燒き三百八十八寨を赦す。廣泗を以て貴州の總督となし巡撫の事を兼ねしむ。是より南夷遂に反せず。初め此亂の起奈克鄂爾泰伯爾齊を辭し辭任を請ひ赦許を得しが新帝の立つや遺詔によりて政を輔は乾隆十年死去の時西南夷を開闢せるの功を以て太廟に配享せらる。

金川は小金沙江の上游にして促浸水を大金川と爲し價納水を小金川と爲し明正土司の地に至りて合流す。其土司嘉勒巴康熙五年を以て清朝に内附せしが庶孫莎羅奔なるもの岳鍾琪に従ひ西藏を征して功あり自ら大金川と號し舊土司澤旺を以て小金川と爲す。莎羅奔先其女を澤旺に妻はし乾隆十一年遂に之を劫して其地を奪ひ明年復た革布什札及び明正の兩土司を攻めて巡撫紀山の命を奉せず。張廣泗征討の命を受けて澤旺の美諾官寨に至り其弟良爾吉を従へて進軍す。時に莎羅奔勤烏圍に居り其兄子郎卡噶爾厓にあり軍を分ちて防ぐ。十三年春諸軍多く破れ諸將戦死の報告あり乃ち大學士訥親をして往きて師を視せしめ岳鍾琪を起して提督銜となし功を立てしむ。廣泗訥親の兵を知らざるを侮りて將相和せず。且良爾吉澤旺の妻と通じて官軍の動靜を莎羅奔に通ずるを以て每戦利なく軍數月に亘るも一步も進む能はず。依て更に大學士傅恒を以て經略をなし訥親に死を賜ひ廣泗を京に召して詰責し其抗辨を怒りて斬に處す。十二月傅恒軍に至り良爾吉等を誅して内應を斷ち兵を増して進撃す。翌十四年正月傅恒從來礪を以て礪を攻むるの法を取りしを難じ其戰敗の顛末を奏す。礪は石造の城堡にして守るに易く攻むるに

難し高宗最爾たる土司の爲に用兵二歳に及び兩大臣を誅し、を以て頗る樂まざるに於て皇太后の諭旨に従ひ師を撤せんとす。而かも將外に在るや君命も受けざるあり傳恒岳鍾琪と兩路より兵を進め連りに碇卡に克ち軍聲大に振ふ。莎羅奔父子岳將軍の名を聞きて大に懼れ軍前に詣りて降る。二月四日を以て奏聞す。傳恒を威勇公に封じ岳鍾琪を威信公に復す。(欽定平定金川方略三十二卷參看) 數年の後莎羅奔の兄の子郎卡土司の事を司り漸く桀驁にして二十三年澤旺及び革布什札土司を逐ひ隣境を侵して止まず。三十一年總督阿爾泰に命じて攻めしめしが阿爾泰斷乎たる處分に出る能はず且其女を澤旺の子僧桑格に妻はし又緯斯甲土司と姻を結ぶを許す。緯斯甲と小金川とは附近の土司中大金川に抵抗するの力あるものにして他の土司は或は遠く或は小にして言ふに足らず。是より兩金川結托して益々制す可らず。既にして郎卡死し其子索諾木、僧桑格と鄂克什土司の地を侵し三十六年又革布什札、明正等の土司を攻め僧桑格遂に官軍と衝突す。高宗阿爾泰の職を罷め次で死を賜ひ尙書桂林を以て總督となし大學士溫福をして雲南より進ましめ共に賊を討たしむ。三十七年春桂林南路を取り打箭爐より進みて革

布什札土司の地を恢復し溫福西路を取り汝川より進みて資里及び阿喀に克つ。五月桂林の部將深く敵地に入り兵士三千陷没の不幸に遭しも隱匿して上聞に達せず。乃ち阿桂を以て桂林に代へて南路に赴かしめ十二月官軍進みて美諾に至る。僧桑格已に妻妾を大金川に送り底木達を過ぎて澤旺に寄らんとして扼され遂に自ら大金川に投ず。官軍底木達に至りて澤旺を俘にし索諾木に檄して僧桑格を索めしが應せず。此に於て溫福を以て定邊將軍となし阿桂、豐伸額を副將軍と爲し大舉して進撃せしむ。

三將三路より進み三十八年春溫福、木果木に駐營し提督董天弼をして底木達に分屯して小金川を守らしむ。索諾木大軍の曠日彌久して進軍せざるを見六月陰に小金川の頭目を煽動して急に董天弼の營を陥れしめ木果木を襲ふ。溫福戰死し小金川復た賊の有となる。阿桂定西將軍と爲り豐伸額、明亮副將軍と爲り復た三路より進み十月美諾を奪ひて盡く小金川を復し澤旺を誅す。諸將師を移して大金川を討ち諸寨を下す海蘭察最も戰功あり。索諾木大に懼れ三十九年秋に至り僧桑格を醜殺して其尸を献じ己の罪を赦されむ事を請ふ。阿桂聽かず。四十年七月遂に勒烏圍

に至り中秋の夜を以て之を下す。莎羅奔兄弟以下悉く遁れて噶爾庄に赴く。十二月三路の軍皆噶爾庄に會して長圍を築き晝夜大砲を以て砲撃す。索諾木遂に莎羅奔以下頭目妻子番衆を従へ寨を出で、軍門に降り金川平ぐ。四十一年正月阿桂師を率ゐて凱旋し功を以て誠謀英勇公に封せらる。兩金川の地僅に一千清里に過ぎず而して用兵前後數年に亘り軍費七千萬兩に至る。其征討の困難なりし事察するに餘ありと云ふ可し。(欽定平定兩金川方略參看)

甘肅の回徒は唐の肅代の時より此地に雜居し性質驍悍曾て順治五年中兩回叛を謀り涼州より蘭州鞏昌を陥れ又甘州より肅州を陥れしとありしが總督孟喬芳等孰れも旬日にして之れを平定せり。其後循化廳の回徒に馬明心なるものあり西域に至りて經文を朗誦するを見歸りて從來の默誦を排し徒を集めて新教を唱導す。乾隆四十六年三月其徒黨を集めて老教の徒百餘を屠り遂に征討の官吏を殺す。總督勒爾謹兵を率ゐて之を剿し馬明心を捕へて獄に下す。賊徒二千餘河州を陥れ蘭州を圍み明心を索む。李侍堯を以て勒爾謹に代へ阿桂、海蘭察をして援軍を率ゐて進ましむ。三閏月の後六月初旬に至りて首逆誅に伏し賊徒平定す。然るに李侍堯新

教を待つ事刻なかりしを以て其黨同年冬を以て潛に通渭縣の石峰堡に根據を定め禮拜に托して寺院内に於て軍器を造り四十八年四月を以て蜂起す。李侍堯大に怒りて其黨を撃ち婦女を併せて誅戮し、かば賊勢却りて盛なるものあり。福康安、海蘭察鎮壓の命を受け六月七日を以て戦地に着す。既にして阿桂も亦來會し七月初旬石峯堡を下し賊徒平定す。福康安を嘉勇侯に封じ其他諸將の功を賞し回徒の新教を立つるを禁ず。(欽定蘭州紀略二十卷欽定石峯堡紀略二十卷參看)

第六節 白蓮教徒の叛亂附苗族の變

乾隆六十年清朝其極盛に達し疆域人口雍正の時に倍加し外國の質服する者康熙の上に出づ。而かも外交無事なれば内治多事なるは國家自然の數にして此年湖南貴州紅苗の變あり。翌年一月一日高宗位を第十五子永瑛に傳ふ仁宗睿皇帝是なり。嘉慶と改元す。嘉慶元年湖北四川に白蓮教匪起り九年の間五省の地を擾亂す。初め安徽の劉松なるもの唱首となりて白蓮教を起し衆を惑はして財を斂めしが乾隆

四十年捕へられて甘肅に流さる。其黨劉之協、宋之清、四川、陝西、湖北に布教し、鹿邑の王發生なる兒童をして明裔なりと詭りて朱姓を稱せしめ流俗を煽動す。五十八年事覺はれて復た捕獲せられしが、惟り之協遁れ去りて縛に就かず。州縣の官吏搜索の命を受けて、毎戸糺問を加へ武昌府の同知殊に暴虐を逞くす。時に四川、湖南、貴州、廣西の諸省苗亂征討の爲に大に軍事に苦み又私鹽と私鑄を嚴禁し、を以て無賴の徒生業を失ひて亂を思ふものあり。奸民之に乗じて煽惑し遂に大亂を生ずるに至れり。今其事を叙するの前に於て簡單に苗亂の顛末を記さむ。

湖南、貴州兩省の境に方りて苗地あり。漢人益々蕃殖して其地を占領せしを以て乾隆十六年正月貴州銅仁府の石柳鄧先づ叛し、湖南永綏廳の石三保之に應じ、其他鎮寧、乾州の苗民一時に蜂起して其城を圍む。雲貴總督福康安、四川總督和琳、征討の命に接し、貴州、四川兩省の苗族を平げ、三月兵を合して永綏の圍を解く。然るに翌月湖南總督福寧の軍、乾州に破れしより、苗軍大に振ひ、八月鎮寧の吳八月、三桂の後なりと自稱し、平隴に據りて吳王と稱し、石三保、石柳鄧皆其指揮を受く。九月福康安を貝子に和琳を宣勇伯に封じ、將士を風勵して功を立てしむ。十月苗賊の領袖吳八月を

擒にして降りしも、其子吳廷義等險を待みて自若たり。嘉慶元年五月福康安軍に卒し、郡王を贈られ諡を文襄と稱す。八月和琳も亦軍に卒し、宣勇公を贈らる。參贊額勒登保代りて平隴を攻め、十二月石柳鄧、吳廷義等を斬り、苗族を平ぐ。額勒登保を封じて威勇侯と爲し、其他諸將の功を賞す。二年三月遂に師を班へす。

嘉慶元年正月湖北荊州の枝江、宜都兩地に聶傑人、張正謨等の叛旗を擧げしを教匪の發端とす。二月林之華當陽を陥れ、三月襄陽の姚之富、教首齊林の妻王氏と竹山保康を陥れ、所在響應し、擾亂四川の酉陽に及ぶ。湖廣總督畢沅湖北巡撫惠齡と荊州の賊を攻め、二月聶傑人を擒にし、三月西安將軍恒瑞竹山を復し、が賊勢益々盛なるを以て六月都統永保を以て湖北諸軍の總統とす。十月四川達州の徐天德、大平東郷の王三槐、冷天祿等と並び起る。初め四川に囑匪なるものあり、金川の役、木果木に敗績せる官軍の遺類にして一定の生業なく、盜賊を事とし、遂に白蓮教に入りて叛徒に應ず。四川總督英善、陝甘總督宜綿、鎮撫の命を受け、惠齡十一月を以て永保に代りて軍務を總統す。二年正月苗族の亂平定し、額勒登保以下の諸將、教匪征討の任に就く。時に賊徒河南巡撫景安の防備を勉めざるを見、姚之富、齊王氏以下王廷詔、李全

等路を分ちて南陽より山陽に至る一帶の地を掠め南に轉じて漢江を渡り閏六月遂に四川に入りて同地の賊徒と合す。仁宗惠齡が賊徒の横行を縦にするを怒り五月更に宜綿を以て軍務總統となす。是より先宜綿は英善と任地を換へて四川總督となり苗地より新に來會せる明亮、德楞泰を率ゐて徐王等を破り六月教首孫士鳳を擒にして賊勢漸く盛りしが茲に至りて復た猖獗を極む。

已にして(李全)惟り四川に止りて王三槐に合し、姚之富等復た東して湖北に還る。明亮、德楞泰之を追ひて巴歸の界より襄陽の方面に向ひ西に轉じて郢西に至る。九月李全も亦舊路を取りて陝に出で楚に還らんとせしを以て恒瑞、惠齡漢江に沿ひて東進し東西兩路の賊與安の南岸に會す。四川の地廣く宜綿一人を以て調度し難きにより新任湖廣總督勒保をして四川に赴きて軍務を總統せしむ。十二月漢中の賊兵大兵雲集するを以て北竄する能はず復四川に入りしが巧に諸將の兵を分ち再び漢北に渡る。額勒登保は福寧の軍に合して長陽地方の賊徒を伐ち九月林之華を巫山に斬り十二月覃加耀を終報案に戮し、仁宗其大軍を以て小敵に向ひ持久一年に亘るを責め明亮等の軍に合せしむ。三年正月勒保をして四川總督を兼ねしめ宜綿を

陝甘に移し景安を湖廣總督となす。齊王氏姚之富等益々北進して二月郿縣蓋屋を掠め長安を犯さんとするの勢ありしが總兵王文雄の破る所と爲り三月山陽の石河に於て明亮等の破る所と爲り遂に三岔河に於て勇闘し姚齊二賊崖に墮ちて死す。勒保は自ら王三槐、冷天祿に當り七月貢生劉醒渠なるものをして三槐を説かしめ之を生擒す。而かも其衆は猶散せず然るに功を以て威勤公に封せられ且軍機大臣和珅は公爵に福長安は侯爵に封せらる。李全、高均德等官軍に敵する能はず。五月川北の賊徒羅其清、冉文儂等に倚る。額勒登保十一月を以て羅其清を石洞に生擒し十二月除夕德楞泰、冉文儂を通江に斬る。

四年正月三日乾隆帝崩す七日威勤公和珅が從征の將師と通じ上聞を欺きしの罪を以て其官を免じ勒保を經略大臣となし明亮、額勒登保を參贊大臣となす。且送迎伯の名ある和珅の族孫景安を始め虐政を行ひし武昌府の同知等を罰し倭什布を以て湖廣總督となす。又前年明亮等の上奏せる堅壁清野の策を實施せしむる等征討の方略を一新し漸く賊勢を萎靡せしむるに至れり。額勒登保の部將なる楊遇春、穆克登、布揚芳等皆勇名あり。次を以て賊魁蕭占國、張長庚、冷天祿等を斬獲す。七月勒

保が經略として功を奏せざるを責め八月更に額勒登保を以て經略大臣と爲す又工部尙書那彥成を以て欽差大臣となし征討を助けしめ宜綿惠齡以下の諸將を討す九月明亮五郎に於て張漢潮を斬りしが詔ありて入京し那彥成之に代る十月德楞泰放馬場に於て高均德を生擒し功を以て參贊大臣に任せらる那彥成は阿桂の孫なり其後改めて參贊大臣に任せられしが功なきを以て五月京師に召還せらる六月教首劉之協河南の葉縣に於て擒にせられしを以て仁宗邪教説を作り從逆を治し從教を治せざるの旨を天下に布告す六年二月楊遇春陝西に入りて王廷詔を生擒し五月徐天德德楞泰に追はれて仁和新灘に溺死し七月勒保南江に於て冉學勝を生擒し十一月達州を改めて綏定府となし七年十二月に至りて逆首略盡く額勒登保を威勇侯に德楞泰を繼勇侯に封じ其他勒保明亮以下諸將賞賜差あり其後諸將は各地の餘黨を征し九年九月に至りて漸く師を班す事起るより戡定に至るまで前後九年軍費二億兩に及び賊を殺すこと數十萬官兵と卿勇の陣亡するものと五省の良民の毒に罹るものは得て稽ふ可らずと云ふ五省とは賊徒が甘肅の南部を侵掠し、が爲にして本文其詳を盡さざるは極めて簡略に従ひたるが

爲なり。

第七節 海寇の猖獗并に天里教匪

清國と安南との直接なる關係は便宜上次章に於て詳述すべし而して阮光平父子が安南國王の位を奪ふや軍費闕乏の急を濟はんとし沿海無頼の徒に官爵を與へ兵船を給して海賊を獎勵し、より廣東地方大に其害を被る繼で内地の土盜鳳尾幫水湧幫等之に應じ清朝が一意教匪の征討に従事するに乗じ遠く福建浙江の沿海地方に至り土盜と相倚りて暴威を振ふ嘉慶元年福州將軍兩廣總督前後海賊を捕へて安南總兵の印を得しかば清帝之を安南王に語りしに王曰く知る所にあらずと四年舊阮王が新阮を討ち海賊を擒へて送り來るに及びて清朝初めて内地の奸民が新阮の官職を受けしを知る五年六月賊船百隻浙江に來り台州に偏らんとし、かば定海鎮總兵李長庚三鎮の水師を總統して大に之を破る安南賊船總兵十二人前中後三支の内後支四人を得て磔刑に處す會安南新阮王々位に即きて清朝の封を受け海賊を放逐し、を以て福建濟州の海賊蔡牽なるもの其黨の同地方にあ

るものを併せて之が領袖となり沿海航海の船舶に番銀四百圓の通行税を課し頗る猖獗を極む。

李長庚擢でられて浙江提督と爲り八年正月蔡牽の定海に來りしに際して之を破り晝夜窮追して閩洋に至る。牽下風にありて遁るゝの途なきを以て僞りて降を閩總督玉徳に乞ひ間を得て遁れ去り遂に台灣に渡る。九年夏臺灣米數千石を奪ひ粵の海盜朱潰と聯合して突然閩を襲ひ造船用材運搬の任に當れる浙江總兵胡振聲を殺す。李長庚閩浙水師總統の命を受け八月二賊を定海の北洋に撃ちて大勝を博す。蔡牽朱潰が命を用ゐざるを責めしより二賊復た和せず。十年冬蔡牽百餘艘を率ゐて復た臺灣を犯し土匪萬餘を結びて府城を攻め自ら鎮海王と稱す。十一年正月李長庚總兵許松年、王得祿と共に臺灣に至り賊船三十餘隻を燒獲し二月一日復た盡く洲仔尾の柵を焚きしかば蔡牽風浪の險惡なるに乗じて遁れ去る。仁宗玉徳が會剿せざるを怒り阿林保を以て之に代ふ。十月長庚蔡牽を粵洋に追ひて其姪蔡天來の船を殲し十二年春、粵の大星嶼に戦ひ十一月閩の浮鷹島に戦ひ十二月福建水師提督張見陞と牽を追ひて黒水外洋に至る。牽僅に三舟を存するのみ長庚撃ちて

牽の船を破りしが適々賊船船尾の礮に中りて戦死す。張見陞、庸懦にして船を進めず。蔡牽遂に安南海上に向ひて遁る。仁宗震悼し壯烈伯を追封し部將王得祿、邱良功をして其任を嗣ぎ長庚の爲に仇を報ひしむ。時に蔡牽朱潰臺灣後山の嘴仔蘭を窺ひしが土民生蕃等之を撃退す。十三年牽安南より回りて朱潰と合し浙江に入りて土盜張阿治と相應じて跋扈し、が巡撫阮元の離間策功を奏し朱潰獨り閩に赴き許松年と戦ひて敗死す。其弟朱渥并に張阿治相次ぎて部衆を率ゐて降る。翌年王得祿、邱良功と兵船を合して蔡牽を攻撃し黒水洋外に窮追し傷を負いて奮闘す。牽免るゝの途なきを見船を火さて海に沈む。是に於て閩浙の二洋全く平定す。

惟粵洋の海賊は猶ほ屈せず。初め安南賊船の破るゝや其餘黨の粵に止まるもの林阿發、總兵保、郭學顯、烏石、鄭乙の五幫あり。十四年百餘兩廣總督となり陸運を以て水運に代へしが爲賊徒小船を以て内河に入り宮兵の爲に捕斬せらるゝもの多し。此年秋總兵許廷桂盜首總兵保を殺し其所屬の船を圍みしに適々鄭乙幫の張保仔上風に顯はれて許廷桂敗死す。張保仔遂に入りて香山の大黃埔を掠めしかば百餘兵を率ゐて内外より夾攻し其走路を斷ちしが賊徒圍を突きて遁る。時に粵賊中勢力

あるは郭學顯と鄭乙との二幫なりしが郭賊降服に決し鄭乙幫を攻めて其船を奪ひ衆を率ゐて降る。時に鄭乙已に死し其妻亦降服の意あり遂に十五年二月省城に詣りて降を乞ふ。張保仔其衆を率ゐて香山海口にあり百餘單船に駕して其地に至り利害を説きて降らしむ。乃ち張保仔をして官軍と共に烏石幫を修州洋に攻めて其衆を俘にせしめ又東海幫、林阿發等を降し粵賊平定す。

十八年秋九月十五日仁宗木蘭に幸し駕を回すの時に乘じ天里教徒なるもの亂を作さんと謀る。天里教は一に八卦教と稱し河南滑縣の李文成直隸大興の林清之が唱首にして亦衆を聚めて財を斂むるものに外ならず。滑知縣之を知り文成を捕へて獄に下し其脛を斷ちしを以て九月七日其黨期に先ちて叛を謀り文成を獄より出して知縣を殺す。林清期に及びて潛に其黨と共に北京の内城に入りしも諸賊倉皇事を起し、を以て計畫顛倒し十七日黃村に於て擒にせらる。賊の内城に入るや皇次子親ら烏銃を取りて賊を仆し諸子中最も大功を建てしと云ふ。十九日車駕還宮して林清を誅し次で那彥成、楊遇春をして滑城を攻めしむ。初め滑城の賊起るや直隸の長垣、東明、山東の曹定、陶金、鄒等同時に蜂起せしが地方官吏の盡力により十

月山東平ぎ十一月直隸亦定る。滑縣は古の滑州の舊治にして城中一年の糧を貯ふるを以て容易に下らず。桃源の賊首劉國明潛に城内に入り文成を護して城を出て輝縣山に據りしが總兵楊芳の攻撃を受け文成自ら火を縱ちて焚死す。十二月十日地下の隧道成り滑城西南の一角を雷轟し勢に乗じて城を奪ひ逆首牛亮臣、徐安國等を俘にして北京に送る。時に陝西三才峽に箱賊なるもの起りしが那彥成轉じて之を攻め十九年正月に至りて悉く平ぐ。

第八節 回疆張格爾の亂

和卓木博羅尼都の子薩木克が赦罕に逃れしは第三節に記し、が如し。清朝其奮領恢復の舉あるを探知し赦罕王ヲマルと約し年に銀一萬兩を拂ひて之を看守せしむ。故に薩木克は遂に動く事能はざりしが第二子張格爾膽力あり父の志を繼ぎて竊に間を窺ふ。時に回疆の官吏虐政を行ひ喀什噶爾地方の人民塞外に移住するもの多く天山の布魯特も亦清國を怨む。嘉慶二十五年赦罕王ヲマル歿す。張格爾乃ち故國の脱走人等と與に奔りて布魯特に投じ其衆數百を率ゐて八月喀什噶爾の邊

塞を襲ふ。布魯特の頭目蘇蘭奇其舉を豫報せしも却りて章京設善の叱逐を受け怒りて賊に與す。領隊大臣色普徵額兵を率ゐて之を破り追ふて霍爾罕莊に至りしも途にして歸り參贊大臣斌靜と中秋の宴を張る。越えて六日始めて營所に赴き賊百餘を擒にし、が斌靜悉く之を誅して口を滅す。其後伊犁將軍慶祥の視察により斌靜の荒淫にして人心を失へるの事實發覺し免職に遭ひ且刑罰を受く。此年仁宗崩ず年六十五仁宗の第二子吳寧位に即く宣宗成皇帝是なり道光と改元す。

道光二年永芹を以て喀什噶爾參贊大臣となし、が亦撫馭の功を奏する能はず。時に張格爾ナリン河源に據り宗旨軍を唱へて義兵を募り四年秋五年夏屢邊塞を侵す。内地の回徒密に之に通ずるものあり清兵出れば輒ち遁る。九月領隊大臣巴彥圖兵を率ゐて塞を出でしが賊に遇はざりしを以て游牧せる布魯特の妻子百餘を殺して還る。其曾汰列克大に之を恨み所部を率ゐて張格爾を助け清兵の歸路を山谷に斷ちて之を殲す。十月慶祥を以て永芹に代へて參贊となし大學士長齡を慶祥に代へて伊犁將軍となす。六年六月張格爾、安集延、布魯特等五百餘を率ゐて開齋山路より回疆に入る。清兵迎へ撃ちて大に敗れ一隊は東阿克蘇に走り一隊は喀什噶爾

城を守る。七月敖罕王も亦大軍を率ゐて來りて張格爾を助けしが其約の如く領域を分つの意無を見急に去る。而かも各地の回民皆張格爾に應じ八月二十日喀什噶爾城遂に陥りて慶祥も亦戰死す。既にして張格爾西四城を恢復し和卓木の威權を以て白山黒山の兩黨派を調和し民心歸服し阿克蘇も亦動く。然るに張格爾徒に喀什噶爾にありて吏治の改革に従事し其機に乗じて東進せず部將渾巴什河畔に於て阿克蘇辦事大臣長清の破る所となり東四城僅に安きを得たり。

此年八月長齡を以て揚威將軍と爲し署陝甘總督楊遇春、山東巡撫武隆阿を參贊と爲し阿克蘇に會し征討に従事せしむ。十月大兵阿克蘇に集り翌七年二月諸將大兵三萬を率ゐて喀什噶爾に向ふ。張格爾大衆二萬を統べて洋阿巴特に出陣し此月二十三日を以て清軍を邀へて戰ひしが大敗して退却す。清軍進みて二十五日沙布都爾に克ち二十八日阿瓦巴特を陥れ勢に乗じて喀什噶爾を距る十余清里なる渾河の北岸に至る。敵兵其衆を悉して城に背き一戰せんとす會々夜半颶風起り沙塵空に滿ち物色辨ず可らず長齡退きて其露るを待たんとす楊遇春日く是天我を贊くるなりと。晦霧に乗じて上流を渡り上風に據りて大礮を發し勝に乗じて喀什噶

爾を復す時に三月一日なり。張格爾已に通れしを以て其甥姪と殘兵とを擒にし五日楊遇春英吉沙を復し十六日葉爾羌を復し此日楊芳又和闐を復す西四城皆平く六月楊芳阿賴に出で楊遇春色勒庫に出で張格爾を追捕せしが楊芳却りて敖罕兵の襲ふ所と爲り且糶糧に窮し得る所なくして歸る。宣宗諸將の孤軍を以て深入せるを責め遇春をして征討軍を率ゐて東歸せしめ楊芳を以て參贊と爲す。九月又直隸總督那彥成を欽差大臣と爲し回疆に赴きて善後の處分を行はしむ。

時に張格爾諸部に寄食し殘兵を糾合して再舉を圖らんとす。清朝之を獲て後患を斷たんとし爵郡王金十萬の賞を懸く。十二月長齡等回徒を塞外に出し揚言せしめて曰く清兵既に撤去して喀什噶爾にあらず住民首を翹て和卓木の來るを望むと。張格爾果して復た步騎五百を率ゐて潜に喀什噶爾を襲はんとし二十七日開齋山の舊路より阿木古城に入る。長齡楊芳備を嚴にして之を待ちしを以て直ちに撃ちて之を破り楊芳星夜追ふて喀爾鐵蓋山に至り斬獲殆んど盡く。張格爾僅に身を以て免れ後布魯特之を欺き執へて以て清廷に献す。八年正月報北京に達し長齡を威勇公に楊芳を果勇侯に封じ其餘諸將の功を賞す。初め張格爾の擒に就くや長齡敖罕

布哈爾に檄して其家族を索めしに敖罕答へて曰く兵民は出すべし惟和卓木の子孫を出すは回教の經典に於て其例なしと。乃ち那彥成楊芳に命じて盡く喀什噶爾地方に住せし敖罕人を拘留し其資産を没入して通商を絶つ。

此時敖罕王モハメットアリ汗輔相其人を得近傍の哈薩克を伏し喀拉提錦達爾瓦斯の諸國を略し國勢盛なりしかば兵力に訴へて清朝との通商を恢復せんとす。時に張格爾の兄モハメット玉素普布哈爾に在りしを以て之を迎へて軍中に奉じ道光九年九月其將ハククル及びブレシケル等をして流寓の喀什噶爾人と共に回疆を襲はしむ。參贊大臣札隆阿警を聞き兵を出して之を拒きしが各路皆敗れ玉素普長驅して喀什噶爾を奪ひ札隆阿は東南一里半なる漢城を守る玉素普敖罕兵をして漢城を攻めしめ自ら喀什噶爾兵を率ゐて英吉沙を略し又葉爾羌を取る。辦事大臣壁昌葉爾羌の漢城に據り札隆阿と同じく敵兵の圍む所と爲り僅に其壘壁を保つ。那彥成の子容安伊犁參贊大臣として援軍を率ゐて阿克蘇に至りしが賊勢を畏れて進まざりしを以て之を諤し長齡を以て欽差大臣と爲し楊芳等と赴援せしむ。會て敖罕布哈爾と隙を生じ、を以て翌年清軍の進みし時は既に其兵を召還し玉素普

も獨力抵抗の難きを知り清兵の近づくに及びて遁れ去る。十一年清朝放罕をして嚴に和卓木を監守せしむるに決し和約成り通商舊に復す。又喀什噶爾の參贊大臣を移して葉爾羌に屯駐せしめ壁昌を以て之に任す。是より回疆の吏治一新して稍々整頓し放罕も亦和卓木の監守を嚴にし喀什噶爾方面小康を得たり。

第八章 印度支那侵略の初期并に南洋諸島

(西紀一七〇八—西紀一八五二)

第一節 印度支那諸國の概観

印度支那とは亞細亞南方三大半島の最東なるもの即ち支那と印度との中間に位置せる半島全部の總稱にして西洋人は之を一に後印度又暹印度とも云ふ。印度支那にありて歴史上記憶す可き最古の王國は東埔寨國なり。東埔寨國民は一に吉蔑民族と稱し印度錫蘭島より此半島に移住し終に一王國を茲に建設せるアールヤ人種の一部なり。今より二千年前にありては半島に於ける東埔寨王國の勢力極めて隆盛にして印度より階級制度を輸入し在來の土人を奴隸視せるや疑ふ可らず。蓋し眉公河下流東埔寨の舊都アンコルの傍なる大湖の濱に嚴存せる殿堂寺院の遺址は皆這般奴隸の勞力に成りしものにして東埔寨王國の盛時を追想するに足る可きなり。西紀四二〇年佛教はじめて東埔寨に入り従來の婆羅門教に代りて國教とな

る。降りて西紀第十四世紀に至りて東埔塞カマボヂヤの國勢漸く衰へ西北に暹羅國起りて覇を争ひ東北には占城シヤンパ、安南等の諸國ありて頡頏するに至れり。風土記の序に眞臘國は或は占臘と稱し自稱して甘字智と曰ふとあるは即ち此國の事なり。扶南と云ふも亦此國の事ならむ。眞臘風土記は元の周達觀の著にして歷代小史卷の一百三に收む。

印度支那住民の多數は北方より移住し來りたるものにして苗子ミョウシ即ち堯舜時代の三苗の南移せるものに外ならず。紅河メイコン、湄南河ナム、瀾滯江ヤンナ、大金沙江カウツァイの上游より下游に向ひて侵略蠶食し分れて安南となり暹羅となり緬甸となる。安南國は初め今の東京に起る是即ち前漢以後隋唐以前の交趾コウチの地にして多く支那の歴代に屬し、が宋の初に當り西紀一〇一〇年豪族李公蘊なるもの自立して交趾郡王に封せられ都を大羅に建つ今の交都コウトなり。時に交趾の南に占城國あり占城は又占婆シヤンパと云ひ支那の南北統一以前林邑と稱し、地なり。西紀七六七年馬來人來りて交趾を犯し後又屬、占に來り終に占人をして悉く回教を奉せしむ。是を印度支那の東部に於ける回教王國占城の起源となす。李公蘊の孫日算ニツサン西紀一〇五五—一〇七二の時占城を襲ひて廣南、マリン、布政の三州を奪ひ帝を稱し大越と号す。天祚の時に至りて國運

殷盛に赴き宋帝より安南國王に封せらる蓋し安南の名の史上に見えしは曹魏の呂興、安南將軍に封せられしに始まり南方安撫の意なりしが茲に至りて始めて國号となる。西紀一二二五年公主昭皇の配陳照纂立して新朝を起し四世の孫焯の時西紀一二九三—一三一四占城王セマンに分主を興へ昭順昭化の二州を受く。其後占城と隙あり占城兵屢、交都を侵し陳氏の子孫衰微せるに乗じ外戚黎季犛なるもの權を專にし西紀一四〇二年實子を以て陳氏に代りて王位に即かしめしが西紀一四〇七年に至りて明朝の爲に亡さる。黎季犛攝政の時清華州に一城を築き西都と名けしより交都を東都と稱す。是より古昔の交趾の地を東京と稱し交趾の名稱南移す。

清華の土豪に黎利なるものあり藍山に據りて明軍に抵抗し西紀一四二八年明の羈絆を脱して獨立し都を交都に定め國を大越と号す。西紀一四七〇年黎灝占婆の都府ドゥバンを陥れ遂に其國を滅し其地を以て廣南州と爲し遺臣に少許の地を興へて其祀を奉せしむ。西紀一四七九年又西方哀牢即ち老撾を破りしかば緬甸も大に畏れて欸を通ず。西紀一五二八年權臣莫登庸黎氏を仆して位を奪ひしが清華

の土豪阮淦哀牢に走り黎氏の遺孤を奉じて義兵を起して清華の南邊に據る時に西紀一五三三年なり已にして阮淦死し女婿鄭檢代りて宰相と爲り其子鄭松西紀一五九五年を以て莫氏を逐ひ黎維潭を清華より交都に迎へ權を專にす莫氏は僅に高平大原二州を有するのみ阮淦の子阮潢順化廣南二州の知事たりしが鄭氏の下に在るを憚らず西紀一六〇〇年順化府に據りて廣南王と稱し鄭氏と絶つ潢の曾孫憲王福晋の時西紀一六五八年占城王を虜にして悉く占國を取り其領域南富安州に達し六州を有するに至る西紀一六七九年莫氏鄭氏の兵を受けて支ふる能はず支那に走りて明室の余黨に投じ莫氏亡ぶ阮憲王の子毅王福泰東埔塞の東邊を侵して其地を奪ひ嘉定福隆新平の三州を置き其子明王占國廢后の所領を奪ひ平順州を置く西紀一七五四年武王の時其一族を柴棍に封じ又東埔塞の大半を取る廣南王の領域益大なり。

暹羅國人の祖先は湄南河の上流に侵入せる苗族にして近世シャン族は自らタイニヤイト云ひ暹羅人を稱してタイノイト云ふ彼は大自由民是は小自由民の意にして共に同一種族に屬す而して暹羅國人は自らムアンタイと稱す自由國の義なり。

り其歴史の稍々信ず可きは西紀一三五一一年暹羅國の太祖チボウデーが東埔塞國の國勢陵夷せるに乗じ初めて其兵に克ち湄南河畔の要地アユーチア市を占領して國都となしに始まる西紀一三八四年復た東埔塞を襲ひてチンマイを略取し翌年進みて其國都を攻めしかば東埔塞王大に恐れ國都アソル府を退去し新都をノムメン市に移す是より東埔塞益衰ふ暹羅の西に緬甸あり大金沙江の流域にして其上遊を阿華即ち緬甸本部とし下遊を白希とす往古より離合常ならず西紀一五〇二年暹羅兵西の方緬甸白希を侵略ししが西紀一五四〇年緬甸トウングーの知事バイイーン、ヌンなるもの兵を起して白希を服し西紀一五五六年暹羅を攻めてアユーチアを陥れ附庸國となす然るに其暹羅出兵中白希に叛徒起りてバイイーン、ヌンを仆し暹羅も亦獨立す西紀一六〇三年暹羅に革命あり王族ソクタム自立して第二期の王朝を開きしが西紀一六三一年宰相カラホメ政權を篡奪して王位に登り第三期の王朝を起し其子ブラナライの時康熙四年二月を以て清朝に入貢し爾來時々進貢す歐人コンスタンス、フォールコンが暹羅國に仕へて宰相となり國政を改革しは即此王の時なり。

是より先明の萬曆中緬甸に犍體瑞なる者起り諸部を併呑し木邦、蠻莫、隴州、千崖、孟密、孟養の諸土司を征服し明朝に通ず。當時之と敵するは惟南掌、暹羅、景邁、古刺の諸國あるのみ。犍は國王の稱呼なり。犍應裏の時劉綎、鄧子龍等之を征して阿華を陥れ其後巡撫陳用賓、暹羅と聯合して屢之を破る。明の桂王緬甸に入りし時其遺臣李定國、孟良にあり。江國泰、暹羅の王女に配し馬九功、古刺に殘兵を擁し相犄角して緬甸を攻めんとし、が清兵が桂王を得るに及びて其舉を果さず。緬甸は又桂王を献ずるの功を恃みて清朝に貢せず。雍正九年景邁の使者普洱に至りて貢を求めし時緬甸其清朝の保護を得ん事を恐れしが雲貴總督鄂爾泰が貢使を拒絶し、之を知りて大に喜び明年入貢せん事を揚言し兵を興して景邁を攻め遂に入貢せず。景邁は緬甸の東にありて景邁、景線の二城ありて緬甸と世仇たり。

西紀一七五四年緬甸王犍達刺、錫箔諸夷の爲に滅されしが木疏土司雍籍牙 *Alom-
ga* なる者兵を起して阿華を克復し盡く諸部を臣とす。西紀一七五七年緬甸兵進みてメルグイ、ダヴォイ及びテナスセリムの各地を攻めて之を占領し漸く暹羅に迫る。雍籍牙西紀一七六〇年を以て殂し其子孟駁の時に至り西紀一七六六年暹羅

を攻めてアユーチアを圍み明年又大舉して之を圍み三ヶ月を経て之を陥れ且之を毀ちて去る。暹羅王マリントラ敗走して羈旅に殂し第三期王朝茲に滅亡し暹羅國大に乱る時に鄭昭なるものあり父は支那の移住者にして母は暹羅人なり人ど爲り猛勇桀黠兵を擧げて暹羅の爲に回復獨立を唱へ盤谷に據りて緬甸に抗敵し西紀一七六九年アユーチアを攻めて駐屯の敵將を殺し府民を盤谷に移し同地を以て新都と爲す。是より先東埔塞の先王ナクアンノン逃れて暹羅にあり暹羅先朝の王子又逃れて東埔塞並に安南領の河僊州にあり。鄭昭言を王族を求むるに托して兵を出し西紀一七七二年河僊州を占領し且南旺府を奪ひナクアンノンを王位に復す。時に武王の子惠王廣南王たり。翌年兵を兩道より出して暹羅兵を代ちナクアンノンを破りてナクアンノンを東埔塞王位に即かしめ西紀一七七四年暹羅と和す。鄭昭は又西紀一七七二年兵を發して馬來半島のリゴール(六崑)に克ち半島北部を附庸とし且此時緬甸が支那と隙あるに乗じ北部なる緬甸領のクラット州クラ州等を占領し西紀一七七三年悉く舊時の領域を復す。

第二節 清朝の緬甸遠征

初め雍籍牙の兵を緬甸に起すや盡く東北邊境の諸部を従へしが惟り桂家木邦の二土司兵を擧げて之に抗し前後敗れて孟抗に走る。桂家は故の明の桂王の官族の裔にして世々波龍の銀廠に據り富有の聞ありしかば孟連土司刀派春其酋宮裏雁の敗走せるに乗じ悉く其妻子と財産とを奪ふ。宮裏雁の妻曩占襲ひて刀派春を殺し清朝に降らんとす。然るに永昌知府楊重毅之を知らず功を貪て宮裏雁を誘致し之を戮し、かば緬甸王孟駭益々憚らず兵を擧げて清朝に歸服せる耿馬土司を襲ひ且木邦の逸酋を索ひ曩占走りて孟良に依り其援を得て普洱の南邊を侵し一旦敗れしが復た木邦の兵を假りて再擧を謀る。總兵劉得成等三路皆敗れ總督劉藻自殺す時に乾隆三十年なり。明年楊應琚總督となりて雲南に赴任し普洱の賊兵退軍せるに乗じ孟良の諸地を占領し土目を置く。初め孟連土司緬甸舊王朝の支屬なるを以て新王朝に服せず曩占彼此をして相争はしめ以て怨を報ひんと謀りしかば孟連忽ちにして緬甸兵を受け援を清朝に求む。此時楊應琚永昌に赴き屬吏の功を喜

ぶ者の爲に誤られ事局を滋すに至れり。

騰越州の知事陳廷獻なる者孟密土司の所屬なる孟斂土目を誘致して孟密を獻すと曰はしめ又故木邦土司の子弟の孟抗に在る者をして木邦を獻すと稱せしめ總督楊應琚を経て上奏す。然れども二部は固より緬甸の地にありて這般の虛式により清領と化す可きものにあらず。副將趙宏榜兵に將として變暮の新街を奪ひしが其地金沙江に臨み阿華の上游にありて形勝の地なるを以て緬甸兵直ちに之を回復し且進みて隴川の虎踞關に薄る。提督李時升之を關外に防ぎしも勝敗決せず緬甸兵一隊を分派して萬仞關より清領に侵入し永昌騰越の邊境を掠めしが和を講じて歸る。然るに二土司の地新收の上奏を實にせんとし李時升再び哈國興等をして新街に向はしめしが敵兵前にありて進む能はず楊應琚も亦朱崙等をして木邦を伐たしめしが適々瘴癘の起るあり敗走す時に三十二年四月なり。楊應琚乃ち新附の地を棄つるを請ひしが乾隆帝北京にありて遠く南方の實情を審にせず應琚時舛等を罰し新に緬甸遠征の師を起す。

明瑞將軍兼總督に任せられ二萬三千の大兵を率ひ參贊額爾登額をして孟密老官

屯より北路を攻めしめ親ら木邦孟良より東路を攻め九月二十四日を以て發す。十一月八日明瑞進みて木邦に至りしに守城の緬甸兵皆風を望みて遁れしかば兵を留めて之を守らしめ錫箔江を渡り蠻結を攻めて之に克ち象孔より孟籠に向ひて敵の糧食を奪ひしが北路の消息なきを以て木邦に退軍せんとす。緬甸兵阿華に向はず衆を悉して來り追ふ。明瑞且交戦し且行軍し象孔を経て小猛育に到りしに敵兵數萬已に蟠集して前路を遮る。是より先北路の額爾登額老官屯の敵兵に阻げられて進むを得ず其後明瑞赴援の命に接し、も急遽之に赴かず。故に老官屯の敵兵并に間道より木邦を襲ひて守兵を破りし敵の分隊皆會す。明瑞乃ち軍士をして夜に乗じて遁れ去らしめ親ら手兵を率ゐて殿戦し領隊大臣觀音保、札拉豐阿以下の諸將と共に皆戰死す。時に三十三年二月十日なり。額爾登額死罪を以て罰せらる。緬甸王明瑞の勇敢なるを見大に懼れ俘卒を歸へして和を求め副將軍阿里衰之を奏上し、が朝廷許さず。

三十四年春大學士傳恒を以て經略となし阿桂、阿里衰を副將軍と爲し滿洲蒙古の諸兵を増發す。傳恒四月一日を以て永昌騰越に至り進軍の路を定め七月二十日親

ら大軍を率ゐて出發し西金沙江上游の憂鳩江關榔江を渡りて孟拱孟養の兩土司を威服す。阿桂偏師を率ゐて虎踞關を出で東路より進みて孟密を取り九月下旬蠻暮の野牛壩に於て戰艦を造り兩軍の聲勢を通ず。十月一日傳恒江を渡りて蠻暮に抵り蠻暮江より金沙江に出で敵の水陸來り犯すに會す。阿桂、阿里衰兩岸に分れ哈國興、海蘭察舟師に將として之を邀へ三路皆勝つ。時に傳恒、阿里衰病に罹りしを以て阿華に向ふを止め老官屯の敵城を攻む。老官屯は金沙江に臨み前年額爾登額の進軍を阻げられし堅城なり。城將清兵の攻撃急なるを以て益々懼れ和を請ふ。時に阿里衰已に軍中に病死し傳恒の病も未だ癒えず清將も皆和を主とす。清帝大軍の再舉以て國威を張るに足るを思ひ緬甸王が使節を傳恒の許に遣して入貢を請ふを聞き老官屯の議を允して師を班さしむ。又孟拱土司を關内に遷して關外の地を棄て阿桂を雲南に留む。

此前後緬甸が暹羅と隙ありしは已に前節に記し、が如し。阿桂此機に乗じ大舉して緬甸を征し其約の如く入貢せざるを責めんとして其職を免せられ温福之に代る。翌三十六年金川叛し温福阿桂皆四川に赴きしかば緬甸兵を出して暹羅を攻め

しも克つ能はず。其後緬甸王孟駭死し其子贛角牙立ち四十一年金川の平定せるを聞き懼れて入貢を請ひしが約の如く捕虜を還付せず。阿桂李侍堯と復た雲南に赴きて兵備を嚴にす。四十四年緬甸の酋孟魯なる者贛角牙を殺して自立し、が國人又孟魯を殺して雍籍牙の季子孟雲 *Bhodan Phra* を立つ。孟雲は幼より僧となり戰爭に與らざりしかば暹羅の漸く盛ならんとするを見清朝に通せんとするの志あり。暹羅王鄭昭使節を清廷に派して緬甸に勝つを報じ其使節四十六年を以て北京に至る。四十五年暹羅に革命ありて貴族等鄭昭を廢し前朝の王族サン自立し四十七年其子鄭華即位し五十一年清朝より暹羅國王に封せらる。是を暹羅現王朝の太祖とす。孟雲益々懼れ五十三年使節を北京に派して捕虜を還付し五十五年乾隆帝の八旬萬壽を賀し緬甸國王に封せられ十年一貢を約す。

第三節 清朝と安南との關係

順治十六年四一清兵雲南を定むるや安南國主黎維視は使を遣して軍に至らしめ康熙五年其子維禧安南國王に封せらる。十三年清帝復詔を下して六年に兩回進

貢の例を定む。六傳して黎維禱の時に至り政權益々下移し攝政鄭棟遂に世子を殺して金印に據り篡立を圖るの意あり。而かも廣南王阮氏の富強を忌み其攝政の人心を失へるを聞き西山の土豪阮文岳を誘て兵を擧げしむ。阮文岳其弟文惠文慮と兵を起し自ら西山黨と稱し乾隆三十八年四七悉く平定州を取り鄭棟南侵して順化府に入る。阮惠王通れて下交趾即ち今の佛領交趾に至り兵を募り四十年を以て西山黨を伐ちしが克たず。四十三年惠王敵手に落ちて殺され姪晉政位に樂嘉に即きしが亦同一の不幸に遭ひて縊れ死し、を以て翌年晉政の弟福映位に即き儘に下交趾の一部を領す。是を嘉隆王とす。四十八年文慮文惠大舉して柴棍を奪ひミト府を陥れしかば嘉隆王舟に乗して海島に遁れ翌年暹羅に倚る。五十年文岳自ら大帝と稱して中交趾を治め文慮をして下交趾を統べしめ文惠をして上交趾を奪はしむ。蓋し上交趾廣平廣治廣德三州の地は亂後鄭氏之を占領し、が茲に於て文惠の有となる。鄭棟自ら鄭靖王と稱し阮文惠自ら泰德王と稱するも黎維禱如何ともする能はず。

五十一年五〇鄭棟死し其子鄭宗鄭幹大に闕き幹其臣貢整を廣南の文惠の許に遣

して赴援を乞ひ宗を滅し、より文惠黎氏の攝政と爲り政治を左右す。幾もなくして黎維禎殂し、かば文惠其孫維祚を立て、位に即かしめ貢整をして都城を守らしめ悉く財寶を奪ひて廣南に歸る。已にして貢整が黎氏の爲に謀るを聞き其將阮任をして兵數萬を以て交都を攻めしめしかば貢整戰死し維祚出奔して翌年北京に至り援を請ふ。茲に於て阮任又東京に據りて自立するの志あり。五十三年夏文惠復親ら黎京に赴き阮任を誅して維祚を迎へて位に復せしめんとし、が維祚其精神の測り難きを知りて應せず。文惠人心の歸服せざるを察し盡く王宮を毀ち兵三千を留めて黎京を守らしめ富春に回る。高平府督阮輝宿なる者王族を奉じて高平より舟に乘じ廣西省太平府龍州附近より清領に投ず。兩廣總督孫士毅、廣西巡撫孫永清前後上奏す。清帝王族を南寧府に置き黎氏が百餘年間奉貢を怠らざりしを以て阮文惠に對して問罪の師を出す。

孫士毅提督許世亨と兩廣の兵一萬を率ゐて十月下旬鎮南關を出で諒山鎮より路を分ちて進む。沿道の兵民簞食壺漿して清兵を迎へ敵兵奔竄僅に三江の險を保つ。十一月十三日廣西の兵壽昌江に克ち十七日市球江を渡り十九日全軍富良江に薄

る。富良江は即ち紅江にして黎京河内府の外門なり敵兵衆を悉して南岸に陣す。許世亨夜に乗じて敵の舟を奪ひ兵二千を渡して敵營を襲ふ。敵兵暗夜清兵の多寡を辨ずる能はず大敗す。黎明清兵悉く濟り黎氏の宗族百姓の歡迎を受け孫士毅許世亨以下城中に入る。宮室蕩盡して王城の觀なし。黎維祚民村に潜伏し、が報を得て此夜二鼓に至り軍營に詣りて孫士毅に會見す。初め清兵の發するや清帝豫め封冊を撰ばしめて軍前に郵寄し便宜事に從はしめしを以て二十二日孫士毅遂に詔を宣べて黎維祚を安南國王に封じ使を孫永清の許に派して其家族を歸さしむ。詔して士毅を謀勇公に封じ諸將士皆賞あり乃ち師を班すを命ず。孫士毅功を貪り阮文惠を得んとして軍を河内に留め且其來降の説を信じ敢て備を設けず。

文惠間諜を放ちて清軍の動靜を探り五十四年正月一日大舉して河内を襲ふ。時に城中置酒高會樂を張りて新年の宴を擧げしが夜に至りて忽ち警報あり倉皇敵を拒ぎしが衆寡敵せず暗夜相蹂躪す。黎維祚王族を挈けて先づ遁れ孫士毅も亦急に富良江を渡り追騎を怕れて浮橋を斷つ。此に於て許世亨以下諸將士役夫を合せて萬餘皆溺死す。黎維祚母子復清領に投じ士毅走りて鎮南關に回り悉く關外の兵站

を撤す故に士馬の還る者蓋し征者の一半に及ばず。清帝孫士毅が詔を奉じて早く師を班へさず此大敗を來しを怒りて其職を免じ福康安を以て之に代ふ。阮文惠既に安南を威服し其兄文岳が暹羅と事あるに際し深く清兵の再舉を懼れ名を阮光平と改め其の兄子光顯をして表を奉じて清朝に入貢せしむ。清朝黎維祁が再び國を奪て國土を守るの器なきを以て北京に在りて餘生を送らしめ阮光平の請を允す。五十五年阮光平北京に至りて清帝八旬の萬壽を祝し封を受け歸國し五十七年三月を以て歿し子阮光纘嗣ぐ。光纘自ら阮黨の總督と稱し伯父文岳と和せず遂に文岳を殺して其地を併せ又叔父文慮を殺しが是より國勢漸く衰へ遂に阮嘉隆王の爲に亡さるゝに至る。阮光平父子が軍費の出處に苦み海賊を獎勵しより支那閩粵江浙の大患をなせし其顛末は已に前章に詳述せり。

第四節 佛國安南侵略の端緒

佛蘭西の宣教師が布教の爲め交趾^{コチンチン}并に東京^{トウキョウ}に入りしは共に西紀十七世紀の前半に在り其後西紀一七四九年佛王ルイ十五世植物學者セニエール、ボアールを以て全

權公使と爲し順化府に遣はし佛安兩國同盟互市の約を定めんと謀りしが阮武王之に應せず時に宣教師バンヌタなる者ボンデシエリ^{ボンデシエリ}に在住の佛領印度總督ヅエブレ^{ヅエブレ}の補助を得弊費を齎して阮王に説き兩國の通信漸く成りしが西紀一七五三年基督教徒驅逐の舉ありバンヌタ逃れて佛蘭西島に至り數年の後死歿す。降て嘉隆王敗軍の際佛人の船員を業とするもの二人王を助けて西山黨と戦ひし事あり。已にして嘉隆王暹羅に倚り其援兵を得舊臣を收拾して下交趾を襲ひしが文岳文惠援軍を率ゐて來るに及び樂嘉の一戰大敗し殘卒辛じて暹羅に歸る。嘉隆王再舉を謀らんとするも居常孤立して四方復た援軍なし。獨り佛蘭西の宣教師マヘ^{マヘ}、マ、ビニョ^{マ、ビニョ}終始陪從して恢復の策を講じ嘉隆王に勧め其本國佛王の助を求めしむ。嘉隆王之を容れビニョ^{ビニョ}六歳の太子景敵と共に發し西紀一七八六年二月の終を以てボンデシエリ^{ボンデシエリ}に到り遂に佛蘭西に達す。西紀一七八七年十一月二十八日ベルサイユ^{ベルサイユ}に於て佛の重臣モンモレンシ^{モンモレンシ}とビニョ^{ビニョ}との間に佛安兩國同盟假條約成り佛國援兵を出すを約し安南ツラヌ港^{ツラヌ港}（化南郡）並にブローロー、コンドール島の割與を約す。時に佛國は大革命破裂の夕なりしを以て遂に本條約の締結を見

ざりしが將校數十人自ら奮ふて安南王の舊領回復を助けんとするものあり。景嗣援兵を軍艦二隻に搭し歸國の途に就く。嘉隆王暹羅國都盤谷に在りて一日も心を安せず西紀一七八八年遂に一小軍を募りて西山黨を伐ち河僊果茂の二州を復す。敵將離間の策に動されミト府柴棍府も相次ぎて回復され文慮支ふる能はず先邊和に據り遂に歸仁に走る。佛人ヒニョー是より先援軍と共にボンヂシェリーに着し總督コンウエー侯に王命を傳へて指揮を乞ひしがコンウエー侯將官ロジリーをして代て援軍を督せしめ自ら出でずロジリー將校二十餘名と柴棍府に達し嘉隆王の軍氣大に振ふ。大尉オリビユー最も勇名あり直ちに土兵と共に歸仁港を襲ひ敵の戰艦數隻を粉砕し其藥庫を火く。其後阮文惠死してより西山黨の勢ひ見る可きものなく文岳文慮共に内亂に仆れ衆漸く離散す。西紀一七九四年嘉隆王の軍進みて平順衛莊の二州を取り敵兵佛人の野砲に辟易して退く。西紀一七九九年四月歸仁州城圍を受くること二ヶ月の後遂に下り阮光纘僅に身を以て免れ東京に入る。嘉隆王敢て之を追はず船を以て迂迴して直ちに順化府に向ひ祖先の宮殿に入り其近傍諸州を略取す。茲に於て安南又二王あり

り共に阮氏を稱し一は順化府に治し一は東京に據る。歸仁州下るの年十月九日僧正ヒニョー同州に死し、を以て嘉隆王大に之を惜み柴棍に其遺骸を葬りしと云ふ。

阮光纘日夜順化朝の隙を伺ひ西紀一八〇二年其儉安の姿あるに乗じ急に兵を東京交趾の境上に出す。順化の兵能く戦ひ敵兵を破りて東京に入りしかば光纘僅に河内を守るのみ。六月嘉隆王自ら諸軍を督し長驅して河内に向ひしに沿途の諸壘皆迎へ下り交戦數日の後河内陥り光纘以下皆縊死を遂げ黎氏の舊封東京悉く順化の朝廷に歸す。是より先阮王居常自ら稱して主と曰ひ一に黎氏の正朔を奉じ其滅亡の後も猶ほ黎維禰の年號を用ひしが是に至り自ら稱して安南王と云ひ嘉隆の號を國中に布く實に西紀一八〇二年^{嘉隆七年}八月なり。嘉隆七年十二月嘉隆王使を清國北京に遣はし其先世黎氏の爲に仇を復するの願未を陳べ國號を改めて越南と稱せんことを請ふ。嘉隆王は曾て同四年に於て阮光平父子の命を受けて海賊に従事せる清人莫扶觀等を捕縛して清朝に献じ、事あり故に清國皆其請を允可し嘉慶九年終に阮福映を封じて越南國王と爲し且二年一貢四年一朝の制を定む。

初め嘉隆王大に佛の將校を優待せしがビニョーの死後佛人を待つ禮大に前日に異なり西紀一八一〇年太子景敵の死後却りて外國布教の士を放逐するの意あるに至る。時に佛國國事頗る多端にして安南の事又顧みるに遑あらざりしが路易十八世王位に即くに及びて西紀一八一八年ケルガリユーをして來りて舊好を修めしめしむ。嘉隆王援軍の將校の猶ほ生存せるものをして使節を款待せしめしが其西紀一七八七年の盟約を尋がんことを乞ふや遷延決答を與へず。西紀一八二〇年一月二十五日王殂し第二子福敏代りて位に即き明命と改元するに及びケルガリユー終に使命を果す能はず。西紀一八三一年佛國復たビニョーの徒セーニョーを以て辨理公使となし國書を齎らし安南に至らしめしが明命王拒みて入れず亦た國書を請けず。終に大に基督教徒放逐の令を發し、が下交趾の總督黎文悅之を諫めしを以て明命王其死を待ちて墓塔を毀ち且其黨を柴棍府に攻め益々佛國宣教師を殺す。西紀一八四一年一月二十一日明命王落馬して死し其子福璇位に即く是を紹治王とす。紹治王の時に至りて基督教徒の殘虐さるるも益々多し順化府中佛國宣教師六人を幽す。西紀一八四四年駐清佛國公使ラクルネー軍艦をツォーラーヌに遣はし

て其放免を求め翌年其目的を達す。越えて二年西紀一八四七年海軍大佐ビエール駐清公使の命を受けツォーラーヌ港に至り駐在外交官の囁着政略を怒り四月十五日安南軍艦を砲撃し其一隻を沈没し其一隻を破砕す。是を佛軍安南を侵すの濫觴と爲す。紹治王激怒して在留佛人虐殺の令を下し藎人を造り之に佛衣を着けて銃殺するに至る。此年十一月四日王發憤して遂に死し其子福璠代りて位に即き元を嗣徳と改む。佛安の關係甚困難なるに至れり。

此間安南と東埔寨延き暹羅との關係も亦略述せざる可らず。西紀一七九七年ナクアンシヤンが父ナクアンインに繼ぎて東埔寨の王位に登りしは嘉隆王の盡力少からざるを以て安南統一の後西紀一八〇七年ナクアンシヤンは安南に入貢し、事あり。ナクアンシヤンに三弟あり西紀一八〇九年暹羅王鄭華殂し其子ロットラの立つや翌年三弟を送りて其國に入らしめ封地及び官位を求めしにナクアンシヤン之を拒みしより東埔寨國內二派に分れて互に相争ふ。西紀一八一二年暹羅兵東埔寨の國都ラヒーを攻め三弟を助けしかばナクアンシヤン遂に柴棍に遁れしが翌年安暹兩國の間に和成り東埔寨國都を南旺に移す。西紀一八二四年ロットラ

の子ナンクロー暹羅王となり勇武能く兵を用ゆ西紀一八三二年兵を出して東安南の下交趾を侵し南馬來半島のバタニ、ケダ、ツリシガマ、ケランタンの諸邦を貢屬國とす。其後又北は老撾國と戦ひて其酋長を擒にし東は安南を破りて眉公河左涯を併吞す。西紀一八三五年ナクアンシヤン殂し次女ヌゴクバン東埔塞王位に即きしより前王の弟ナクジュオン暹羅國の援兵を得て西紀一八四〇年を以てヌゴクバンに抗しヌゴクバン昭篤府に遁る。是より數年東埔塞は三國の戦區となりしが西紀一八四七年に至りて和議成りナクジュオン王位に陞る。ナクジュオン乃ち拔坦邦、アンコール二州を暹羅に謝し嘉定昭篤二州の主權を安南に讓る。暹羅王ナンクローは又西紀一八四四年を以て緬甸を侵してチンハイ并にチンセンの二州を占領し西紀一八五一年を以て殂す。

第五節 英國の緬甸侵略

英國と緬甸の交渉は西紀第十八世紀の末年に於て已に其端を發せり。蓋し緬甸王孟雲は同國史家の説に據るに其父雍籍牙に次ぐの英主にして西紀一七八四年東

方に於ては暹羅の境上なるマルタバシ并にテナッセリムの兩州を服従し西方に於てはアラカンに占領して英領ベンガルと接壤す。然るにアラカンの人民緬甸王に心服せず兵を擧げて獨立を謀り破れて英領ベンガルに遁る。英領印度總督スア、ジョン・ジョーア、衝突を來すとを好まずアラカン州知事の請求に應じ亡命者を引渡さんとせしが後任のエルズリ侯は強硬なる方針を取り國事犯罪者の引渡を諾せず。而かも緬甸政府と協商する所あらんとし大佐サイムス等を阿華に派遣せしも孟雲の政府は英人を以て一種の商人に過ぎずとなし敢て之に應ぜず。且政事上の犯罪者の引渡を反覆し新にナフ河境上の英領の側なる島嶼の所有權を争ひ兵をベンガルに出さんどす。西紀一八一九年バジイ、ダウ孟雲に繼ぎて緬甸王となり前代の方針を變せず。西紀一八二二年其將アンツラ兵を率ゐて緬甸ベンガル中間の諸國を襲ひアッサム、マニポールの兩國を征服しカチャルを侵す。遂に進みて英領に入り英人の使用せる土民兵の一隊を殲す。當時英國の輿論は激しくヘスチングス侯の侵略政策を攻撃せる際なりしかばアマアスト卿は力めて戦端を避けんとし、が事茲に至り又如何ともする能はず遠征の師を出すに決す。

西紀一八二四年五月スアアルチボルト、カメル總督アマアスト卿の命を受け遠征隊に長として緬甸のラングーンに着す。緬甸兵木柵を築造して防禦に充てしが到底英國砲兵の敵にあらず英軍直ちに上陸す。然るに市民悉く附近の藪澤に遁れて家畜と穀物とを剩さず殊に雨季に迫りしを以て敗兵を追撃して進む能はず英軍悉くラングーンに屯營す。緬甸政府英人がベンガルの境上に防禦の職員を出すを期し、に敵兵突然海上よりラングーンに現はれしを見て大に驚きブンヅラに命じて之を拒がしむ。此年十二月ブンヅラ六萬の陸兵を率ゐてラングーンに至りしが英軍の攻撃を受けて敗軍し殘兵を收めて大金沙江の沿岸を溯りラングーンを距る四十哩のドナビユーに據りて防禦の策を講ず。翌西紀一八二五年英軍分隊をしてドナビユーに當らしめ本隊は阿華に向ひしが遂に緬甸兵の攻撃を受け全軍ドナビユーを圍む。偶、ブンヅラ英軍の砲發せる彈丸に中りて戦死し緬甸兵將校の代りて之を統率するものなく全軍潰亂英兵進みてプロームを取る。阿華政府非常に恐れ或は巫女の一族をプロームに派して英軍を弱めんとし或は王弟タラワヂ親ら出軍して敵兵を海上に驅逐せんと揚言せしが英兵の勢益強く漸く國都に迫

る國王バジイ、ダウ遂に屈し西紀一八二六年二月二十四日ヤンダゴに於て講和條約を締結す。此條約に於て緬甸は軍費として百萬磅の償金を諾しアッサム、アラカン、テナッセリムの三州を英國に割讓す。是を第一次の緬甸戦争となす。ヤンダゴ條約成るの年英人ジョン、クラウフルド通商條約締結の目的を以て阿華に至りしが緬甸王疾く戦争當時の事を忘れ英國の使節を優待せず。國王獄吏の女を納れて王妃とし王妃年長にして國王を左右シクラウフルド得る所なくして歸る。而かも英國政府は第一次の緬甸戦役に於て莫大の軍費を要し職員多く疾病に苦しみしを思ひ和親を望む事切也。西紀一八三〇年大佐ブルネイ、ヤンダゴ條約の規定に従ひ理事官として阿華に赴きしが緬甸政府は外交官を以て間諜なりと誤信し敬意を表せず。西紀一八三七年阿華の宮城に革命あり王弟タラワヂ國王バジイ、ダウの發狂せるを利して之を廢し王妃太子大臣等を悉く殺し自立して緬甸王となり都をアマラブラに遷す。大佐ブルネイ新王が英人を嫉視せるを知り虐待を受けて英國政府の耻辱を生ずるを好まず國都を退去す。當時の英領印度總督アウ克蘭ド卿大佐ブルネイの處置を怒り他の理事官を派遣せしがタラワヂの態度

豫期の如く理事官風土の悪しき上緬甸に於て苛刻なる待遇を受くるを好まず幾度人を更ふるも皆疾病の口實を設けラングーンに退く。西紀一八四〇年タラワヂ遂にヤンダボの條約に背き理事官の國都に滞在するを拒みアウクランド卿も亦強て其權利を主張せず翌年タラワヂ親ら大軍を率ゐてラングーンに赴き前年英人に割讓せるアラカン、テナッセリムの二州を還付せしめんとせしが同地に近づくと共に前年の敗軍を想起して戰端を啓くの勇氣を失ひ佛寺の爲に大鐘を鑄造し工竣りて國都に還る。

已にしてタラワヂの暴政益々甚しく其外交に於けると其内治に於けると些の差等なく漸く民心を失ふ。西紀一八四五年怒に乗じて大臣を銃殺し、とも云ひ王妃を刺殺せしとも云ひ爲に王宮に叛徒現はれ爾來タラワヂの處在を聞かず又其最後を聞かず長子バガン、メン此年より緬甸王となる。バガン、メンは父王に比するに又數等の庸主にして父王の否徳を有すると共に父王の威儀を有せず國都を阿華に徙して鬪鬪、開羊、賭博を以て消閑の具となし國事混亂一の見る可きなし。當時英國の商人はラングーンに在留して貿易に従事せしが同地の地方官も亦暴政を行ふに躊躇せず條約を無視して外商を保護せず却て之に重税を課し之を禁錮の刑に處するに至る。西紀一八五一年ラングーンに在留の商人遂に之に堪ゆる能はずカルカッタの英領印度總督府に向ひて之を訴ふ。總督ダルフージ卿少將ラムベルトをして軍艦フォックス號に乗じてラングーンに赴き事實を調査せしめ且阿華政府に對する詰問の書を携帶せしむ。フォックス號のラングーンに着するや同地の地方官は在留の歐人と軍艦との通信を嚴禁せしが禁を冒して船中に至るものあり遂に詰問の書を緬甸國王に發す。數週の後回答あり前任の地方官を罷免し事實を審問せんとありしかば少將ラムベルトは事局の穩に終結すべきを豫期せしに豈料らんや新任の地方官も亦前任者ど一の異なるなく英國使節に對し會見の日を定め正午定刻に至りて之を訪ふや睡眠中なりと稱して門前に佇立せしめ親ら窓に倚りて英人の大暑に苦むを見敢て心を動かさず。

少將ラムベルト此屈辱に遇ひて忍ばんとするも忍ぶ能はず河上に碇泊せる國王の船を奪ひ一萬ルビーの損害賠償金とラングーン地方官の謝罪狀とを要求す。地方官之に答へず直ちに緬甸兵に命じて西岸の木柵に據りフォックス號を砲撃せし

めしが精銳なるフォックス號の砲門は直に木柵を破りラングーン港を封鎖す。ダルフーリー卿一面國王に向ひて熟慮を求め一面戦端の準備をなし少將ゴドウィン陸兵五千八百に將として水兵二千三百人之に伴ひ氣船十九隻舳艫相含みてラングーンに着す。先一船をして艦頭に休戦旗を掲げ國王の回答を求めんとして大金沙江を溯りしに忽ち緬甸兵の砲撃を受けしかば全軍直ちに上陸し激烈なる砲撃の後ラングーンを占領し次でパセーレン并にブロームニ市を占領す。緬甸兵皆上緬甸に敗走し人民は皆ラングーンに來集して英人を歓迎す。時に阿華に復革命ありてバガン、メンの位を廢し其義弟メンドンメンを寺院に迎へて緬甸の王位に即かしむ。新王メンドンメン講和を望むも條約を締結するの意なし。九月ダルフーリー卿親らラングーンに赴き遂に此年十二月二十日の條約を以て自希州を英領に加へ緬甸王をして上緬甸を領せしむ。茲に於てラングーン港は英人の有に歸し降りて西紀一八六二年に於て英領緬甸州の首府となり益々繁盛の域に達す。是を第二次の緬甸戦争と爲す。

第六節 和蘭瓜哇侵畧の大成

西紀一七一七年瓜哇帝ビユーガル殂し其子親王アヂパチ、アマング、ナゴラ Adipati Amangku Nagora 蘭人の承認を得て帝位を襲ぐ。西紀一七三一年帝殂し其子バクナア ナセナバチ Pakubwana Suraapati の時に至りてバタビアに支那人の叛乱あり。當時バタビアは南洋貿易の中心點にして各國の商人群集し殊に商機を見るに鋭敏なる支那人は其富蘭人に匹敵し各國人の嫉を受け葛藤絶えず。蘭人支那人の在住者多きを憂ひ先二百人を拘引して錫蘭に送ると稱し洋上に至りて之を海中に投ず。報知のバタビアに達するや支那人大に憤激し郭外ガンダーリアの地に集合しシパンジャンなるものを推して將とし蘭人を襲はんとす。其兵五千と稱す。已にして叛徒バタビア城に薄る。蘭人叛徒に與せずして城内に留る支那男子を盡殺するの令を下し殆ど九千人を虐殺し悉く其財産を掠奪す。在瓜哇の支那人各地に兵を擧げ蘭人に抗せんとす時に西紀一七三七年なり。瓜哇帝此機に乗じ先支那人を助けて蘭人を逐ひ後に支那人に及ぼさんどす。故に陽に蘭人を助くるの爲をなし突然首府駐屯の蘭兵を襲ひて其將校を屠る。蘭人初めて給れしを知る。然るに瓜哇帝漸く支那人